

陽気なガールは転生したのちボールを転がす

敏捷極振り

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

ある日、理由も死因も分からないまま死んでしまった女子中学生の結城は、死後の世界で突如現れた神と名乗る少年と出会う。神様の気まぐれか、ひよんなことからイナズマイレブンの世界へと転生することになった結城は、サッカーを通じて様々なキャラクター達と触れ合い、団結しあつて世界の強豪たちに挑む。

### ※注意

本ストーリーのFFIでは女性プレイヤーも参加可能という設定で進んでいます。

本作品は作者の完全な趣味嗜好ですので所々不快と感じる場面多々あります。

# 目次

プロローグ	1
1話 日本代表候補集結！	3
2話 誕生！ イナズマジャパン！	12
アジア予選編	
3話 合宿開始！	22
4話 呪われた監督	30
5話 VSオーストラリア戦	41
6話 新必殺技炸裂！	49
閑話その1	56
7話 灼熱の特訓	60
8話 VSカタール戦	66
9話 砂漠の戦士	73
10話 ハードワーカーとファンタジスタ	80
閑話その2	88
11話 ネオジャパン襲来！	94
12話 一筋の光	103
13話 初めての挫折	108
14話 アンクルブレイク	114
閑話その3	122
15話 風前の灯火	128
16話 泥だらけの純情	134
17話 それぞれの想い	139
18話 VS韓国戦	148

## プロローグ

——ふと気がつけば、真つ白な空間にいた。

「やあ、気分はどうだい？」

目の前にはごく普通の平凡そうな少年が立っていて、こちらに語りかけてくる。つか、アンタ誰？　ここはどこ？

「僕は神。ここは死後の世界と言えはいいか」

……ほう、なかなかの電波少年と見た。どうやら色々と頭が逝っちゃってるらしい。自分の事を神と言うくらいだ。やばいヤツに違いない。

「うん、どう思われようと僕の知ったこっちゃないけど、キミが死んだのは確かなんだ」

うん？　今なんて？

よく聞こえなかったからもう一度はつきりと言ってもらえないかな。

「キミは一度死んだんだよ」

H A H A H A、またまたご冗談を。そんな嘘みたいな話がある訳ないじゃないか。

「いや君は確かに死んだんだ、理由は覚えていないだろうけどね。特に教える義理もないから詳しい死因とかは言わないよ」

ふーん、で？

「あれ、あんまり驚かないんだね」

いや、なんだろうね。胡散臭すぎて……。あんまり頭の処理が追いついてないというか。

「いわゆる神様転生系なストーリーの典型的な流れなんだけど、もしかしてソレ系の小説とか読んだことある？」

あつ、もしかしてどこかのアニメとか漫画の世界に転生させてくれるって話し？　えつ、てかマジ!?　やった！

「おお、急にテンション上がったね」

いやだつて、現実じゃ考えられないじゃない？ まさかそんな夢みたいなのがホントにあるだなんて、私わくわくすつぞお！ てか、マジで死んだの……？

「だからさっきそう言ったじゃないか」

まさかホントだとは……。私、南無三。

「まあいいや……それで早速転生先についてなんだけど、キミの脳内に強く印象付いてある一つの漫画の世界『イナズマイレブン』にしようと思うんだ」

マジですかヒヤッホイ！

あの雷門イレブンきつてのイケメン風丸くんとか神にも匹敵する美しさのアフロデイくんとか帝国一甘いマスクを持つ佐久間くんとか「うんもういいよ」えっ、ちよっ。

「キミの淡くも不純な愛は十分伝わったから。とにかく、イナイレの世界に転生させようと思う。容姿は前世のままにして、記憶も引き継ぐ形にしておくから。あと色々と設定も付けるけど、ここはランダムだから我慢してね」

ちっ、使えねー自称神様だなおい。

「女の子がそんなこと言わないの。とりあえず、次に目が覚めた時にはもうすでにイナイレの世界だから、ゆっくり楽しんでみなよ」

——そう言つて神様はすうっと眩い光を浴びて消えていった。

## 1話 日本代表候補集結!

気が付いた時には、私は学校の体育館のような場所で壁に寄りかかっていた。所々にカミナリマークのシンボルがある、ということはこの雷門中の体育館か。どうやら無事にイナイレの世界に転生されたみたいだ。あの自称神様はホンモノらしい。

周りを見てみると、なぜか雷門中サッカー部の面々や帝国の佐久間、白恋中の吹雪にエイリアのヒロトまで豪華なメンツが勢ぞろいしていた。なんだろう、まるで日本中からかき集めた精鋭たちでも集めるかのような。あれ、てかもしかしてこれって……。

「みんな揃っているみたいだな」

その時、体育館の入り口が開いてグラサンかけたヒゲのおっさんが現れた。つーか響木監督じゃね!?

「いいかよく聞け! お前たちは、日本代表候補の強化選手に選ばれた!」

どこかで見たことある展開だぞコレ。

もしかしなくても、FFI編っぽいぞこれ!

イナズマイレブン初期の頃からの世界を楽しみたかったけどこの際しようがない。てか私日本代表候補に選抜されたのね。

「日本代表? 一体何の?」

この世界の主人公、円堂が尋ねる。うわあ生の円堂守だよ、マジすげーよ。でもなんだろう、未だに実感湧かない感じだ。てかよ円堂、このメンツ見りや十中八九サッカーのことだって分かるだろうよ。

「今年からサッカーの世界大会フットボールフロンティアインターナショナル、通称FFIが開催されるー」

響木さんの長々しい説明を聞き流しつつ、私は改めてこの場にいるメンツを見渡す。おっ、鬼道発見! マジでドレッドヘアにゴーグルなんだな。隣には豪炎寺か、いずれファイアートルネードDD習得して一緒に打ちたいなー。あっ! 風丸くん見つけ! てか壁山で

けーなオイ！ 何食ったらあんななるんだろ。

いやーもう凄い。感激すぎる。まだ何も始まってすらいないけどもう満足だわ。

「すげーぞみんな！ 次は世界だ!!」

急な円堂の声でビクつとする。

声が大きいからびっくりするんだよね。ちよつと心臓に悪い。けどどこか元氣の出る声だ。さすが竹内順子さんVoice。

「世界か……」

「ついに世界と戦えるんだな！」

「ああー！」

みんなそれぞれの思いに浸りながら世界を相手にすることを楽しみにしているようだ。ただ私の場合はいきなりすぎてまったく実感わかないけど。

「あくまでもこの場にいる22人は候補だ。ここから16人に絞られる」

「てことは6人落とされるってことか」

「全員がライバルか、腕がなるぜ！」

出来れば代表に選ばれたいな。神様曰く私の身体能力とかはイナイレ世界に合わせて調整したとかなんとか。必殺技も練習すればちやんと覚えられるようにしたらしい。

「まず初めに、11人ずつ2チームに分けます。その後2チームで試合をしてもらいます」

「その試合でそれぞれの能力を見極める。持てる力を存分に発揮してくれ！」

「「はい!!」」

「それではチームメンバーを発表します」

Aチーム

円堂・土方・染岡・佐久間・綱海・吹雪・マックス・壁山・ヒロト・飛鷹・武方(勝)

Bチーム

鬼道・不動・風丸・木暮・豪炎寺・立向居・緑川・シャドウ・メガネ(弟)・虎丸・私

ふーん鬼道と一緒にのチームか。最初は円堂と一緒にサッカーしたかったけどまあいつか。てか栗松の代わりに私が選ばれたのね。ごめんねイガグリボーイ、きみのことはたぶん忘れないでやんす。

「それぞれのチームキャプテンは円堂、鬼道。お前達だ！」

「はいっ！」

「試合は2日後だ。それと、今回は個人の實力を測るため連携技は禁止とする。練習は各チームに任せる。2日後楽しみにしているぞ」

そう言っつて響木さんは去っていった。

「はい、皆の新しいユニフォームよ」

「うおー！ すっげー！」

「青は海と同じ色、気に入ったぜ！」

「これを着て早速練習だ！」



というわけで、私たちBチームは現在帝国グラウンドにいる。キャプテンの鬼道のある意味でのホームグラウンドだ。今回の試合は個人の力量を示す為のもので、いわゆるアピールの場ではあるけど、あの程度の連携等は取れるようにしたいと、個人の技を磨きつつ全体で動きを確認しながら練習するらしい。特に私や虎丸のような新参のメンバーは實力が未知数なため積極的に参加するよう言われた。

「そういうえば、まだ名前を聞いていなかったな」

鬼道から言われて気がつく。そういうえばまだ誰にも名乗っていないなかつた。どうしよう、前世の名前をそのまま使おうか。

「結城 悠香、好きなように呼んでくれていいよ」



内心ドキドキしつつ右手を差し出す。すると鬼道も「ああ」といつて握手を交わしてくれた。はい、もう今日は手は洗いません。

「虎丸、結城。ポジションはどこができる?」

「キーパー以外ならどこでも!」

「私も同じ感じかな」

それから練習は始まりだったが、やはりというかこっちのチームは色々と懸念材料はあるようで、

「おい不動、パスを回せと言ったはずだ! 勝手に行動するな!」

「なんでテメーなんかの指図を受けないといけねーんだ鬼道? オレはオレのしたいようにするぜ」

うん、やると思ったよこの二人。

ホントに仲が悪いな、まあ二人の過去というか生い立ち的に知ってるからしょうがないと思うけども。

「豪炎寺さん!」

「ナイスパスだ虎丸!」

ふと横を見れば豪炎寺と虎丸が結構息のあったプレイで練習をしているが、私には分かる。やはり虎丸は決定的な場面では自らは行かずに豪炎寺や他のメンバーにパスを出し、それはまるでひたすらに自分を抑えているかのよう。

「大丈夫か? ボーつとしてるけど」

「ん? ああ、風丸くんか」

ふと傍観してみんなの練習風景を眺めていると、風丸に声をかけられた。大好きなキャラクターから急に声をかけられたから驚いた、ここは平常心に。

「どこか具合でも悪いのか?」

「いや、そういう訳じゃないよ。ただみんな凄いなって」

とりあえず当たり障りのない感想を述べる。すると、風丸は少し表情を曇らせて俯く。

「ああ、凄いよな。鬼道はどんな状況でも瞬時に判断できる頭脳、豪炎寺はどの場面でも点を取れるキツク力、不動だって口は悪いけど実力は確かだ。俺なんて……」

前世では画面から見てただけだからなんとなくは感じてたけど、リアルだと結構ネガティブなんだね風丸。ここは私が人肌脱いであげますか。

「そんなことないと思うよ。練習してて思ったけど、風丸くんって足速いし、そのスピードなら世界でも通用するんじゃないかな」

「でも、それだけで世界を相手にできるのか…」

「そのためには練習しないとね」

あまり風丸の表情は変わらない。この程度じゃダメか。意外とめんどくさい性格してるな風丸よ。まあそんなこと口が裂けても本人には言わないけど。少し円堂風にくさい感じのセリフでいってみるか。

「風丸くんってさ、なんでサッカーやってるの？」

「えっ?」

「楽しいからじゃないの?」

「まあ、それもあるけど……」

「じゃあさ、とりあえず勝ち負けとか強さとか関係なしにさ、思いつきり楽しめばいいんじゃないかな」

「でもそんな甘い考えじゃ、世界には通用しな「じゃあさ」」

私は風丸の言葉を途中で遮って続ける。

「もし勝てたとして、もし世界に通用したとして、それが何か卑怯な手を使ったりとか、はたまたドーピングとかしてたととしても、楽しかったって思える?」

風丸が顔を上げ、黙って私を見つめる。

「勝てたとしても、楽しくなかったら意味がないと思うんだ。楽しんで勝ってからこそ心から本当に喜べると思う。ただ勝つだけじゃ面白くないじゃん、どうせなら楽しもうよ」

「……そうだな」

少しだけ表情が晴れたが、後もう一押しだ。

「私さ、雷門イレブンに憧れてたんだ。フットボールフロンティアで戦ってた姿を見て一気にファンになっちゃって。その中でも、颯爽とフィールドを駆け回る1人のDFがもうカッコよくてね。今では世

界を相手に、こうして日本の代表候補として一緒にフィールドに立つてプレーしてる」

嘘偽りのない、全部私の本音だ。画面越しで見えていた世界を、キャラクターを、想いをこうして共有し分かち合えるなんて夢にも思わなかった。今でも信じられないくらいだ。

「男の子だから勝ち負けに拘るのはしょうがないと思う。けど、私は風丸くんと一緒に楽しくサッカーがしたい。だからさ、楽しく勝つために今は練習頑張ろう?」

最後に私は風丸に微笑みかける。どうだ、これで少しはその弱気も治ったか。と思っていたら、なぜか風丸の顔が少しだけ赤くなっていることに気がついた。

「……ありがとな、結城」

俯き気味に呟いた風丸は、立ち上がったと思ったら走って練習に参加していった。よし、これでとりあえず風丸はもう大丈夫だろう。大好きなキャラクターに途中で離脱とかされたら正直たまらんからね。不安要素は取り除いておくべきだ。

「おいおい、テメーはここにラブコメでもしにきたのか?」

いつの間にか不動が練習を抜け出して後ろで壁にもたれかかっていた。てか今のやりとり聞かれてたとなると中々恥ずしいな。

「な訳ないじゃん、ちよつとお悩み相談受けてただけだよ。それよりいいの? ちゃんと練習しないとまた鬼道に怒られちゃうよ?」

「お前も一緒だろ」

所々嫌味つたらしいね、さすが不動、嫌いじゃない。むしろ好きな部類に入るキャラクターだ。

「私はこれから参加するよ、不動は?」

「オレはしねーよ。やらなくても十分だしな」

「そう言つてると選抜落とされるかもよ?」

「ああいうのは決める時に決めときやいんだよ」

「へえ、そりやいいこと聞いた。それが日本代表候補最後の言葉じゃなきやいいね、自信過剰気味の不動くん?」

「テメエ……調子に乗ってんじゃねーぞ」

あれ、なんでこうなったんだろ。

不動と話してたらいつの間にか一対一で戦うことになったけど。なんか不動につられてつい私も煽り口調になってしまった。後悔はしてない。

「おい、勝手に何してる」

「ちよつとしたゲームだよ」

「ごめんね鬼道。でもまあお互いの實力を知るという意味で許してよ」

「ルールはたった一つ、先にゴールした方が勝ちだ。シンプルでバカにも分かりやすいだろ？」

「なるほど、とつても分かりやすいね」

帝国のグラウンドはいくつかあり、その中の一つを丸ごと使った中々豪華なミニゲームだ。なぜかみんな練習を中断して私と不動の対決に釘付けた。いやいや、鬼道はまだしも他のみんなはグラウンド他にもあるんだから練習しててもいいのに。

センターサークルに置かれたボールを挟んで、私と不動は互いに向き合う。

「んじゃあ、まずはそちらからお先にどうぞ」

両手を広げて余裕綽々といった感じで最初のボールタッチを私に譲るといふ。舐められたものだね。ここは豪快にその鼻へし折りたけれど不動も曲がりなりに代表候補だ。實力は確かにある。ここは慎重に選ぶか。

「負けて泣きべそかいても知らないからね」

私がドリブルで相手陣地のコートを駆けていく。

「ほう、速いな」

鬼道が感嘆の声を漏らす。多分それは女の子にしてみればという所だろう。実際には風丸の足元にも及ばない。

私と相手のゴールを挟んだ所に不動は佇んでいる。が、油断しているようで実質その隙はあまり無い。

「このまま抜かせてもらおうよ！」

「させるかよ！」

マルセイユルーレットで華麗に抜き去ろうとしたけど、不動も体を捻ってしつかりついてくる。なら股通しだ。柔らかいボールタッチで不動の股下にボールを通し、一瞬抜き去ったが即座に追いつき強烈なチャージをしてくる。

「結城のやつ、意外とやるな」

「ああ、あのボールさばきは見事なものだ。代表候補に選ばれただけのことはある。データが一切無かったから少々警戒していたが、ある意味ではこのゲームも役に立ったかもな」

体格差や男女の力の差があるせいか、不動のチャージに押されつつある。現状なんとかボールキープできている状態だ。このままだとすぐ奪われてしまう。何か良い手はないものか。

「さつさとボールを寄越しなア！」

「くっ、かくなる上は！」

飛び上がって宙返りしつつ、不動の頭上を通り越してなんとか抜き去る。

「なにっ!?!」

「もらった！」

そしてそのまま目の前のゴールにシュート。

やった、あの不動に一对一で勝っちゃったよ。

「よし！ 私の勝ち！」

勝利のVサインを不動に見せつける。

「ちっ、なに熱くなってんだよ、ただのゲームだろ」

あれ、なんかそう言われると恥ずい。

とつくに不動は冷めてしまったようで、ポケットに手をつ突っ込んでこの場を去ろうとしていた。

「どこ行くの？」

「トイレだよ」

なんだ、我慢してたのか？

不動がトイレタイムに行って姿を消すと、みんなが私の元へと駆けつけてきた。

「結城、大丈夫だったか？」

最初は風丸に心配された。

別にみんなが思ってるほど不動は悪い奴じゃないと私は思ってる。まあみんなからしてみれば以前までの不動がやらかしたことは許さないんだろうけど。

「うん、全然大丈夫。むしろまだまだやれるよ」

「あのボールさばきとキープ力、見事だ」

「結城さん！ 今度おれにルーレットの上手いやり方教えてください！」

「中々力強いシュートだったな」

鬼道、虎丸、豪炎寺から褒め頂きました。

不動には悪いけど、今回のミニゲームでみんなと少しだけ打ち解けたような気がする。

## 2話 誕生！ イナズマジヤパン！

日本代表の座を決める紅白戦当日。

会場の雷門中は他校のギャラリィで満員だった。

「おお、すっげー人数」

「ちよつとキンチョーしてきたかも」

「このくらいでたじろいでたら、本物の舞台では雰囲気飲まれちゃうよ。もつと背中張りなよ」

同じチームの木暮の背中を軽くパシつとはたき、気合を入れてあげる。と、ふと緑川を見ると何やら手のひらに文字を書いてそれを飲み込む行為を繰り返していた。

「意外と人間っぽいことするんだね」

「だから僕は宇宙人じゃない！ ってなんだ結城か、なんか用かい？」  
「いやあ、ちよつとばかり緊張をほぐしてあげようかなと」

そう言いつつ私は両手をワキワキといやらしい動きをさせながら緑川に迫る。風丸もそうだけど、緑川も中々抱え込んだじやうタイプだよな。

「わー!? ちよ、なんだいその手つきは!？」

「はっはっは、良いではないかー」

なんだろう、私の立ち位置的なポジションが既に確立されつつある気がする。悪くはないんだけど、もうちよつとお淑やかな感じが良かったな。

さて、肝心のフォーメーションだけど、

A チーム

F W ヒロト・染岡・吹雪

M F マックス・武方（勝）・佐久間

D F 綱海・壁山・土方・飛鷹

G K 円堂

Bチーム

F W 豪炎寺・緑川

M F シヤドウ・虎丸・不動・鬼道

D F 風丸・メガネ(弟)・結城・木暮

G K 立向居

今回の私はディフェンダー。けどチャンスがあれば積極的に上がっていくよう鬼道からも指示を受けているので、もちろんガンガン攻めていくつもりだ。

「お互い頑張ろうね」

「ああ、もちろんだ!」

風丸と鼓舞しあいつつ、互いの意識を高める。

最初はAチームからのスタートだ。センターサークルにボールが置かれ、ホイッスルの笛が鳴る。試合開始だ。

吹雪が染岡にボールを蹴り、染岡はヒロトにパスを出す。ボールを受け取ったヒロトは左サイドから攻め上がって行く。

「シヤドウ! 虎丸! プレスだ!」

「おう! / はい!」

鬼道の指示でシヤドウと虎丸がプレスをかけに行く。二人に捕まる前にヒロトはセンターの染岡にパスを出す。受け取った染岡はすぐさま上がっていくが、前方では不動が待ち構えていた。

「へっ、来いよ」

「ふん、ぶち抜いてやる!」

一度フェイントで左へ揺さぶりをかけ、右に切り返して不動を抜き去る。

「どうだ!」

「ちっ……フン」

しかし抜かれた不動は悔しがるところか嘲笑うかのように染岡を見送った。とその時、不動に気を取られていた染岡から風丸がスライディングでボールを奪い取る。



「よし、鬼道！」

鬼道が風丸からパスを受け取る。

近くにいた佐久間をタイミングをずらして緩急で抜き去り、中盤まで自分の足で運んで行く。

「豪炎寺！」

前線まで上がっていた豪炎寺にパスを出し、プレスをかけにきた土方と豪炎寺が対峙する。一呼吸置いて豪炎寺が土方を股抜きで突破し、ゴール前に差し掛かる。

「行くぞ円堂！」

「来い！ 豪炎寺！」

ボールを打ち上げ、豪炎寺は炎を足に纏い回転しながら上昇して行く。そしてボールの元まで差し掛かったところで、炎を纏った左足を蹴りおろす。

「ファイアトルネード改！」

「真ゴッドハンド！」

対する円堂は進化したゴッドハンドで迎え撃つ。豪炎寺のシュートを巨大な神の右手が受け止めると、やがてシュートの威力を完全に殺し円堂の手に収まる。

「やるな円堂！」

「へへっ、さすが豪炎寺。すげーシュートだ！」

「いきなりキャプテンと豪炎寺さんの対決っス！」

これはイナイレファンにはたまらない展開だね。ゴッドハンドとファイアトルネードの元祖必殺技対決とも言える、名シーンだよ。確か、ここまでは原作通りだったはず。

てか生で必殺技みるとマジで迫力すげーな。

「よしみんな！ 反撃開始だ！」

円堂が土方にパスし、続けてフリーだった佐久間にパスが通る。そのままドリブルで進んで行くが、鬼道が前方からプレスをかけ間合いを詰めていく。

「こっちだ！」

フリーだった武方にパスし、そのままワンツで佐久間にボールを

戻し鬼道を抜き去る。

「やられたな」

しかし鬼道はどこか嬉しそうな様子だ。

私も人のこと言えないけどさ、アンタ佐久間好き過ぎだろ。いや、きつと友達以上の気持ちは抱いていないんだろうけどさ。なんだろうね、ちよつと不純な妄想思い浮かんじやったよ。すぐかき消したけど。

「ここは通さないよ、旋風陣！」

木暮が必殺技で佐久間からボールを奪う。そして近くにいた私にそのままパスが通る。

「結城！」

ついに念願のボールが来る。

さてどうするか、今この瞬間でパスを出せそうなコースはない。うん、自分で持つて行こう。とりあえず中盤までドリブルで駆け上がって行く。日本代表候補唯一の女性プレイヤーの底力を見せてやろうじゃない。

「行かせない！」

マックスとヒロトが二人でプレスをかけてくる。パスを出そうと横目でチラリと虎丸を見る。一瞬私の視線に二人とも釣られて虎丸を捉えるが、すぐさま私の方に視線を戻す。今ので二人は虎丸へのパスを警戒するはず。右足を振り切って虎丸にパス……すると見せかけて右足を切り返してマックスの股からボールを通し二人を突破。

「二なっ!?!」

「緑川くん！」

前線まで上がっていた緑川にパス。

ギリギリオフサイドにならないラインに位置を取っていた緑川の前に、ディフェンスはいない。良いポジションニングだ。残るはキーパーとの一対一。

「アストロブレイク！」

「正義の鉄拳G2！」

緑川渾身の必殺シュートは、しかし円堂の捻りを加えた鉄拳によつ

て弾き返され、そのままボールは綱海の元へと飛んで行く。

「よっしやあ行くぜっ!」

その掛け声とともに、綱海の背後から津波が出現する。何を言ってるか分からないと思うけど、私もどう説明したらいいものか分からない。だってそのまんまの意味なんだから。ボールに乗って津波を流れるようにサーフィンし、飛び上がってオーバーヘッドキック。

「ツナミブーストオー!」

「ってそこからシュートっスか!?!」

波を裂くようなシュートはDFラインからフィールドを横断するかの如く一直線に進んでいき、相手側のゴールに向かって行く……:ことはなく、右サイドから前線に走りこんできた吹雪への強烈な超ロングパスとなる。

「決める吹雪!」

「うん、行くよ!」

一度トラップしてボールの勢いを殺し、シュート体勢に入った。吹雪がボールを引つ掻くように蹴る。

「ウルフレジエンド!」

背後に狼が出現し、赤く光った3つのボールが1つに重なって突き進んで行く。

「絶対に止める! ムゲン・ザ・ハンドG4!」

いくつもの手のオーラを伸ばして、ボールに張り付けるようにしてシュートを止めようとする。2本、4本とボールを止めようとする手のオーラは段々と増えていき、最終的には10本の手のオーラがボールに張り付いてシュートを止めようとしていた。

「ぐっ、負けるもんかあ!!」

シュートの勢いは中々留まることを知らず、立向居は必死に踏ん張っていた。が、やがて勢いに押されムゲン・ザ・ハンドは破られ、吹雪のシュートはゴールネットを揺らした。

「吹雪のやつ、気合入ってるな」

「立向居も惜しかったね」

「吹雪さんのシュート、物凄いパワーでした。でも次は止めて見せま

す！」

うんうん、いい心構えだね。その名前負けしてない前向きな姿勢は良いと思う。ところで立向居って近くで見るとなんか女々しいというか、女の子っぽいね。小動物みたい。

さて、話は戻ってBチームボールから試合はリスタート。緑川、豪炎寺へとボールは渡り、豪炎寺が鬼道にパス。鬼道がドリブルで上がって行き、前線のメンバーはそれに従って敵陣のコートに切り込んで行く。

鬼道を止めようと武方と佐久間が二人でボールを奪いにくる。

「こっちだー！」

不動がフリーの状態でパスを要求する。

普通に考えれば即パスを通すところだが、相手が不動となると鬼道もやはり迷ってしまうようで、一瞬躊躇する様子を見せる。が、試合でそのような考えはパフォーマンスにおいてただの邪魔でしかない。瞬時に決断した鬼道は不動に鋭いパスを出した。

何人かのメンバーは少し驚いた様子だったが、すぐに真剣な表情に切り替わり試合に集中する。

「通すなー！ 飛鷹ー！」

「う、うっす」

どこか挙動不振な飛鷹が不動にプレスをかけに行く。やはり不安だったのか、キーパーの円堂も前に出てくる。

「お前ごときじゃ……止められねーよ」

上空にふわりと蹴り上げ、ループシュートを放つ。ボールは飛鷹とキーパーの円堂をも超えてゴールに入りそうになる。

「させっかよー！」

綱海が横から飛び込んできてボールをギリギリの所でクリアし、ボールはコートから出て審判の笛がなる。

「助かったよ綱海」

「おう。すっかりしろ、ゴールは波打ち際と一緒だ。舐めてると足元すくわれるぞ」

「お、おう」

綱海に言われて空返事をする飛鷹。

飛鷹よ、お前の不器用さは知ってるけど「おう」か「うつす」しか言えないのか。まだ今の時点ではみんなに馴染めてないからしようがないっちゃしようがないけど、完全に一人浮いちゃってるよ。

「ドンマイだ、飛鷹」

「……うつす」

そう言いつつ髪を整える始末。

うん、ザ・不良って感じだね。

「飛鷹か……全くデータが無いので警戒していたが、考えすぎだったのか？」

「ケツ、今更気付いたのかよ」

「飛鷹くん、動きがぎこちないわ」

「まるで初心者です。彼が何故代表候補に選ばれたのか、謎ですね」  
相変わらずひどい言われようだね。

鬼道や不動はまだしも、マネージャーの木野にまで言われるなんて。そしてメガネ、お前は人のことを言えるの？

Bチームのスローインで試合は再開される。シャドウが虎丸にパスを出し、虎丸はそのまま豪炎寺へとパス。

「爆熱ストーム！」

虎丸からパスを受け取った豪炎寺が、爆炎を纏う強烈なシュートを放つ。

「正義の鉄拳G2！」

円堂の必殺技と豪炎寺のシュートは拮抗しているかのように思われたが、円堂がシュートの勢いに押されてゴールが決まる。と同時にホイッスルが鳴り、この試合前半が終了した。

現在の得点は1-1と中々の良い勝負を繰り広げている。少しの休憩を挟んで後半が始まり出すと、両チームのFW陣が本領発揮し、まるで代表の座は渡さんとする勢いでゴールを掻っ攫う。

「ワイバーンクラッシュV2！」

染岡が力強いシュートでゴールを決め、

「アストロブレイク！」

緑川も負けじとシュートを放ち、

「流星ブレード！」

ヒロトが渾身の必殺技でゴールを割った。

得点は2―3でAチームが1点リードしている。

そろそろ私もゴールを狙いに行きたいな。多少強引ではあるけど前に出てみようか。と、思っていると風丸にボールが渡り、素早いドリブルで上がって行く。ここがチャンスだな。勢いに乗って私も前線まで駆け上がっていった。

風丸が左サイドからドリブルで突破していくのと並行して、私は中からゴール前まで一気に上がって行く。チラッと風丸の方を見ると、風丸も私の方を見たようでちょうど目が合い、互いにアイコンタクトを取る。

「結城！」

風丸から高めのセンターリングが上がり、ゴール前まで上がっていた私は空高く飛んでボールの高さまで辿り着く。そのまま体を捻ってオーバーヘッドキックでゴールを狙いに行く。

ゴールの左上ギリギリのコースを狙ったシュートは、円堂が飛びついてパンチングしたことにより防がれたが、弾かれたボールの元には風丸が走り込んできていた。

「まだだ！」

「なっ!？」

体勢を立て直すのが遅れた円堂は反応出来ず、風丸が放ったシュートはそのままゴールに吸い込まれる。

「よしー！」

「やったね」

パシツと風丸とハイタッチ。

結構息のあったプレイが出来たと思う。てか思ったんだけど、この試合って確か連携技禁止だったよね。今のは完全に連携とってたけどいいのかな？ 必殺技ではないからオツケーみたいな、ワンチャンスある？

他のメンバーも後半になってからは、最後の力を振り絞るかのよう

に、全力を出しきり世界大会への切符を掴もうとしていた。

「虎丸！」

そんな中、虎丸へとパスが通る。

マックスと武方がボールを奪いに来るが、あっさり二人を抜き去りドリブルで上がって行く。やっぱり上手い。目立つ活躍はしてない、というよりははしようとしていないんだろうけど、それでも隠し切れないくらいのボールのキープ力やテクニク、突破力を持っているのが分かる。

「行け！ 虎丸！」

豪炎寺が二人からマークされているため、虎丸に自らゴールを狙うよう指示を出す。しかし虎丸はゴール前まで来ると立ち止まり、シャドウへとバックパス。

「つ……ダークトルネード！」

パスが来るとは思っていなかったシャドウだったが、シュートチャンスであることは変わらないのでそのままシュートを放つが、咄嗟に打つたため威力は少し落ちていた。

「くそっ、今度こそ！」

飛鷹が遠くから闇雲にボールに向かって足を振り上げる。普通に考えればそんなことをしてもシュートが止まる訳がないが、

「っ!？」

「なんだと!？」

飛鷹の蹴りの風圧でシャドウのダークトルネードの威力が完全に封殺され、円堂はシュートの勢いをほとんど失ったボールをキャッチする。

「ボールが、急に失速した……?？」

その時、長めのホイッスルが鳴った。試合終了の合図だ。これで日本代表メンバーが決まり、選ばれなかった者は居残りとなる。

みんな己の力を出し切ったかのように、くたびれて仰向けに寝転がったり、膝について息を整えてたりしていた。私はというと、結構動いたつもりだったけどまだまだいけそう。神様の恩恵のおかげか、スタミナもアップしてるみたいだ。

「みんな良くやったな。さて……これで運命の選択をしなければならん」



代表候補のメンバーが全員並び、目の前には響木監督とマネージャー達が立っていた。

「選考通過者発表の前に、日本代表チームの監督を紹介する」

響木監督のその言葉に、みんなが動揺する。

あんたが監督するんじゃないのか、とでも言いたげな表情の円堂と鬼道だったが、構わず話は進んでいき、響木監督の隣から寡黙そうな男の人が現れる。

「私が日本代表チームの監督、久遠道也だ。よろしく頼む。では早速だが、代表メンバーを発表する」

いよいよ運命の瞬間だ。

「鬼道有人！ 豪炎寺修也！ 基山ヒロト！ 吹雪士郎！ 風丸一郎太！ 木暮夕弥！ 綱海条助！ 土方雷電！ 立向居勇氣！ 緑川リュウジ！ 不動明王！ 宇都宮虎丸！ 結城悠香！ 飛鷹征矢！ 壁山堀五郎！ 最後に、円堂守！ 以上の16名だ」

割とあっさり発表され、あまり実感が湧いてこなかったが選ばれたのは選ばれたんだ、素直に喜ぼう。てか正直めっちゃ嬉しい。

「いいか、世界への道は険しいぞ。覚悟はいいな」

「はーん！」

これから世界を相手に戦うんだ。

必ず円堂たちと、世界一になろう。



## アジア予選編

### 3話 合宿開始!

「……きて、起きて下さいー!」

その声を聞いてパチリと目が覚める。

体を起こすと、横にはマネージャーの音無春奈が立っていた。なんだろ、寝ぼけて意識がはつきりしない。

「あれ、音無ちゃん? なんでここに……ってかここどこ?」

「もう、寝ぼけてるんですか? ここは雷門中の校舎の中ですよ」

ああ、そうか思い出した。

昨日代表選抜の試合が終わって、それから代表メンバーは一部例外を除いて全員雷門中に寝泊まりすることになったんだった。いわゆる合宿ってやつね。

「ふわあ〜……眠い」

「キャプテン以外の皆さんはもう起きて食堂にいますよ。結城さんも早く起きてください」

キャプテンってことは円堂エ……。

お前も私と同じく寝坊助か。とりあえず手短に支度を済ませて音無と一緒に食堂へ行く。

「おはよ〜」

「おはよう」

「遅かったな」

円堂、風丸から声をかけられる。みんな既に食事を摂っているようで、それぞれ仲の良いメンバー同士で固まっていくつかのテーブルに座っていた。いや、不動と飛鷹だけは一人ボツチ飯だった。てか円堂もう来てたのね。

とりあえず円堂たちのテーブルの席が空いていたのでそこに座る。他にも風丸、ヒロト、吹雪が座っていた。タイミング良くメガネが私

の席に食事のお盆を運んでくる。

「おつ、ヒロトくんは吹雪くんじゃない。昨日は凄いシユートだったね」

「結城さんも、見事なオーバーヘッドだったよ」

「ドリブルも上手だったよな、あれは誰かに教えてもらったのかい？」

「ああ、あれはねー」

3人でご飯をばくつきつつ、昨日の試合についてのサッカー談議に花を咲かせる。横では円堂と風丸が何やら楽しそうに喋っていた。

その時、壁山と緑川がほぼ同時に「おかわり！」と大きな声でご飯を催促する。朝からよくそんなに食べれるね、壁山はその体から安易に予想出来るけど、緑川は意外と大食いなのかな？ それとも今日の練習に備えて蓄えているのか。

「よおー！ 俺も負けてられないぞー！」

「おい円堂、そんなにかきこむと喉に詰まらせるぞ」

注意を促す風丸だったが、案の定円堂はご飯を喉に詰まらせたようで苦しそうに胸をトントンと叩いていた。木野が慌てて水を持ってくる。

「言わんこっちゃないね」

苦笑いしつつ、私も円堂の背中をさすってやる。

そんな円堂を見てみんなが笑い、食堂が活気付く。さすがは主人公、朝から元気なこと。

ご飯を食べてエネルギーを補給し、ついに最初の練習が始まる。みんなグラウンドに集まり、ストレッチを入念に行う。わざわざ自宅から通っている虎丸も途中から輪に入り、ちようどいいタイミングで久遠監督が現れる。

「みんな顔は知っているとと思うが、一応紹介しておく。娘の冬花だ、今日からマネージャーとして参加させる」

「久遠冬花です。よろしくお願いします」

「これからアジア予選に向けて練習を始めるが、その前に一つ言っておくことがある。はつきり言おう……今のお前たちのレベルでは世界に通用しない！」

久遠監督のその言葉に、みんな度肝を抜かれる。

まあ、みんなそこまで自意識が高いわけじゃ無いとは思うけど、それでも世界を相手にできるくらいのレベルだと自負していたはず。じやなきや代表になんか呼ばれないしね。でもそれを久遠監督は真つ向から否定した。

「なんだその顔は、まさか自分たちが世界レベルだと思っていた訳ではあるまいな？ お前たちの力など、世界に比べれば吹けば飛ぶ紙切れのようなものだ」

「か、紙切れ……」

「私はそんなお前たちを1から鍛え直すよう頼まれた。中には私のやり方に納得出来ない者もいるだろう」

確かにこんな言い方されると、最初は不信感というか不満はあるよね。これは久遠監督が悪いつてか言い方がアレだよ。根はいい人だと思うし、監督としての采配も凄いんだけどな。なんだろう、イナイレって良い人ほど過去に闇を抱えてる人とか、心が弱い傾向ある気がする。

「お前たちは、私の言う通りに実行することだけを考えていればそれでいい」

うわあ大胆発言しちゃったよ。

これには天才ゲームメーカー鬼道もしかめっ面。

「特に鬼道、吹雪、豪炎寺、円堂。俺はお前たちをレギュラーだとは考えていない。試合に出たければ、死ぬ気で練習してレギュラーの座を勝ち取ってみろ。以上だ」

そして雰囲気最悪の状態で練習開始。

8:8で別れてミニゲーム形式で練習し、基礎というよりは総合的な練習をするみたいだ。てかもっとみっちり練習するのかもしれないよ、やることは普段とあまり変わらないんだね。

センターサークルに置かれたボールを鬼道が蹴り出し、緑川と攻防を繰り返す。が、多少強引に突破した。あまり鬼道らしくないプレーだ。さっきの監督の一言が効いたのか？

「風丸！」

風丸にパスが通り、そのまま素早いドリブルで駆け上がって行く。そこへ私が立ちふさがった。

「簡単には通さないよ?」

「望むところだ!」

ボールの奪い合いが始まる。風丸がフェイントをかければ、私はそれに釣られることなくなんとかくいつき、スピードで追い抜こうとすれば、体を当てて前に進ませないようにする。

「くっ、やるな」

「風丸! 土方にパスだ!」

マークが空いていた土方へパスを出すよう鬼道が指示を出す。風丸はそれを聞いて土方にパスを出した。

「よし「もらった!」なに!?!」

しかしそのパスを走り込んできた虎丸がカット。そのままドリブルで進んでいき、ヒロトへパスをする。

「行くよ、円堂くん!」

高く飛び上がって体を捻りながらハイキック。するとボールが光を強く発光しまるで流星の如く突き進む、ヒロトの必殺シュートが炸裂する。

「流星ブレード!」

「正義の鉄拳G2!」

円堂が必死に堪えるが、シュートの勢いを止めきれずにボールは上空に弾かれた。ギョルギョルとボールに回転がかかったまま地面に落ち、やがてボールは静止する。

「やるね円堂くん」

「ヒロトも、すげーシュートだ」

みんな調子は良さそうだ。

と思っていたら、飛鷹にボールが飛んでくる。足を振り切つてボールを蹴ろうとしたらしいが、見事に空振つてボールが転々と私の元に転がってきた。えっと、飛鷹くん? これはちよつとさすがにヒドいんじゃないっすかね。

「ドンマイだ飛鷹!」

円堂がフォローを入れ、私はとりあえず構わずドリブルで上がって行く。

一人、二人とフェイントや股抜きで抜き去っていくが、不動が背後から激しいスライディンググタツクルをかましてきているのに気付かず、もろにくらってしまった。

「~~~~っ!!」

そんなに強く当たった訳じゃないけど、バランスを崩してすっ転んでしまった。めっちゃ恥ずかしい痛い。

「おい！ 今のはわざとー」

「不動、ナイスチャージだ！」

鬼道が不動にくっついてかかろうとしたが、久遠監督が不動のプレーを褒めたことにより、渋々引き下がる。その様子を見ていた不動は相変わらずニヤついていた。

「ねえ、不動……」

私はゆっくりと立ち上がり、ゆらりと体を起こす。別に強引なプレーをされたから怒ってる訳じゃない。けど、まんまとしてやられただけじゃ癪だから、少しお返しだ。

「ナイスプレーー！」

ニカツと笑いながらVサイン。これにはニヤついていた不動も思わず固まる。たぶん何言っただこいつとでも思っているんだろう。不動の性格上、他人の不幸や失敗は大好物のはずだ。もし私があのまま悔しそうにぐぬぬとなっていたら、不動はさぞニヤついていたことだろう。だから今回はその裏をかく。ホントに地味な仕返しだけだ。

「チツ、気に入らねえ」

興が削がれたのか、珍しく不動がパスを出した。受け取った緑川は、驚きつつもしつかりトラップしドリブルで進んで行く。

「行くぞー！」

緑川が思い切りシュートを放つ。それを遮るように、壁山が立ち塞がった。

「やらせないっす、ザ・ウォール!!」

壁山のブロック技でシュートは弾かれ、ボールが転々とする。その

転がったボールに綱海が走り込み、再びシュートを放つ。

「もう一回っス！」

「いいぞ壁山！」

「……ストップだ！」

綱海のシュートを壁山が再びブロックしたところで、久遠監督が練習を中断させる。

「壁山！ どうしてもっと前に出ない？ 突っ立ってるだけがディフェンスなのか？ 守ることしか考えていないDFなど、チームに必要ない！」

「は、はいっス！」

「それと風丸！ さっきの場面、なぜ土方にパスを出した？」

「えっ、なぜって……」

「鬼道が言ったからか？ お前は鬼道の指示がなければ満足にプレーも出来ないのか」

「そ、それは……」

よし、風丸待つてろ。今すぐその監督をぶん殴ってやる……なんてことは出来ず、私はとりあえず様子を見ている。まあ、確かに鬼道のゲームメイクは凄いいけど、それに頼りきりも良くないし、多少は自分の意思でプレーしないと意味がないってことを監督は言ってるんだろう。

壁山に関しては簡単だ。監督の言う通り、動きが少な過ぎる。今まではそれでも通用してたかもしれないけど、世界レベルではもっと視野を広く、動ける範囲を広くしないとダメだと思う。要するに痩せろ。

「どうした、練習再開だ」

「は、はい!!」

それから練習は再開されるも、先ほどの監督の一喝が効いたのか、みんなどこか動きが鈍い。徐々に監督の考えに疑問を持ち始めるメンバーが増えていってるのか、ギクシヤクした感じでその日の練習は終わってしまった。

なんだか嫌な雰囲気だな……。

「お疲れさまでした！ それじゃ、おれはこれで失礼します。また明日よろしくお願ひします！」

「ああ！ また明日な！」

「そういえばあいつ、昨日もそうだったな。宿舎じゃなくて、わざわざ家から通つてきて」

虎丸が荷物をまとめ、挨拶を済ませると足早に走り去って行った。虎丸は確か家庭の事情で学校には泊まらずに家から通っているんだっけ。そこらへんは追々円堂や豪炎寺辺りがいい感じに纏めてくれるだろう。それによつて豪炎寺と虎丸の絆が生まれ、後に連携技なんかを編み出してくれるはずだ。

虎丸が帰つた後、残つたメンバーは少しの間だけ自主練という形で走り込みやミニゲームをし、宿舎に戻つた。

「たつはあく、終わった〜」

「まさか練習がこんなハードだなんてさあ」

「おれもうくたくたっス」

「おいおいお前ら、合宿は始まつたばつかだぞ」

壁山と緑川が早くも弱音を吐く。

今日の練習で一つ気が付いたけど、全体的に日本代表メンバーってスタミナが足りてない気がする。豪炎寺とか鬼道とか主要メンバーはまだしも、それ以外はちよつと物足りない感じがするんだよね。

「円堂くんはどう思った？ あの監督のこと」

「どうつて……そりゃあちよつと変わつてるとは思うけど、良い監督じゃないか！ 思つたことをちゃんと言つてくれるし、きつと俺たちにはまだまだ足りないものがあるんだよ。世界を目指すためにはさ」

「キャプテン……」

「それにしても腹減つたな。よーし！ この後みんなと一緒に雷雷軒行かないか!？」

「いいっスね！ おれも行くっス！」

「ラーメンか、僕も行くのかな」

「よっしや！ 決まりだな！」

「飛鷹も、行くこうぜ！」

「結城も一緒に来ないか？」

「すみませんキャプテン。ありがたいお誘いですが、俺は遠慮しておきます」

「ごめんね、私も遠慮しておくよ」

飛鷹は丁重に誘いを断り、私もちよつとやりたいことがあるので気持ち持ちはありがたいが遠慮しておいた。他にも緑川は一人で走り込み、不動は自分の部屋に戻ったらしく、それ以外のメンバーはみんな雷雷軒へと歩いて行った。

さて、私はというとやりたいことがあるので早速緑川がいるであろうグラウンドへと向かった。

「さーてどこにいるかなーつと……おつ、いた」

コートのベンチに座って汗を拭いている緑川を発見。日中散々練習したというのにまだしたりないのかな？ それともレギュラー争いに必死になり過ぎてありがちなオーバーワークにハマっちゃっているのか。どちらにせよ、体に大きな負担がかかっているには変わらない。が、やめさせる気は別に無い。いや、さすがにやばそうだったら止めるけど、今回はそれが目的では無い。

「……っ！ 誰だい？」

「おつす、精が出るね」

「なんだ結城か、なんか用？」

私に気付いた緑川は怪訝そうに尋ねてくる。大方練習を止めに来たと思われているのだろう。

「いやね、緑川くんに少し相談があつてね」

「僕に相談？」

イナイレの必殺技といえれば個人技もカッコよくていいけど、なにやり連携技もアツくて燃えるよね。ってことで私がイナイレ世界で憧れていることの一つ、

「うん、私と緑川くんでき、連携技作らない？」



## 4話 呪われた監督

練習2日目の昼。キツい朝の走り込みを終えて、食堂にて昼食前のゆったりなひと時を過ごしていた代表メンバーの一同は、マネージャーの音無が放った言葉に驚愕した。

「えっ！ 久遠監督がサッカー部を潰した!?!」

「間違いありません！ サッカー協会の資料室で見つけたんです！」

「サッカー協会……?」

いつの間に調べたんだろ。つーかよく入れたね、普通ならサッカー協会の資料室なんて極秘とまではいかないけど関係者以外立ち入れないだろうに。一体どんな手を使って調べたのやら。恐ろしい行動力だ、さすが鬼道の妹。

「久遠監督がどんな人なのか、気になって調べてみたんです。久遠監督は10年前、桜咲中という学校の監督をしていたみたいなんです。桜咲中はその年にフットボールフロンティア予選を大量得点差で勝ち進んでいたんです」

「やつぱり！ 凄い監督じゃないか！」

「FF予選を余裕で突破出来るくらいของทีมの監督だったのか」

「じゃあ、今の監督はなんであんなに……?」

「いえ、この話にはまだ続きがあるんです」

まるで本当の話はここからだとも言わんばかりに、音無がみんなのどよめきを鎮める。

「その桜咲中なんですが、決勝戦の直前になって久遠監督が事件を起こしたことで、チームは決勝の試合を棄権してしまっただんです」

「な、なんだって!?!」

久遠監督は10年前に有望視されていた桜咲中というチームを潰し、それから黒い噂が絶えず『呪われた監督』と呼ばれていた。この話、実のところは全くの誤解なんだけど、今のイナズマジャンパンのメンバーはほとんどが監督に不信感を覚えているし、なにより情報源

がサッカー協会であるためにガセネタって可能性はまず考えないからまあ信じちやうよね。音無ちゃん可愛いし。

「やっぱりあの監督、普通じゃないっス」

「久遠監督が、呪われた監督……」

「だからどうしたってんだよ。今更代表を降りんのか？ 結局今のお前らじゃどうしようもねーんだよ」

話を聞くのが馬鹿らしくなったのか、不動が悪態をつきながら自分の部屋へと戻っていった。

「あいつ、あんな言い方はねえだろ！」

「よせ綱海！」

「結城はどう思う？」

「私は……不動に同意かな」

「えっ!？」

信じられないとでもいうかのように、みんなの視線が私に一齐に集中した。いや、そんなに見つめられても。

「いまさら久遠監督がどんな人だろうと、私たちに出来ることは何も無い。それに、私は監督はそんなに悪い人じゃないと思ってる。なんせ響木さんが監督を託したくらいなんだし」

「結城……」

「あ、別に音無ちゃんの話が嘘くさいとか、つまんなかった訳じゃないよ。もちろんその情報は確かなものなんだと思うし、音無ちゃんのこととも信じてるから」

一応誤解されないようフォローしておく。

これをきつかけに内部分裂したりとか、みんなに嫌われたりしたら嫌だ。そんなことがあってしまっってはもう私は死ぬしか無い。イナイレのキャラに嫌われるなんてとても耐えられない。

「結城の言う通りだ。久遠監督がどんな人だろうと、俺たちはただ前に進むだけだ！くよくよしても仕方ないじゃないか！」

「それに、みんな忘れてないかな？ 私たちにはもつと気にすべきことがあるでしょ」

私の言葉を聞いても誰一人……いや、一部のメンバーは気づいたよ

うけど、他のメンバーは何のことか皆目見当がつかない様子だ。おいおい、さすがに知っておくべきでしょ。

「確か今日、アジア予選トーナメントの対戦カードが発表されるんじゃないよね」

「そそつ、さすが音無ちゃん」

私は音無ちゃんにウインクをして応える。途端に音無ちゃんの表情がパアアと明るくなる。うん、惚れてまうやろ。可愛すぎるわ、この後輩っ娘可愛い過ぎる。

まあそれは置いて、初戦はどこと戦うかなんて情報は早めに知れた方が得だ。それだけ早く対策を取れるってことになる。なんならせっかくテレビで中継されるんだからリアルタイムで観た方が良いに決まってる。てかみんな対戦相手について気にならないのかな。監督の変わった指示に気を取られてそれどころじゃなかったのか。

誰かが食堂のテレビの電源を入れると、ちょうどタイミンク良くアジア予選の対戦カードが発表される場所だった。

「えーと、イナズマジャパンの対戦相手は……ビッグウェイブス。オーストラリア代表か！」

「アジアでは韓国、次いでオーストラリアが優勝候補として名前が挙がっていますね」

「てことはいきなり優勝候補かよ！」

「だが、相手にとって不足はないな」

「噂では、奴らには相手の攻撃を完全に封じ込めるフォーメーションがあるらしい」

「スツゲー！ そんな凄い奴らとサッカー出来るなんて最高じゃないか！」

「くうっつ！ 燃えてきたぜ！」

「よーし！ ご飯食べたら昼からまた練習だー！！」

「「おぉー！！」」

なんか良い感じに円堂がまとめてくれた。さすがキャプテンとあったところか、みんなの心をまとめるのが上手い。自覚はないんだろうけど、こうやってみんなを引っ張っていくのはやっぱり円堂にし

か出来ないと思う。

このまま良い感じで試合までに仕上げているって、無事に初戦突破と  
いこうじゃないか。

「えっ、練習禁止!?!」

「これは命令だ。オーストラリア戦までの2日間、合宿所から出るこ  
とも許さん」

昼食をとった後、これから練習だあ!と食堂をみんなで出て行こう  
とした際、突如現れた監督からきつぱりとそう言い放たれた。そうい  
えばそうだったね、確か最初は軽く監禁されるんだっつけか。すつ  
かり忘れてたよ。

「久遠監督、どういう意味ですか?」

「言葉通りの意味だ」

「俺たちは日本代表に収集されたばかりで、まだチームとしての連携  
も取れていません。この2日間は、全体で動きを確認して調整に当て  
るべきです」

「監督は私だ。命令には従ってもらおう」

鬼道の抵抗も虚しく、監督の有無を言わさぬ一言に、誰も文句は言  
えずみんな押し黙ってしまった。

その後それぞれ自分の部屋に戻るよう促され、合宿所内での行き来  
は自由だが、外に出るのは禁止だと念を押された。

「さてと、どうしましょうかね」

私はというと自分の部屋でベッドに寝転がってのんびりと寛いで

いた。グラウンドが使えないのは厳しいけど、ボールさえあれば最悪  
屋内でも練習出来ないことはない。狭いしちよつと物足りないと感じ  
るだろうけど。

「ーっ！」

「ーっ!?!」

さつきから部屋の外がうるさいな。

ドアを開けて廊下の様子を覗いて見てみると、案の定円堂たちが合  
宿所を脱走しようと模索しているようだった。

「何やってんの?」

「あ、結城。お前も何か外に出る良い方法がないか一緒に探してくれ  
よ」

「残念ながら、私にはこれっぽっちも思い浮かばないね」

というよりかはそもそも考えようとすらしてないけど。そんな私  
の言葉を聞いて、あからさまにがっかりする円堂だった。そんな時  
だった。

「みなさーん!! この私がビッグウェイブスの情報を入手して参りま  
したよー!!」

メガネがそんなことを言いながら、メンバー全員に食堂に集まるよ  
う招集をかけた。でもどうせ大した情報はないだろうと思いつつも、  
私もみんなと一緒に食堂へと向かう。

「僕の情報収集能力、お見せしましょう!」

懐から取り出した一枚のDVDをデッキに入れ、ビデオを再生す  
る。画面にはビッグウェイブスの選手たちがユニフォームを着て試  
合に臨もうとしている場面が映った。

あれ、意外とマジなやつ……?」

「一体、どんなプレイをするんだ?」

円堂がゴクリと生唾を飲み込み、全員が固唾を飲んで画面に集中し  
ている中、試合が始まろうとした……が、キックオフの瞬間に画面が  
切り替わってしまい、打って変わって選手たちが海辺で遊んでいる場  
面に切り替わった。

「メガネ、なんだこれ?」

「さすがに国と国との戦い。代表チームの情報を手に入れるのは格段に難しくなっています。ですが！ プレーは無理でも、海で遊ぶシーンを手に入れて参りました!!」

その場の空気がシーンとなる。

静寂とした空気の中、不動がボソツと呟く。

「それって見る意味ねーじゃん」

「てか、もはやただの役立たず?」

私の追い討ちが効いたのか、メガネが崩れ落ちる。

「映像ではないけど、私たちが手に入れた情報もあるの」

「ビッグウェイブスは海で心と体を鍛え抜いたチーム。特に守備が固く、相手の動きを完全に封じてしまう未知の戦術があるそうなんです」

「へえ、おもしれーじゃねえか」

「相手の動きを完全に封じる……か」

「聞けば聞くほどじつとしていられない。練習しなくちゃ!」

と、勢いよく食堂から飛び出す円堂だったが、ゆつくりと後ろ向きのまま戻ってきた。なんかあったのか?

「どうした円堂?」

「監督がいた……」

残念、ゲームオーバーだ。



「監督、帰らせて下さい」

虎丸がカバンを提げて監督に交渉していた。それを円堂と風丸、壁山が見守っている。

「あれじゃ無理っスよ」

「分かった、今日はもういい」

「っ!?!」

「また明日、よろしくお願いします！」  
「なんで虎丸は通ったんだ？」



「小細工なんか性に合わねー、オレは堂々と行くぜ！」  
「今度は綱海か」  
「あんなんで行けるんスカね？」  
「おっ、ラツキー。監督がいねー！」  
「っ!？」  
「おい、あいつ普通に行つたぞ」  
「俺たちも今なら行けるかも！」  
「どこへ行く……?」  
「あ……監督」



「飛鷹さーん！ 居るんでしょー！ 面貸してくださいよー！」  
「あいつら……!」  
「飛鷹？」  
「監督！ 許可して下さい、あいつらとはケジメをつけないといけな  
いんです！」  
「……いいだろう」  
「すぐ戻ります！」  
「っ!？」  
「飛鷹さんも通つたっス」  
「なんなんだ一体……?」



円堂たちが色々と苦戦しているであろう間、私はというと相変わらずのんびりと自室のベッドで寛いでいた。

と、ふとドアからコンコンとノックする音が聞こえた。誰だろうと疑問を持ちつつも返事をして中へ入るよう促す。

「……えらい余裕っぷりだな」

「え、そう?」

訪問者は風丸だった。中へと入るや否や、私の寛いでる姿を見て苦笑する。

「練習出来なくなって、その……不安じゃないのか?」

「うーん、まあ不安じゃないって言えば嘘になるけど、別に監督が見てない所だったら練習しても良いんじゃない?」

「でも、外には出るなって……」

「ボールさえあれば、例えばこんな小さな部屋の中でもやりようはあるかもよ?」

そういつて私は手元にボールを引き寄せて、座った状態でリフティングを始める。

「私からボールが奪えるかな? なんてね」

ポンポンと挑発するかのようにボールを柔らかいタッチで上げ続ける。

「ふっ、面白い!」

風丸がその気になってボールを奪いにくる。私はそれをヒラリと立ち上がって躲し、部屋の外に出て廊下へと場所を移す。

「そこだ!」

「おっと危ない」

風丸が必死に食らいつくが、私も負けていられない。なんとかボールを奪い取られないようボールをコントロールする。



「あー!!」

とその時、突然誰かの叫び声が聞こえたのでそちらに気を取られてしまった。その一瞬の隙を風丸は見逃さず、私からボールを奪おうと距離を詰めに来る。私は咄嗟に一歩下がろうとしたが足がもつれてしまい、転んで後ろに倒れ込んでしまった。風丸も私との距離を詰めて来ていたため、勢いを止めきれず一緒に倒れてしまう。

「いてて……」

「悪い、結城……っ!?!」

率直に言おう、私はいま風丸に押し倒されたような形で床に倒れている。もちろんただの偶然だし、不慮の事故である。決して狙ったわけじゃない。

「ご、ごめんっ!!」

すぐさま私の上から飛び退いた風丸の顔は、すでに真っ赤だった。たぶん私の顔も真っ赤だろう。ほんのり体も暑いし。

「ま、まあ事故だよな。うん」

「そ、そっだよな」

お互いに気まずい空気が流れる。

ホントなら恥ずかしくて誰にも見られたくはなかったけど、残念ながら見物人は結構いた。

「大丈夫か二人とも!?! 悪い、俺が大声出したからか?」

「よせ円堂、2人きりにしてやれ」

「末長くお幸せにね」

なんかすっげえ誤解されてる。円堂は純粹だし素直に謝ってるからまだ良い。ていうか大声の正体お前かよ。後の2人、鬼道とヒロトは完全に茶化しに来てる。

いや私的にはそれも悪くはないしむしろ全然良いんだけど、なんか無性に腹が立つ。

「ご、誤解だ!!」

風丸が必死で弁解する。

いや、確かにそれで正しいんだけど、そこまで必死に否定されると逆に傷つくっていうか。

「あつ、いや、別に結城が嫌いって訳じゃないんだ。むしろそんなことはないっていうか」

私が少し寂しそうな顔をしていたからか、風丸が顔を赤くしながら今度は私に弁明する。

「ううん、いいよ別に。私もそんなに嫌じゃなかったし。むしろ風丸くんだったから良かったかなって」

特に不快ではなかったという意思を表しつつ、少し風丸をからかってみた。もう私の方は落ち着きを取り戻したので、あたふたしてるのは風丸だけだ。

「くくくっ!？」

耳まで真っ赤にさせ、風丸は風のようにどこかへ走り去っていつてしまった。ダジャレじゃないよ？

「まるで小悪魔だな……」

「ん？　なんか言った鬼道？」

「いやなんでもない」

「そうだ！　それより結城！　さっきまで廊下で風丸と二人で練習してたよな!？」

「えっ？　ああ、まあそうだね」

「俺たちもそうすれば良いんだよ！　部屋の中だったり、階段なり

廊下なり、練習に使える場所ならここにあるんだよ！」

「ふっ、お前らしい発想だな」

「なんの騒ぎだ？」

「なにかあったの？」

騒ぎを聞きつけた豪炎寺と吹雪が近寄ってくる。

「例えばグラウンドが使えなくとも、ボールさえあればどこだって練習場所だ！」

「部屋の中で練習か……狭い空間でのボールコントロールを鍛えるのに使えそうだな」

「キーパーなら壁にボールを蹴りつけて跳ね返ったボールをキャッチする瞬発力も鍛えれそうだな」

「おっ、いいなそれ！」

みんなが集まって知恵を出し合い、それぞれが工夫しあって限られた環境の中でいかにレベルアップするかを考える。なんかいいねこういうの、少しだけイナズマジャパンの一員として実感できた気がする。

「なあ、世界一って考えたことあるか？」

「世界一か……一度は夢見たくらいだね」

「FFIでは世界中から選りすぐりのプレイヤーが集まってくる」

「どんなシュートを打つのか、どんな技を使ってくるのか、楽しみで仕方がないんだ！」

「それを知るためには、俺たちは勝ち上がる必要がある」

「なら、私たちはこんなところで躓いてちゃいけないよね」

「ああ、目指そうぜ。世界一を！」

「世界一……！」

「世界一に！」

私たちが声を揃えてそれを唱える。

「世界一に!!」

そして次の瞬間には他の部屋からみんなが顔を出して一斉にその言葉を唱える。なんだ、みんな聞いていたのか。てかなんかミュージカルみたいだな。

「よおーしみんなあ！ 目指すは世界一だ!!」

「おおー!!」

## 5話 VSオーストラリア戦

『いよいよこの日がやって参りました！ 第一回FFIアジア地区予選！』

二日後、とうとう試合当日を迎えた私たちは、超満員の観客に囲まれたフロンティアスタジアムにて、総理大臣の財前氏の演説もとい開会宣言を聞きながら、溢れ出る闘志と並々ならぬ緊張感を胸の内に秘めていた。

世界各国のギャラリーが私たちに注目しているんだ。情けない試合を見せるわけにはいかないね。

「スターティングメンバーを発表する」

開会式を終え、ベンチでウオーミングアップをしていた私たちに、久遠監督から初戦のスタメンが発表される。

FW 吹雪、豪炎寺、基山

MF 風丸、鬼道、結城

DF 木暮、土方、壁山、綱海

GK 円堂

よっしスタメンキタコレ！

横から不動の舌打ちが聞こえた気がしたが、聞こえなかったことにしておこう。それと緑川、アンタは落ち込み過ぎだ。いつでも出れるチャンスはあるんだからもっと気張っていきなよ。

「おしー！ みんな行くぞ!!」

「「おう!!」」

手短に円陣を組んで気合いを入れ直す。

円堂の掛け声でみんなが声を張り上げ、それぞれフォーメーションの位置へと散らばって行く。

『FFIアジア地区開幕戦！ 日本代表イナズマジヤパン対オースト

ラリア代表ビッグウェイブス戦が今！ 始まります！』

長いホイッスルが鳴り響き、ついに試合が始まる。

まずはイナズマジャパン側からボールがスタートする。豪炎寺が吹雪へとボールを出し、そして鬼道へとボールが渡る。豪炎寺と吹雪は前線へと駆け上がっていき、中盤のメンバーは鬼道を中心として上がっていく。

『イナズマジャパンの司令塔、天才ゲームメーカー鬼道はどのように試合を運んでいくのか!?!』

鬼道が軽快なドリブルで上がっていると、ビッグウェイブスの選手がプレスをかけにくる。その数、一人二人などではなく、四人で囲むように鬼道をマークし、まるで狭い空間に閉じ込めているかのようなデيفフェンスで鬼道の動きをいとも簡単に封じた。

「なんだ……これは?！」

どうにかして抜け出そうと鬼道がもがくが、四人に囲まれては流石に動きが制限され、さらにプレッシャーも半端ないために徐々に押しされつつある。

「くっ、陣形が崩れない！ しかも、足が次々と伸びてくる！」

ならばパスだ、と思ったのか前線が上がっている豪炎寺、後方でポジショニングをとっている綱海へと視線を移したが、先読みされ完全にパスコースを塞がれてしまう。そこで鬼道は思い出したかのように目を見開く。これが噂に聞いていた、相手の動きを完全に封じ込める戦術なのだと。

——ビッグウェイブスは海で心と体を鍛え抜いたチーム。特に守備が固く、相手の動きを完全に封じてしまう未知の戦術があるそうなんです——

二日前、音無が言っていたビッグウェイブスの情報が鬼道の頭をよぎる。

『出た——!! これがビッグウェイブスの”ボックスロックデフェンス”!! 一度嵌ると二度と抜け出せない必殺タクティクスだあ!』

「くっ……!」

「もらった!」

その時、ギリギリでボールをキープしていた所を相手にカットされる。

「くそっ……!」

こぼれ球を取りに行こうと綱海と土方が走り出すが、互いにポジショニングの連携が取れておらず、二人は衝突してしまった。

「ちゃんと連携の練習をしなければ……!」

走りながら恨めしそうに鬼道が久遠監督をチラリと見るが、時すでに遅く相手チームのFW、ジョーンズが円堂の目の前に迫っていた。

「メガロドン!!」

放たれた強烈なシュートは、突如現れた大きなサメとともに力強く円堂が守るゴールへと突き進んでいく。

「正義の鉄拳G2!!」

円堂が必殺技で必死に対抗するが、世界レベルのシュートの威力に圧倒され、少しは拮抗した様子を見せたが、ついに突き破られゴールを許してしまう。

『な、なんと?! 先制したのはビッグウェイブスだー!! イナズマジャパン、開始早々得点を許してしまったあー!』

「こんなにあっさり点を取られるなんて」

「久遠監督の言う通りっスね……」

木暮と壁山が呆けたように呟く。

おおよそ世界のレベルを実感し、その強さを前にして為すすべがないといった様子だ。

「やっぱり、世界のレベルは高いな」

「けど、こんなに凄いやつらと戦えるなんて、燃えてきた!!」

円堂のその一言に、沈み気味だったみんなに活気が戻ってくる。円堂の強さは、そんな世界レベルの障壁さえも物ともせず、立ち向かうとする勇氣と根性だ。

「この闘志に、どれだけ救われてきたことか」

「私たちも負けてらんないね」

「まずは1点だ！ 取り返していくぞ！」

円堂の言葉で気合いを入れ直し、再びイナズマジャパンのボールで試合は再開する。今度は豪炎寺が自分の足でそのままボールを運んでいく。しかし、それを待ち構えていたかのように、ビッググウェイブスはまたもやボックスロックデイフェンスで豪炎寺を囲んだ。

前後左右の動きが封じられ、さらにはパスも潰される。そうすれば選択肢はもう一つしかない。豪炎寺は上に飛んで包囲網を掻い潜ろうとしたが、それすらも読んでいたのか、相手の一人もほぼ同時に飛んで対抗し、豪炎寺からボールを奪っていく。

「土方！ ジョーンズをマークだ！」

「任せな！」

鬼道が先ほど強烈な必殺シュートを放った選手にマークをつけさせ、少しでも点を取られないように指示を出す。

「リーフ！」

土方がマークしたジョーンズにはパスが通らないと瞬時に判断したのか、逆サイドから上がってきていたもう一人のFWにパスを出す。それを受け取ったリーフはそのまま絶妙なコースを狙ってシュートを放つ。

「はあっ!!」

『おおっと！ 今度は逆サイドのFW、リーフにパスを出した！ そしてビッググウェイブスの女性プレイヤー、リーフの渾身のシュートがゴールへと一直線に向かっていく!!』

あれ、こいつ女の子だったっけ？

確か原作では男だったよね。まあ見た目はまんま女の子っぽかったけど。この世界では見た目通り女の子なんだね。てことは普通に美少女じゃん。

「くっ……！」

円堂がなんとかボールに食らいつき、追加点は免れる。

『キーパー円堂！ 横っ飛びでなんとかキャッチ！ 見事にリーフのシュートを止めたあ!!』

さて、そろそろ私も仕事をしますか。

今の所、ぶつちやけた話私はまだボールに触ってすらいない。もちろん走ってはいるしちゃんと相手もマークはしているけど、たぶん役に立ってないし……なにより目立ってない！

せっかくギャラリーがこんなにいるんだし、どうせなら注目を浴びたいよね。

円堂が綱海にボールをパスし、そのまま綱海が上がっていくが、またもボックスロックデイフェンスに捕まりそうになる。

「綱海ー」

フリーになった状態でパスを要求し、綱海は4人に捕まる前になんとかボールを私に繋げる。原作知識の応用だけど、実際に自分の目で見て確信した。ボックスロックデイフェンスの対策は2つある。1つは今みたいに、捕まる前に即座にパスを出す。どんなに強力なデイフェンスでも、そもそも捕まらなければどうということはない。けど、それだけだと無理がある。毎回高度なパスワークが要求されるから、今のイナズマジヤパンの連携が噛み合っていない状態では無理だ。

「行くぞー！ ボックスロックデイフェンスー！」

『今度はイナズマジヤパン唯一の女性プレイヤー、結城がボックスロックデイフェンスに捕まってしまったあ!!』

外から見ると、だいぶ狭く感じるな。

四人に囲まれた状態で、ボールをキープし続ける。本来なら並外れた集中力とテクニクを要するけど、部屋の中で特訓した私たちには出来ないことではない。

四人の足が一齐にボールを奪いにくるが、私はそれを軽快に躲しながらボールをキープする。現時点で優勢にあるのはビッグウェイブスだ。イナズマジヤパン側からすれば、少しでも早く点を取りに行きたいところ。だからここで留まっている訳にはいかない。けど焦っちゃダメだ、ボックスロックデイフェンスを突破するには、焦りは禁物だ。ここはひとまず我慢比べといこうじゃないか。

『なんと結城ー！ 四人に囲まれた状態のままボールを見事にキープしている!!』

「くっ、何をしてる。もっと激しく動け！」



囲んでいる四人の内の一人が、次第に焦り始める。そりゃそうだ、国の代表として選抜された選りすぐりの選手四人が、相手国の選手たった一人を相手にボールを奪えないとあつては、それはもう焦るに決まっている。

「いいぞ結城！」

「すごい……！」

円堂やベンチのメンバーが感嘆の声をあげているが、このくらいだったら鬼道にだって余裕で出来る。あの屋内での特訓を思い出せばの話だけど。

「くそっ、ボールはまだか！」

「取れるもんなら、取ってみれば？」

そう挑発しつつ、私は体を右に傾けてフェイントをかける。ボールをなかなか奪えず焦っていた相手はまんまと私の動きに釣られ、そして隣同士で密集していた仲間の選手と肩をぶつけ体のバランスを崩した。私はその一瞬の隙を逃さず、ボールを態勢の崩した選手の股に通し、肩がぶつかった際に生まれた僅かな隙間に体を入れて間を掻い潜った。

「なんだと!？」

『なんと!! 結城が初めてにして、ビッグウェイブスのボックスロックデイフェンスを打ち破ったあー!!』

「あの動きは……まさか！」

鬼道は私の動きを見て既に気づいたようだ。

流石天才ゲームメーカー、頭の回転が早いね。

「豪炎寺！」

空高く打ち上げたパスに、豪炎寺が合わせるように飛び上がり、そのままダイレクトにシュートを放つ。

「爆熱ストーム!!」

「グレートバリアーフ！」

しかし豪炎寺の渾身のシュートは、相手キーパーの必殺技により生まれた大きな波によって完全に勢いを殺され、止められてしまった。

「ドンマイ、豪炎寺」

「ああ、次こそは決めてみせる」

とはいうものの、豪炎寺は今ひとつ浮かない表情をしていた。まるで今の必殺技では打ち破れないと見抜いているかのように。



それからというものの、イナズマジヤパンは鬼道を筆頭に、ボツクスロックデイフェンスを打ち破っていき、既に攻略しつつあった。が、ビッグウェイブスにはまだもう一つ砦がある。

「相手キーパーの技、豪炎寺の爆熱ストームを易々と止めるほどの威力だ。そう簡単には破れそうにないな」

そう、相手キーパーの必殺技によって、イナズマジヤパンのシュートはことごとく止められているのだ。

既に前半は終了し、現時点でのスコアは1-0。開始早々決められたシュート以外はなんとか守り切っているが、こちらのシュートも幾度となく止められてしまっている。

どうしたものかと、みんなが作戦を考えていると、不意に久遠監督が綱海に近付く。

「綱海、お前はこの2日間私の命令を無視して外出していたな」

「げっ、バレてたのか……」

「今回の試合、お前の新しい必殺技が鍵になる」

「綱海の、新必殺技？」

「気づいてたのか……けど、まだ完成した訳じゃねーし、何か足りてねー気がすんだ」

「その答えは、フィールドの中にある」

「フィールドの、中だっけ？」

綱海がフロンティアスタジアムのフィールドを見渡すが、辺り一面に綺麗に揃えられた芝生があるだけだった。相変わらず言葉足らずというか、久遠監督は含みを残した言い方をするなあ。まあそこが良

いんだけど。

## 6話 新必殺技炸裂!

ハーフタイムが終わり、それぞれのチームの選手がポジションに行き、後半戦が始まろうとしていた。ちよつとタンマ、靴紐結びたいから待って。

「後半、いつでも出れるようにアップしておけ」

「あ、はいー!」

私が靴紐を結んでいる時、ベンチにいるメンバーはというと、監督からいつ出てもいいようにアップをするよう指示を受けていた。その指示に、立向居は少し不思議そうな顔をしていた。大方ボツクスロックデイフェンスを乗り越えた今のメンバーのまままで充分だとも思っているのだろう。けど今のままでは駄目だ、ビッグウェイブスの勢いはまだ止まっていない。たぶん後半から試合展開はガラツと変わるだろう。

「さてと、いっちょ行きますか……ん、なにあれ?」

前半終了時、監督から新必殺技を完成させろと告げられた綱海が、ヒントとして与えられたフィールドに寝そべって何かを感じ取ろうとしていた。はたから見れば怪しすぎる。

「綱海さん、後半始まるっスよー!」

「お、おうー!」

ホイッスルが鳴り、ついに後半が開始される。ボールはビッグウェイブス側からだ。試合開始早々ゴールを奪ったジョーンズがドリブルで上がってくる。それと並行するように、リーフが走り込んできているのが見えたので、私はジョーンズにプレスをかけに行きつつ、二人ともマークする。

『結城が積極的にデイフェンスに行った!』

その時、ジョーンズがリーフにパスを出し、私のデイフェンスを躲して抜き去る。リーフが再びジョーンズにボールを戻し、まるでお手本のようなワンツーパスで私の背後にパスを通そうとした。が、それ

を読んでいた私は足を後ろに曲げてかかどを使い、そのパスを背面でカットする。

「なっ!?」

『なんと結城！ 華麗なプレイで二人からボールを奪っていく!』

ごめんね虎丸、パクらせてもらったよ。

ぶっちゃけ虎丸のプレイって小学生のくせに凄すぎると思う。マジで。なんかもう自分の身体機能を余すことなく駆使してる感じがして、私の中ではサッカーが上手いキャラランキング（あくまで個人的）には余裕でベスト5に入ってると思う。

ってなわけで、私はボールを奪いそのままドリブルで上がっている。が、少しして違和感を覚える。前半でアホかっつくくらいボツクスロックディフェンスを使ってきたビッググウェイブスだが、前半と大幅にメンバーが変わっており、連携して動くのではなく個々で動いている。

「グレイブストーン!」

「くっ、危なっ!」

ディフェンスにきていたダニエルの必殺技により、突如地面から勢いよく岩が突き出てくる。なんとか身は躲したが、ボールは奪われてしまった。てか普通に危ないでしょ、怪我したらどうすんの。ダサイ名前のかせに……ダニエルファンの人はごめんね。

『ビッググウェイブス再びボールを奪い取ったあ! 前半とは打って変わって個々の力を使った戦術になっている! 必殺タクティクスが攻略されるや否や、瞬時にプレイスタイルを変えてきたか!』

実況さんご説明どうも。

私からボールを奪ったダニエルはそのままホリーにパスを出す。おっ、イケメンくんキタコレ! と思ったら胸の辺りが少し膨らんでいるのが目に入る。お前も女だったのか……。

「カンガルーキック!」

「うわっ!」

どう見ても海ではなく陸っぽいドリブル技でディフェンスに入っていた木暮を吹っ飛ばし、難なく突破する。てかやばいじゃん、もう

ゴール前だよ。と思っていたらホリーのノーマルシュートを円堂が割とあっさりキャッチする。あれだね……私が思うに、円堂ノーマルシュートなら絶対防げる説でも唱えられるんじゃないかな。

円堂が大振りのスローイングで中盤の鬼道にまでボールを届かせる。いや肩強っ！

「みんな上がれ！」

鬼道の指示で一斉にイナズマジヤパンのメンバーは前線へと上がっていく。まだまだ後半は始まったばかりだが、ここで点を取っておかないと後がキツくなる。それをみんなも感じているのか、気迫が溢れていた。

「ヒロトー！」

鬼道がマークの空いていたヒロトにパスを出し、ヒロトが完全にフリーの状態でシュートに持ち込む。

「ここで決める！ 流星ブレード!!」

「グレートバリアリーフ！」

ヒロトの気迫のシュートは、やはりキーパーのジーンの必殺技に阻まれてしまう。思わずヒロトが苦い表情をする。今のフリーの状態が決まらなかったのは少し痛い。だがまだまだ、ボールが前線にあるうちに一気に押し込む。

ジーンがキャプテンのドルフィンにパスを出したが、それをすかさず風丸がインターセプトしボールを奪う。

「おれにボールを回せ！」

何か必殺技のヒントを掴んだのか、綱海が猛ダツシュでゴール前まで駆け上がってきていた。風丸がそれに合わせるようにパスを出す。

「うおおお!! 喰らえっ！」

「ふっ、グレートバリアリーフ！」

普通のツナミブーストではなく、少し回転がかかったシュートを放つ。相変わらずジーンの必殺技に止められてしまったが、一瞬拮抗した様子を見せた。

「まだだ、まだ足りねえ！」

血が？ なんて冗談は置いて、シュートを止めたジーンはパス

を出し、ビッグウェイブスのメンバーも個々のテクニクで私たちの  
ディフェンスを躱していき、あつという間に円堂が構えるゴール前ま  
で迫る。ボールを持つのは前半にシュートを決めたジョーンズだ。

「行くぞー！ メガロドンー！」

『イナズマジヤパンー！ ここで追加点を許すと厳しい状況になってしま  
うぞー！ 果たして円堂止められるのか!?!』

「この技は一度見た……」

その時、円堂が目を瞑る。

途端にその場にいた全員が驚く。そりやそうだ、目の前には相手の  
シュートが迫っているのに、目を瞑るなんて舐めプもいいところだ。  
しかし円堂は至って真剣で、気合いと集中力を高めたのかパツと目を  
開いて必殺技で対抗する。

「正義の鉄拳G3ー！」

進化した正義の鉄拳で、前半にゴールを許したジョーンズのシュー  
トを見事跳ね返す。跳ね返ったボールはちょうど私のところに来た  
ので胸でトラップし、鬼道にパスを回す。

「行かせんー！」

鬼道にボールが渡ったその時、相手のディフェンスが鋭いスライ  
ディングで鬼道からボールを奪おうとするが、タイミングが悪かった  
のか鬼道の足にもろに当たってしまった。

「ぐっ、おおおおー！」

「鬼道っ!?!」

あまりの痛みに足を抑えて倒れ込む鬼道。審判がファウルを告げ  
るホイッスルを鳴らし、試合は一時ストップ。

「大丈夫か?」

「痛っー！」

「この試合は無理そうね……」

木野が手当てをするが、この試合の復帰は難しそうな様子だった。  
それを見て監督も素早く指示を出す。

「虎丸、鬼道と交代で入れ」

「は、はいー！」

「そのまま鬼道のポジションに入り、前にボールを回せ。それと吹雪、お前は中盤に下がって、相手の攻撃の芽を摘め。結城、お前は吹雪と入れ替わりで前線に上がり、ボールを繋げつつ積極的にゴールを狙っていけ」

「そんな大事な役目、おれなんかで良いんでしょうか？」

「お前がやるんだ。出来なければ下がってもらおう」

「は、はい！ 皆さんの足を引っ張らないよう頑張ります！」

「私たちはポジションチェンジだね」

「うん、ディフェンスは任せてね」

鬼道がベンチに下がり、虎丸がピッチに入ることと試合は再開。私と吹雪は互いのポジションを変わって吹雪がMF、私がFWに入る。

風丸のスローインから始まり、ボールは早速入ったばかりの虎丸に渡った。そのままドリブルで上がっていくが、それをダニエルが止めようとディフェンスに来る。すると虎丸は迷うことなくダニエルの股下にボールを通し、なんなく突破する。にやろう、股抜きは私の専売特許だつてのに。まあ全然構わないし、そもそも誰のものでもないけどね。

「豪炎寺さん！」

虎丸お得意のゴウエンジサン！ でパスを出そうとするが、豪炎寺は相手DFにマークされており、パスを出せる状況ではない。

「自分で行け虎丸！」

豪炎寺からそう促されるが、虎丸はその場で一旦止まり後ろの方から走りこんできていた綱海にバックパスを出す。

「うおおおおおッ!!」

綱海がボールをサーフボードに見立て、突如出現した大時化のような荒れ狂う海の中からボールに回転を加えシュートを放つ。

「行つけえええ!!」

「グレートバリアーフ！」

本日何度目になることやらのジーンの必殺技とぶつかり合うが、ボールに凄まじいトップスピンの掛かっているため大波の壁を突き破り見事にゴールが決まった。



『イナズマジヤパン、綱海の新必殺技で遂にゴールをもぎ取った！  
ここから反撃となるか!?!』

「よっしゃあ!!」

「すげーぞ綱海!」

「荒れ狂う嵐のようなシュート。名付けるなら”ザ・タイフーン”!」

メガネが眼鏡をキラリと光らせながら誇らしげに言う。いやいや、そんな誇らしげにしているけど、お前は一切何もやっていないからな？

「あの回転は……! 試してみる価値はあるな」

「うん? どしたの豪炎寺?」

「いや、なんでもない。ただ、もし次にシュートチャンスがくれば、俺にボールを回してくれないか?」

「オッケー、任せてよ。その代わり、もちろんゴールは決めてくれるんだよね?」

「ああ、必ず決める!」

先ほどの綱海のシュートを見て、豪炎寺が何かヒントを得たようだ。まあ早い話がボールに回転が加われればそれだけ貫通力は上がる。拳銃の弾丸と同じようなもんだね。ビッグウェイブスのジーンの必殺技は、大波による水の抵抗でボールの勢いを失速させるものだ。けど今日この試合、今まで何回も見てきた中で思った。

意外と波の厚さが薄い。

並みのシュートなら止められそうだけど、回転をかけて貫通力が増したシュートなら突き破れるくらいに。久遠監督は最初に豪炎寺のシュートを止めた1回目ですぐに気づき、綱海に助言をしたんだからやっぱり凄い。

『さあビッグウェイブス、1点を返されたがここからどう出るのか!?!』

ビッグウェイブス側からボールはスタートし、リーフがドリブルし攻めてくる。ヒロトがマークしに行くが、フェイントで躲かれてしまう。が、素早く吹雪がフォローに入る。

「アイスグラウンド!」

アイススケートのようにクルクルと鮮やかなスピンをしながら着地すると、途端にフィールドが凍りつきリーフも氷漬けになる。吹雪

がボールを奪い、そして私へとボールは渡る。

「これ以上点はやらせるか！」

「そうはいかないね、もう1点もらうよ」

ホリーがプレスをかけにくるが、私はドリブルしながら加速し、速度を一切落とさずにマルセイユルレットで華麗にホリーを抜き去る。

「豪炎寺！」

左サイドから前線に上がっていき、豪炎寺にセンターリングを上げる。豪炎寺は私のパスに合わせるように爆炎を纏いつつ回転しながら上昇し、ボールに強烈な回転を加えて思いつき蹴りつける。

「爆熱ストームの進化系、まさに”爆熱スクリュー”！」

うるさいメガネ。

「グレートバリアリーフ！」

豪炎寺のシュートはジーンの必殺技と衝突するとギョルギョルと凄まじい回転で波を貫き、そのままゴールへと突き刺さる。

『イナズマジャパン追加点！ 今度は豪炎寺の新たな必殺技でジーンの必殺技を突き破ったあー!!』

そして同時に試合終了を知らせる、審判の長いホイッスルがフィールドに鳴り響く。結果は2-1でイナズマジャパンの勝利。私たちは初戦突破を果たしたのだった。

## 閑話その1

ビッグウェイブスとの試合終了直後、お互いの健闘を讃えあい選手たちは皆握手を交わしていた。いつの間にか仲良くなっている両国のキャプテンのドルフィンと円堂が熱い握手をしていたり、両国のエースストライカーのジョーンズと豪炎寺がなにやら楽しそうに話している。

私かというと、試合直後のまだ熱が冷めていないフィールドの中、ビッグウェイブスの女性選手リーフとホリーの3人で絶賛ガールズトーク中だった。

「周りが男だらけって中々大変よね」

「こっちのチームはボクとリーフで2人いるからまだマシだけど、ジャパンは悠香1人だけなんだろう?」

もう既に下の名前と呼ばれるくらいには親しくなっている。ちなみに連絡先も交換済みだ。あと小さな発見だけど、ホリーがボクっ娘だった件。

「まあそうだけど、でもマネージャーに女の子もいるからあんまり気にしないかな」

「へえ……ちなみに、気になる男の子とか居たりする?」

リーフが頬を少し赤く染めながら聞いてくる。やっぱり女の子が話す話題としては鉄板の一つ、気になる男子の暴露話が上がってくる。

「ジャパンの男たちってみんな色白だし線が細いよね。ちゃんと鍛えてるの?」

ホリーが鼻で笑いながらイナズマジヤパンのメンバーたちを眺める。おお、結構辛口だねホリー。確かにビッグウェイブスのメンバーに比べたら、良い意味では身体が引き締まっているけど、悪い意味でいうと細い。まあでもオーストラリアの男たちが屈強なだけかもしれないけど。

「まあ、1人だけマシなやつはいるけど……」

「おつ、誰のこと？」

私が問い詰めてみると、ホリーは恥ずかしがってるのか言いにくそうに口ごもる。が、視線がチラリと動いたのでバレバレだ。

「ああなるほどね。確かに一人際立って色白じゃないし、結構ガタイもあるからね」

「絶対本人には言わなくていいからな！」

「分かってるって。ちなみにリーフは？」

「私は彼一筋だから」

そう言っつて親指で背後を指差す。その先ではビッグウェイブのストライカー、ジョー・ジョーンズが豪炎寺と談笑していた。なんか想像すると結構お似合いな感じだな。同じポジション同士、仲が良いことはそれだけ連携の幅が広がるというもの。チームの利になって二人の仲も深まる、まさに一石二鳥だ。

「二人とも付き合ってるの？」

「ううん、たぶん彼は私の想いすら知らないと思う。私も自分からは行かない方だし」

「リーフは奥手だからねえ」

ホリーがため息と共に言う。

私の中でリーフの株がどんどん急上昇していく。美少女で言葉遣いも丁寧でしかも奥手って……日本人の私より大和撫子してんじゃん！

てかリーフくらい可愛かったら、男なら誰でも言い寄られればOKすると思うのに。ジョーンズがそれだけニブチンなゴリラなのか、それともリーフが消極的過ぎるのか。

「悠香は？ 気になる人いるの？ てかいるでしょ？」

「私は別にそんなのいないってば」

「ふくん、なるほどね」

私が2人の視線から逃げ、誤魔化したつもりだったがなぜか2人も理解したかのように視線を1人の男の子に向ける。

「彼、風丸クンだっけ？」

「足が速かった印象で覚えてたわ」

「ぐつ、なぜバレたし……」

特に視線を向けたわけでもないし、そのような素振りも一切見せてないはず。そんな私が疑問に思っていると、ホリーがからかうように笑いながら、

「いや、てか試合中に気づいてたよ。たまーにチラツと彼のことを見てる時が何回かあったし」

そう言われ、自分でも驚く。

まさか自分でも気づかない間に風丸をチラ見してたとは、どんだけ風丸好きなんだ私。自分で言うのもなんだけど少しキモいな。

「当の彼は気づいてない様子だったけどね」

「それを聞いてホントほっとした」

そんなストーリーカー予備軍めいた行為を知られたとなつては嫌われるどころか、私が自らの意思で消えて無くなりたくなるわ。穴があったら入りたいとかそんなレベルではない。

「まあでも、私たちは今回の試合で終わっちゃったけど、悠香たちはこれから先があるんだから、まだチャンスはあるよ」

「そーそー、ボクらはこれでチームも解散。メンバーはみんな地元に戻ったり、これからのFFIを観戦したりと散らばるから、もう一緒になることはないからね」

「えっ!?! そうなの?」

なんか悲しいというか寂しいな。もし私たちも予選で負ければ即敗退、チームは解散つてなってしまうのか。やばい、そう思うと急に焦ってきた。もしかして今日つて相当危なかったんじゃないかな。悠香たちは頑張りなよ? 恋も試合も、そこで諦めたら終わっちゃうからね」

ホリーが某バスケ漫画に出てくる白髪の顧問監督と似たようなセリフを言う。なんだろ、ホリーって結構頼れるお姉ちゃん的な感じなのかな。さっきから話していると頼もしさが滲み出てるというか、雰囲気がある感じがする。

「負けたら即敗退……か」

私はそんな中、ホリーの言葉が胸に突き刺さっていた。今の所なんとなしに勝ち進めるとどこか慢心していた自分がいたけど、この世界には私が転生してきたことでほんの少しだけ事象が変わっている。結果的には大差無いんだろうけど、後々それが響いて未来が大きく変わわり、日本がどこかで敗退してしまう結果になり得なくはない。

まだイナズマジャパンのみんなとサッカーがしたい。ずっとみんなと一緒に居たい。そんな思いを胸の内に秘めながら、私は強くなるうと決意した。

## 7話 灼熱の特訓

「アジア予選第2試合の対戦相手が決まった。カタール代表デザートライオンだ」

アジア予選初戦突破を無事果たし、翌日いつものように練習していると、久遠監督がみんなに集合をかけた。どうやら次の対戦相手が決まったらしい。

「どんなチームなんスか？」

「このチームの特徴は、疲れ知らずの体力と、当たり前負けしない足腰の強さを備えていることだそうです」

「彼らと戦うためには、基礎体力と身体能力の強化が必要になってくる。カタール戦までに、この2点を徹底的に鍛えること。いいな」

「はい！」

それだけ言うと、久遠監督はまたどこかへと姿を消してしまった。いつもどこで何してるんだろ。たまに練習見に来てたりとかするけど、それ以外は何をやっているのかさっぱり分からない。籠りで相手の国の情報とか対策でも練っているんだろうか。

「……とは言うものの、基礎体力を身につけるってどんな練習をすればいいんだ？」

先ほど意気込んだは良いものの、どうすればいいのか全く浮かんでいない円堂が唸る。

「そりゃあ、走って走りまくるしかねえだろ。体力つけるにはそれしかねえ！」

「それもそうだな、よし！ これからみんなで走り込みだ！」  
うへえマジか……。

走り込みとか私の一番嫌いな練習なんだけど。確かに基礎体力をつけるには走ったりする有酸素運動が一番手っ取り早いと思うしスタミナもつく。地味だけど足腰も鍛えられて、やればやるだけ身にはつくからそれで良いと思う。良いとは思うけど、やっぱり地味だしキ

ツいし面白くない。けど仕方がない、強くなるためにはそうするしかない。

そう思いながらいざグラウンドへ行くが、そんな日に限って灼熱の太陽が照りつける猛暑だ。めっちゃ暑い。

「うわあ暑っつい……」

「今日に限って嫌になるくらい天気が良いな」

「あ、日焼け止め塗ったよ」

「やっぱり女の子って日焼けしたくないものなのか？」

「そりやそうよ。みんながみんなって訳じゃないと思うけど、私はあんまり日焼けしたくないかな。ヒリヒリするし」

「へえ、でも確かに結城の肌って白いし綺麗だよな」

風丸が急にそんなことを言い出すのでドキツとする。ハツと我に返るように風丸も頬を赤らめ顔を晒す。

「うん？ どうしたんだ二人とも？」

「放っておけ円堂、それよりも早く練習を始めよう」

「つたく、イチヤつくなら他所でやれよ……」

不動はともかく、鬼道にまで呆れられる始末だ。

うるさいな、私だって分かってるよ。てか一番恥ずかしいのは他でもない私と風丸だからね。そりや嬉しかったけど、何もこんな大勢の前で言わなくても。

嬉しいけど恥ずかしいというなんとも言えないこの感情はどうすればいいものか。それはもう練習にぶつけるしかない。そう思った私は、私と風丸を置いて一定の速度で走り出していた円堂たちを一気に追い抜き、グラウンドのトラックを猛ダッシュで走り出す。風丸も同じような答えに至ったのか、私の隣を猛スピードで走っている。

「あいつら凄えな！ おれも負けてられないな！」

「なんだか分かんねえけど、俺も負けねえ！」

そんな私たち二人に追いつこうと、円堂と綱海が猛ダッシュをし始める。いやいや、あんたらはついてこなくてもいいから。てか円堂はちゃんとみんなを引っ張ってやれよ。

「……俺たちは普通のペースで行こう」



鬼道がどこか諦めたようにみんなを先導する。ごめんね、私たち四人ともバカでごめんね。

そんなこんなでトラックを数十周したところで、私と風丸はグラウンドにへたり込み、二人で顔を見合わせる。そこにあるのは走りきったという達成感と、くたくたでとても疲れた顔。それがどこか可笑しくって、二人とも吹き出して笑い合った。走り込みを始める前の恥ずかしさは既にもうどこかへ行ってしまった。

「ハア、ハア……速えーな二人とも」

「あー疲れた！ でもなんで二人ともあんなに張り切ってたんだ？」

少し遅れて走り終えた円堂と綱海が駆け寄ってくる。

「んー、なんでだろうね」

「なんでだろうな」

あまりにくだらないし、特に言うようなことでもないので二人で言葉濁すように言う。

「なんだそりゃ」

「まあまあ、やる気があるのは良いことだ！」

「んで、この後はどうすんの？」

「うーんそうだな……」

「あとは各々で自主練で良いんじゃないか？」

「そうだな、そうするか！」

そうこうしている内にみんなを引き連れて走っていた鬼道たちも走り終えたようで、円堂がすかさずこの後の指示を伝えに行く。

「さてと、自主練ってことは……アレやりますか」



「うーん、イマイチ上手くないかないな。何か足りてない気がするんだよね」

「あともう少しで形にはなりそうなんだよなあ」

走り込みが終わった後、予定通り自主練となった時間帯で私は以前緑川に持ちかけていた連携技の特訓をしていた。必殺技のイメージは出来ているというか、既に前世で見たことあるからやってみれば案外出来るかなと思っていたけど、全然そんなことはなかった。さすがにそう簡単にはいかないか。

「タイミングも特にズレている訳でもないし、パワーが足りてないってこともないと思う。だとしたら上手くいかない要因はなんなんだろう……」

「考えても無駄さ、こういうのは回数を重ねていく内に気づいてくるものだよ」

緑川にそう諭され、私たちは再び連携技の特訓に励む。元々エイリア学園で使われていた技というだけあって、難易度はなかなか高い。けどその分威力は申し分ない。これをマスターすれば、恐らく世界にも通用するはずだ。

「おっ、今いい感じだったんじゃない!？」

「少しずつ近づいてきてる。完成までもうすぐさー!」



カタル代表デザートライオンとの試合当日、私たちは再び舞台のフロンティアスタジアムの前に来ていた。

「よし、行くぞ!」

「虎丸くーん!」

「えっ、乃々美姉ちゃん!？」

気合十分、いざ戦場へ! と張り切ってフロンティアスタジアムの中へ入ろうとした瞬間、虎丸を呼ぶ謎のお姉さんが大きなBoxを抱えて歩いてくる。

えーと、確か虎丸の実家のお店を手伝いに来ているお姉さんだったっけ。私は実際に行ってなかったけど、円堂と豪炎寺、マネー

ジャーたちは虎丸の事情を知るべく色々と探ってたみたいだ。そのためかそれ以外のメンバーはこのお姉さんが一体誰なのか分かっていない様子だった。

「誰あれ？」

「虎丸くんのご近所さんよ」

「綺麗な人っス……」

おい壁山、鼻の下伸びてんぞ。

「な、何しに来たんだよお」

虎丸がいかにも照れた様子で乃々美に詰め寄る。おいおい、応援に来てくれたっばいのにその言い方はないでしょ。まあでもあれか、小学生の頃って大体そんなもんか。運動会とかで親族が応援に来てても恥ずかしがったり、そういうお年頃だもんね。

「今日大事な試合なんでしょ？ はい、みんなの分。お弁当作ってきたの」

「うおーっ！ マジっスか!？」

乃々美が中身を開けて見せてくれる。うわあ、めっちゃ美味そう。綺麗な三角おにぎりに豊富なおかずのレパートリー。こりや将来は良い嫁さんになるね。なんなら私がいきたいくらいだ。冗談だけど。

「へえ、美味そうじゃねえか」

「こりやあ力が湧いてくるぜ」

「これ食べて、必ず勝ってねみんな！」

「はい!!」

『F F I アジア予選第2試合、日本代表イナズマジヤパン対カタール代表デザートライオンの一戦が今！ いよいよ始まります!』

今回の試合、スターティングメンバーの編成は前回初戦の時と少しだけ変わっている。

F W 吹雪、豪炎寺、ヒロト

M F 風丸、鬼道、緑川、結城

D F 綱海、壁山、木暮

DFを一人減らし、MFを追加したことで攻守にバランスの取れた陣形となっている。もうちょっと詳しくいえば、前回よりも若干攻撃的なフォーメーションだ。

『フィールド上では初戦でオーストラリアを下した、イナズマジャパンのスターティングメンバーが並んでいます!!』

ふとチラリと相手国のベンチを見てみると、妖艶な雰囲気を漂わせる女性監督と、目の下の隈が特徴的で腕にキャプテンマークを付けた選手……確か名前がカイルだっけか。その2人の姿が目映った。

『対してエリザ・マノン監督率いるカタール代表デザートライオン。キャプテンのカイル選手を筆頭に並外れた身体能力と、優れた個人技を誇るプレイヤーが揃っているとのこと!』

両国のチームがセンターラインに並んで立ち、それぞれのキャプテンの円堂とカイルが前に出て握手を交わす。

『さあ両チーム、一体どのような試合を見せてくれるのか!? 間もなく試合開始です!』

審判のホイッスルが高らかに鳴り響き、ついにカタール代表デザートライオンとの試合が始まる。

## 8話 VSカタール戦

デザートライオンとの試合が開始し、イナズマジヤパンの先攻でボールは動き出す。センターサークルから豪炎寺が吹雪にボールを蹴り、吹雪から私にボールが渡る。

『さあイナズマジヤパン、最初にボールが渡った結城を中心に他の選手が攻め上がって行く!』

イナズマジヤパンの司令塔といえば、誰がなんと言おうと鬼道だ。鬼道を中心に、ゲームは組み立てられていくといっても過言ではない。前回のビッグウェーブス戦でも鬼道が主にボールを運び、イナズマジヤパンの攻撃の主軸となっていた。が、今回はその役目を私が担う事になっている。

なぜそうなったかというきっかけは、試合開始5分ほど前に遡る。久遠監督からチームのみんなに言い渡された指示は、以下のたった一言だけだった。

——今回の試合、攻守の主軸は右サイドの結城を中心に組み立てていけ。結城、お前も攻撃は常に最前線、守備はゴール前でプレイするくらいのつもりで意識しろ——

要するに私がボールを運び、点を取りに行きながら尚且つゴールを守れってこと。確かにMFは時と状況に応じて攻めに行ったり、守りに入ったりと攻守の切り替えが激しい右往左往するポジションだ。けど、攻めるときは誰よりも前に、守りときはゴール前で、なんてコートの端から端まで動きまわることはない。というか普通に考えて体力が持たないし無理。

監督のその指示を聞いた時は、私を含めチームのメンバー全員が呆然としていた。ゲームメイクを鬼道ではなく私に任せるってだけでも異例なのに、そこから更に私に攻守はフル参加というある種の試練

を与えてきた。何人かは反対の意思を露わにしたが、監督の「嫌ならベンチに下がれ」という有無を言わさぬ一言で押し黙ってしまった。おい、そこはもうちよい反発しないのか。なんていつておきながら私は何にも言わなかつたけど。てかこんな指示原作では聞いてないし、今回は監督の考えがマジで読めない。鬼道じゃなくて私にボール運びをさせるメリットってなんなんだろう。それに攻守フル参加て……鬼畜にも程がある。

ってなわけで、早速私がドリブルで攻め上がっていき、他のみんなも前線に上がっていく。

「女だからって容赦しねえぞ！」

「むしろ舐めてかかると痛い目見るかもよ？」

早くも私をマークしてきた相手FWのザックが突っ込んでくる。確かデザートライオンの選手はみんな当たりが強くてラフプレーもお手の物なんだっけ。私みたいな、か弱い女の子がタックルなんてされた日にはひとたまりもないだろう。まあそれはさておき、なかなか鋭いスライディングで私からボールを奪いにきたザックを飛び越えて躲し、続けてタックルをかましにきたもう一人のFWマジディに、身体が接触する寸前でドリブルをピタリと止め、タイミングをずらし、緩急をつけて抜き去る。いくら当たり負けしない足腰の強さがあるろうと、当たらなければどうということはない。実際に出るかどうかはまた別の話だが。

『なんと結城、デザートライオンの激しいディフェンスを掻い潜ってボールを淡々とゴール前まで運んでいく！』

「いぞ結城！」

「あの5番を止めろ！」

デザートライオンのキャプテン、カイルが指示を出す。ちなみに5番というのは私のユニフォームの背番号だ。栗松の番号をそのままもらっていることになっている。

カイルの指示で相手DF2人がプレスをかけに来るが、それに捕まる前にマークが空いていた豪炎寺にパスを出す。

「決めろ吹雪！」

そしてそのまま吹雪にラストパス。フリーの状態でボールを受け取った吹雪はシュート態勢に入る。

「ウルフレジエンド……うおおおッ!!」

「くそっ……ぐっ!?!」

吹雪の雄叫びとともに放ったシュートをカイルが身を呈して止めようとする。カイルの抵抗虚しく、勢いは完全には止まらず吹っ飛ばされてしまったが、それでも威力の落ちたシュートは相手キーパーのパンチングにより防がれ、ボールは一旦コートの外へと出る。

『イナズマジヤパンあと一歩のところ得点ならず! 一方デザートライオン、カイルの身体を張ったディフェンスにより一旦危機を逃れました!』

ゴールは逃したが、イナズマジヤパンのコーナーキックから試合は再開するため、以前チャンスには変わりない。ちなみにキッカーには風丸が入る。本人曰く試したい必殺技があるらしい。

ふう、と風丸が一つ息を吐き、集中力を高める。次いでトントんと軽くジャンプし体をほぐした後、キックのモーションに入る。

「来るぞ!」

「これが俺の新必殺技だっ!!」

風丸が勢いよく蹴りつけたボールは、大きく弧の字を描きながらカーブし、そのままキーパーの伸ばす手に阻まれることなくゴールに吸い込まれていく。なんとというか、割と呆気なく1点目を取ってしまったというか……いや、普通のサッカーならスパーゴールなんだと思うけど、超次元サッカー的に見ると少し地味だ。けどまあ1点入ったし、風丸も嬉しそうにしてるからいいか。

「大きく弧を描くシュート……まさに「バナナシュート」ってちょ、なんで先に言っちゃうんですか!?!」

ベンチではメガネが必殺技の命名をしようとしていたが、冬花が先に技名を言ってしまう涙を流していた。いや泣くほどの事かね。まあ確かにメガネからそれを奪っちゃうと自称戦術アドバイザーの仕事は無くなっちゃう訳だが。

『さあデザートライオン! 反撃となるか!?!』

デザートライオンからのキックオフにより、試合は再開する。ザックがドリブルで上がってきているところを緑川がディフェンスに行く。

「邪魔する奴は吹き飛ばす！」

「思う念力岩をも通すつてね！ 努力は必ず報われるものさ」

緑川がザックからボールを奪い去る。おお、緑川気合入ってるね。こりゃあ私も負けてられない。前線でマークを振り切っていたヒロトとアイコンタクトを取り、私は攻め上がっていく。

軽快なドリブルで進んでいく緑川に、相手が2人がかりでディフェンスにつきにくる。

「結城ー！」

ディフェンスにマークされる前に緑川が私にパスを出す。それを読んでいたのか、カイルが私をマークするよう素早く指示を飛ばす。

「5番だ！ 奴につけ！」

『パスが出された結城に素早くマークしに行く！ これは読まれていたか!?』

緑川から来たパスを、私はトラップせずに素通りする。ボールは私をすり抜けていき、そのまま直線上にいたヒロトに繋がった。元宇宙人コンビ+おまけで私の息の合った連携だ。

「なに!?!」

『おおつとイナズマジヤパン！ これは裏をかいたパスワークでデザートライオンを翻弄する！ そしてパスを受け取った基山は完全にフリーだあ!!』

「流星ブレードっ！」

ヒロトの放った渾身のシュートに相手キーパーは反応しきれず、そのままゴールが決まる。早くもイナズマジヤパン追加点で、スコアは2-0となる。このまま勢いに乗って勝利となるかに思えたが、久遠監督だけは表情を変えないまま、何かを気にするように照りつける太陽を見上げていた。私はというと、まだ前半が始まって間もないから誰も気にしていない様子だが、デザートライオンの地味なしつこさと粘り強さに、少し驚いていると同時に不安を抱いていた。まず、デ



ザートライオンの選手たちはとにかく動く。やっぱり目立つのは激しいタツクルだったりとか強引なドリブルだけど、それ以外にも地味にフォロワーに入っていたり、ディフェンスは2人がかりでプレスをかけにきたりと総動員してプレイしてる感じだ。

故にイナズマジヤパンのメンバーもそれを突破していくために動き回っている……いや、動き回されると言った方が正しいかな。体力がある今のうちにできるだけ有利に立っておきたい、けど相手のペースに合わせてるとあつという間にみんなへろへろになってしまう。

どうしたものかと考えていると、審判のホイッスルが鳴りデザートライオンのキックオフで試合が再開された。前方から再びFWのザックがドリブルで突っ込んできているのが目に入る。

「……考えていても仕方がないっ」

私がそれを止めようとディフェンスにつく。が、ザックは強引に突破しようとしてタツクルを仕掛けにくる。非力な私じゃ張り合うことも出来ず、いとも簡単に跳ね除けられてしまう。

「結城！」

「大丈夫！ それよりも緑川と木暮はザックをマークして、2人でプレスをかけて！」

「分かった」

「任せろ！」

素早く2人に指示を出しつつ、私も態勢を整えてすぐさまDFラインまで走り下がる。

「どけえっ!!」

「くっ、なんてパワーだ！」

ザックの猛攻を止めるため、緑川と木暮が2人掛かりで身体を張ったディフェンスをする。少しだけ拮抗した様子を見せたが、ザックの勢いは留まることを知らず、なんと2人ともまとめて力技で吹っ飛ばしてしまった。

「なんてやつだ……！」

「へっ、俺たちの砂漠で鍛えた足腰を舐めてもらっちゃ困るぜ！」

あつという間にザックが円堂のいるゴール前にまで迫る。完全にフリーの状態と思われたが、私が横から遮るように間に入り、ザックの前に立ちはだかる。

「女ごときじゃ止められねえよ!」

構わずザックがシュートを放つ。ボールはゴールめがけて一直線に進んでいくが、私はそれを勢いをつけた回し蹴りで跳ね返そうとする。

「ぐっ!? 重っ!」

砂漠で鍛えられた足腰から放たれるシュートは並の威力ではない。だからと言って押し負ける気は毛頭ないけど。

ボールに押し付けている右足を振り切り、なんとかシュートをクリアする。

『ザックの強烈なシュート! しかしそこは結城によって弾き返されます! イナズマジヤパン、ピンチを乗り切りました!』

「鬼道さん!」

クリアしたボールは転々としつつ壁山が拾い、続けて鬼道にパスを通す。みんなもそれを合図に一気に前線に上がっていく。この機を逃さずカウンターで前半のうちにもう1点取っておきたい、そう思いつつも私も駆け上がった。いった。

鬼道がドリブルで中盤まで持ち込み、再び私へとボールが渡る。次いで1人、2人とフェイントと股抜きで躲しながら右サイドギリギリの所まで上がっていき、ゴール前に少し高めのセンターリングを上げる。

ゴール前にかたまっていた両チームの選手の中から一人、豪炎寺がボールの高さまで飛び出し、体を捻ってオーバーヘッドキックでシュートを放った。やはり跳躍力でいえば豪炎寺の右に出るものはいないだろう。

「させるかっ!」

カイルが先ほど私がやったようにシュートを蹴り返しクリアする。ボールはあらぬ方向へ飛んでいき、コートを出たがそれと同時に長めのホイッスルが鳴り響く。前半戦終了の合図だ。欲を言えば、今の

チャンスでもう1点取っておきたかったが、防がれたものは仕方がない。

『ここで前半戦終了です！ イナズマジヤパン、2点リードのまま前半を終えました。対するデザートライオン、後半からは反撃となるか!?!』

ハーフタイムとなり、両チームの選手がベンチに下がっていく。試合中は気づかなかったけど、試合が始まる前よりもさらに気温が高くなっている気がする。2点リードの有利な立場といえど、みんなの足取りは決して軽快なものではなかった。

「みんな良い感じよー！」

「後半もこのままの調子で行こうぜー！」

木野と円堂がみんなを活気つけるが、スタメンのほとんどはくたびれた様子で座り込み、タオルで汗を拭いていた。まだ余裕がありそうなのは、私を含め円堂、鬼道、豪炎寺くらいか。

ふと相手ベンチの方を見ると、こちらの様子を眺めていた監督のエリアザとキャプテンのカイルが口元を緩ませていた。まるでここまでの展開が予定通りだとも言わんばかりに。

## 9話 砂漠の戦士

ハーフタイムが終わり、後半からはデザートライオン側のボールからスタートする。審判のホイッスルが鳴り、後半開始の合図となる。ふと気が付いたけど、デザートライオンは後半からFWを3トップにし攻撃的な陣形に変えてきたようだ。

「行くぞー！」

FWのザックがまずはドリブルで攻め上がってくる。それを見た鬼道と緑川が二人でマークしにかかる。

「邪魔だー！」

「ぐっっ！」

が、ザックのパワーに押し負けてしまい割とあっさり突破されてしまう。てか二人とも前半に比べて若干動きが悪くなっている。まだ後半が始まったばかりにもかかわらずだ。緑川は大分疲れが出ているようで、鬼道はスタミナ切れというよりかは暑さに参っているみたいだ。

「DF陣はラインを下げ、ゴール前を固めて！ 私と風丸くんも後ろに下がって守りに入るよ！」

私の指示で、DFのみんながゴール前に位置をとる。

こちらのDFラインを下げることで、相手側のオフエンスエリアは増えてしまうが、あまり動き回されないようになる。あらかじめゴール前を固めることで裏を取られることがないから、走り回らずとも少量の運動量で守りに入れる。両サイドのMFである私と風丸もポジションを下げて、少しだけ守備よりのMFに移行する。いわゆるボランチというやつだ。

『おっとここでイナズマジヤパン、前半でもぎ取った2点を守り切る体制に入ったか!? DFラインを下げ、後半は守りに専念するようだよ！』

「フツ、そんなことをしても無駄だ」

キャプテンのカイルがほくそ笑みながら言う。確かに、イナズマジャパンのスタメンはもう既に大半がスタミナ切れの状態にある。今さらこんなことをしても単なる時間稼ぎくらいにしかならないかもしれない。けど私にだって考えがあるから指示を出しているんだ。何も闇雲に守りに入れれば良いとか思ってるわけじゃない。

「これ以上は行かせない！」

「なにっ!？」

風丸がスライディングでザックからボールを奪い取る。そしてそのまま私に鋭いパスを繋げる。

D Fラインを下げると相手のオフエンスエリアが広がり、更にはこちらのD FとM Fの間にスペースが空いてしまう。それを私と風丸が両サイドのボランチに入ること、その空いたスペースを埋める。

細かいことを言えば、二人とも同じボランチでも私と風丸で役割が少し違う。どちらかという私は中盤のM Fへのパスを繋げる攻撃的なボランチ、風丸が相手のボールを奪取する守備的なボランチだ。要するに、風丸が相手からボールを奪って攻撃の芽を摘み、私がそれを前線に繋げてカウンターの起点を作るって感じだ。みんなの動きを最小限にした分、二人の負担が少しだけ重くなる。

私はまだスタミナに余裕があるから大丈夫だけど、風丸の方は大丈夫だろうか。元陸上部ということもあってかまだまだ走り回れる体力はあるみたいだけど。

「鬼道ー！」

私が中盤に位置する鬼道へパスを出し、イナズマジャパンの反撃が開始する。といっても私的には今は積極的に点を取りに行かなくてもいいと思う。入ったらラッキー程度だ、今はまだ攻め入る時じゃない。けど、試合前の監督からの命令『コートの手前から端まで全力でプレイしろ』があるから仕方なく攻撃にも参加しに前線へ駆け上がっていく。

「吹雪ー！」

鬼道が吹雪にパスを出す。いつも通りの鋭いパス、だけど普段の吹雪なら余裕で取れていた。しかし鬼道のパスに足がついて行かず、

ボールは吹雪を追い抜いてそのままコートの外へ出てしまう。

「ハア、ハア……ごめん鬼道くん」

「いや、今のは俺の出した位置も悪かった」

「吹雪くん大丈夫？ 大分疲労してるみたいだけど……」

吹雪が膝に手をつけてゼゼエと肩で息をしている。もうほとんどスタミナが切れかかっている。気温が高く暑い中で、立っているのもやっとだろう。

「もう少しだけ、コートにいさせてくれないかな。次は足を引っ張らないように頑張るから」

そう言つて吹雪はニコツと笑顔を見せる。なるほど、これは確かに女の子にモテるのも納得だ。守つてあげたくなる母性が駆り立てられると同時に、男らしさも垣間見えるという見事なギャップ。風丸がいなかったらきつと私の推しメンになっていたに違いない。

「無理はしないでね」

「俺たちもなるべくカバーには入ろう」

「うん、ありがとう」

M Fのメツサーのスローインでカイルにボールが渡り、試合が再開する。ボールを受け取ったカイルはそのままドリブルでこちらに攻めてくる。すかさず緑川がプレスをかけに行く。

「そろそろ体力の限界が来ているのだろう？」

「……っ！」

「数日そこらで基礎体力をあげようとしたつもりみたいだが、所詮付け焼き刃だ」

カイルのタックルであっさりと緑川が跳ね除けられる。

「ザックー！」

カイルがF Wのザックにパスを出し、一気に中盤まで攻め上がってくる。そして同時にゴール前まで走ってきていたF Wのマジデイに高めのパスを上げる。

「マジデイー！」

「させるかよー！」

そのパスにゴール前で守りを固めていた綱海も反応し、マジデイと

同時に飛び上がる。

「はあああッ！ 吹っ飛べ!!」

マジデイと綱海が同時にヘディングでボールに食らいつくが、マジデイの力に押されて綱海もろともゴールにボールを押し込む。

「なっ……!?!」

「綱海!」

円堂が反応するが時すでに遅く、ボールと共に飛ばされた綱海を止めきれずにゴールを許してしまった。

『ゴォール!! デザートライオン、ついに1点を奪い取りました!』

このまま勢いに乗れるのか!?!』

「くっ、なんてパワーだ……綱海? おい綱海! 大丈夫か!」

ゴールに押し込まれ、倒れ込んだまま立てずにいる綱海に円堂が必死に声をかける。

それと同時に、ピッチに立っていた緑川が急にフラツと倒れそうになり、たまたま近くにいた私が慌てて支える。

「緑川くん!? ちよっ、大丈夫!」

完全に息が上がっており、それに加えて足が僅かに痙攣していた。過度なオーバーワークがここで響いてきたのか。

「ここからおれたちのサッカーの始まりだ」

キャプテンのカイルが私たちの前に立ちはだかる。

「おれたちは灼熱の砂漠のフィールドで育った。鍛え上げられた身体と無限の体力、それがおれたちの最大の武器だ」

「彼らの目的は、イナズマジャパンのスタミナを削ぐことだったんですね!」

メガネが合点がいったかのように立ち上がる。まあ監督と私は既に気づいてたし、知ってたけどね。

「だからあんなにラフプレーを……!」

「みんなの消耗が激しいのもそのせいね」

「しかも今日のこの気温の高さ、非常にまずいですよ。このままでは……」

「お前たちは砂漠を彷徨う旅人同然……あとは息の根が止まるのを待

つのみだ。せいぜい足掻くがいい」



「選手交代だ。土方、飛鷹、準備しておけ」

続行不可能になった緑川と綱海に代わり、土方と飛鷹がそれぞれピッチに入る。ちなみに飛鷹は綱海が元いたポジションそのまま、土方はDFとして入り、1―4―3―3のフォーメーションに変更される。

F W 吹雪、豪炎寺、基山

M F 風丸、鬼道、結城

D F 飛鷹、壁山、木暮、土方

G K 円堂

フォーメーションの変更に伴い、ボランチに下がっていた私と風丸も元のポジションに戻り、一度リセットして試合に臨む。

イナズマジヤパンのボールから試合は再開し、私が先陣を切ってドリブルで前線に上がっていく。

「もらったぜっ！」

ザックが勢いよくスライディングタックルを仕掛けてくるが、ボールを浮かせて短くジャンプしてかわす。続けてプレスをかけに来たメッセも、浮かせたボールをヒールリフトで蹴り上げてもう一度ボールを浮かせ、メッセの頭上を通り越して突破する。

「あの女、少しはやるようだな」

カイルが呟きつつ、ディフェンスを固める。

「僕にパスをー」

吹雪の要求に応え、私はすぐさまパスを出す。私のパスをトラップした吹雪はシュート態勢に入る。



「ウルフ……レジエンドツ!!」

どこか力の入っていない、いつもよりも威力が落ちた吹雪のシュートがゴールに迫る。

「ストームライダー!」

しかしGKのナセルの必殺技に阻まれ、吹雪のシュートはいとも簡単に止められてしまった。

「くそっ……僕は、こんな所で……」

そう呟きつつ、ついに吹雪までも倒れてしまった。

すぐさまチームメイトのみんなが駆け寄るが、とてもプレーを続行できるような状態ではなかった。

「選手交代だ、虎丸」

吹雪のいたポジションにそのまま虎丸が入り、試合は再開する。どうでもいいけど、そういえば不動って今のところ完全に空気だね。さつきとか今の交代で不動が出るのかと思ったけど、わざわざポジション変えてまで土方たちを入れてきたし。まあ不動の反応がいちいち面白いから私は別に構わないけどね。

『さあキーパーのナセルのゴールキックから試合は再開です! 後半も残り時間が少なくなってきた中、試合はどう動いていくのか!』  
ナセルがザツクへとパスを出し、続けてザツクがカイルへと繋げようとする。

「カイル!」

「もらった!」

そこを入ったばかりの虎丸がインターセプト。ボールを奪っていき、素早いドリブルでカウンターを仕掛けに行く。

「止める!」

「……行ける!」

相手DFのファルとジャメルが二人掛かりで虎丸のディフェンスにつくが、それをあっさりとフェイントで抜いていく。

「いいぞ虎丸!」

そのままゴール前まで持ち込んでいった虎丸は、キーパーと一対一というチャンスにもかかわらず、一瞬シュートモーションに入ったか

と思えばクルリと向きを変えて後方の豪炎寺へとパスを出す

「なっ……!? くっ、爆熱ストーム!!」

「ストームライダー!」

虎丸の予期せぬパスに一瞬狼狽えた豪炎寺だったが、すぐさま意識を切り替えシュートを放つ。が、惜しくもナセルにがちりシュートを止められてしまった。

「虎丸、なぜ今の場面、自分からシュートを打たなかった?」

「えっと、豪炎寺さんの方が確実にゴールを決められる確率が高いと思っただけ」

「あれだけフリーの状態で、それもキーパーとの対一の場面でか?」

「はい……」

ここでこれ以上言っても意味がないと悟ったのか、今はそれ以上は口を開かなかつた豪炎寺だったが、その表情はどこか不満そうな様子だった。

しかし、その直後に事は起こった。キーパーのナセルから受け取ったボールをザックが一人で運び、カイルにラストパスを送る。

「ミラーージュシュート!!」

「はああああッ! 正義の鉄拳G3!!」

円堂の必殺技でカイルのシュートを辛うじて弾くが、その弾いた先に走りこんできていたザックによりヘディングでボールを押し込まれてしまう。

『な、なんと! ザックのゴリ押しで2点目の追加点! これは試合の展開が大きく変わってきました!!』

## 10話 ハードワーカーとファンタジスタ

『さあ2対2と同点に追い付かれたイナズマジャパン、残された時間の中でもう一度突き放すことが出来るのか!?!』

後半もロスタイムに入り、私たちには限られた時間しかない。けど今の流れは完全にデザートライオンに来てる。このままだと正直かなり厳しい。せめて何か一つ、きっかけさえあればこの状況を打破できるかもしれないけど。

そんなことを考えてる内に、虎丸のキックオフで試合は再び動き出す。

「みんな上がれ！ 最後まで攻めるんだ!!」

鬼道が前線に上がりながら必死でみんなにはっぱをかける。それを聞いてみんなも最後の体力を振り絞って駆け上がっていく。

「体力の限界がきているこの状態で延長戦に入れば、今のイナズマジャパンでは勝つ可能性が限りなく低くなってしまいます。このラストプレーで1点をもぎ取れなければ……」

ベンチでメガネが悔しそうに呟く。確かにその通りだ。このまま延長戦に入れば、まず間違いないで負ける。

なんとしてもここで点を取らなければ、と思っているとボールを持っていた虎丸が相手のデیفエンス陣を抜き去り、ゴール手前まで持ち込んでいた。その後ろからは豪炎寺も走りこんできているが、この場面ではまずパスはない。普通に考えて自分からシュートに持ち込む場面だ。しかし……。

「豪炎寺さんっ！」

虎丸はまたしても、ゴールを目前にして豪炎寺にバックパスを出した。そのボールを受け取った瞬間、豪炎寺の顔は怒りの色へと変わり、思いつきりシュートを放つがその先はゴールではなく虎丸に向かっていき、見事に直撃した。豪炎寺、とうとうキレたか。てかやつとキレたか。正直もつと早めに”治療”は始まると思ってたけど、案

外経過観察の期間が長かったな。

「いつてて……何するんですかつ！」

「さつきからなんだ、お前のプレーは？ 試合時間は残っていないんだぞ。精一杯、ベストと思えるプレーをしろ！」

「これがおれのベストです！ おれのアシストで、みんなが点を取る。それが一番なんです。そうすればおれが、みんなの活躍の場を奪わなくて済む……みんなで楽しくサッカーが出来るんです!!」

「ふざけるなっ!!」

虎丸の主張を豪炎寺が真っ向から否定する。そりやそうだろうね、そんなことを言われりや私だって怒る。要するに接待でサッカーされてるって意味だからね。大人社会じゃまだしも、子供同士の真剣勝負にそんなクソみたいな理由で手抜きされれば誰だって怒る。けど、虎丸にも事情があるのは知ってるし、それは多分育った環境が悪かった。

子供ながらにサッカーの天才だった虎丸に、嫉妬の目を向ける子供達。それに耐えきれず、自分を押しさえ込んで他人を持ち上げること、自分が目立たずに自然と輪に溶け込めるようになる。

まだ小6だというのに、そんな歪んだ付き合い方を知ってしまったのは、環境が悪かったとしか言いようがない。

「そんなサッカーは、本当の楽しさじゃない」

豪炎寺も虎丸の言葉からその事を感じ取ったのか、先ほどのように声を荒げることはなく、諭すかのように静かに言い聞かせる。

「見ろ……ここに居るのは、日本中から集められた最強の選手たち」

そう言いながら、豪炎寺は私たちイナズマジャパンのメンバーたちを示すように手を広げる。

「そして……敵は世界だ！」

続けて今度は相手コートのデザートライオンを示すように手を広げる。

「俺たちは世界と戦い、勝つためにここに居るんだ。その事を忘れるな」

「そうだぞ、虎丸。全員が全力でゴールを目指さなきゃ、どんな試合に

も勝てないぜ」

「もつと私たちチームメイトを信じてみてもいいんじゃない?」

豪炎寺に続けて円堂、私も虎丸の元へと近づき声をかける。コートにいたイナズマジヤパンのメンバーも集まってきたようだ。

「チームメイト……」

「そうだ、今の思いを全部サッカーにぶつける。おれたちが全部、受け止めてやる!」

「キャプテン……!」

「さあ、やろうぜ虎丸!」

「……いいんですか? おれ、思いつきりやっちゃっても!」

虎丸の顔付きが変わり、子供らしい満面の笑みで白い歯を見せる。おつと危ない、今の笑顔を見て目覚めそうだった。相手はまだ小6だ、抑えろ私。

「ああ、俺を驚かせてみる虎丸!」

「はいっ!!」

後半ロスタイムになってやっとチームが一丸となったところで試合は再開。ザツクのスローインから始まり、マジデイにボールが渡りザツクへと戻される。そのままザツクが攻め上がってくるが、飛鷹が気合いを入れながら髪を整え、そしてザツクに気迫に満ちたプレスをかけに行く。

「うおおおおっ!!」

「くっ、なんだコイツ!」

それにビビったのか、ザツクはカイルへと即座にパスを出そうとする。

「させるかっ!!」

そのパスを風丸が割り込みインターセプト。続けて私にパスを送る。ナイスパス。

「しまった……!?!」

「いいぞ飛鷹、風丸!」

『ここでボールは結城へと渡った! イナズマジヤパン反撃のチャンスとなるか!?!』

このボールは絶対に何があっても前線へと繋いで見せる。この試合、負ける訳には行かない。

「行かせるか!!」

カイルが私をマークし、ボールを奪いに来る。

「女のひ弱な体格なら、体さえ当てればこつちのものだ。大人しくボールを寄越せ!」

横から激しいタツクルをかまそうと、私に体を当てに来る。が、それは空振りに終わり、カイルのタツクルは虚しく空を切る。

「なっ、消えた……!?」

カイルが驚きで目を見開く。しかし異変に気付き、足元の影を見てハッとする。

「まさか……上か!!」

「気付いても遅いよ」

私はカイルの頭上からニヤリと笑う。

本人は消えたと言っていたが、そんな訳ない。いや、超次元のこの世界だとあり得るのかな。けどまあそんな大したことはしてない。ただカイルのタツクルのタイミングに合わせて瞬時に高く飛んだだけだ。カイルの頭上を越えるくらいまで飛んだから、一瞬消えたように見えたのだろう。

ちなみに豪炎寺のファイアトルネードや爆熱ストームはこれよりもさらに3倍くらい高く飛んでるからヤバイ。

「虎丸!」

私の空中からのパスを、虎丸は受け取る。

その前方ではデザートライオンのMF陣たちが立ちはだかっているが一人、二人、三人と怒濤の勢いでぶち抜いて行く。おいおいヤベーな、とても小6とは思えない突破力だわ。

「あいつ、あんな力を……まさか! 分かっていたと言うのか、あいつの実力を」

ベンチで座っていた不動がいきなり立ち上がり、驚いたように久遠監督を見る。コートで楽しそうにプレーをする虎丸を見て、久遠監督はほんの僅かに口元を緩めた。

「こいつっ！」

続けざまにスライディングタックルで相手がボールを奪いに来るが、虎丸は難なく飛び越えて突破していく。

「激しいチャージを躲す身体のしなやかさ。崩されても倒れないボディバランス。特訓して身につくものではない。あれが……虎丸の個性だ」

ベンチのメンバーたちに言い聞かせるかのように、久遠監督が珍しく口を開く。それを聞いて不動も不敵に笑い、監督の狙いや考えを悟ったようだ。

「あいつの実力を見抜いていて、このタイミングで投入。さらには初っ端のあの馬鹿げたルール。全て分かっていた上で仕組んでたってのか」

「そうか！ 虎丸くんを存分に動かす為には、敵を消耗させておく必要があった。そしてそれは、監督が試合前に結城ちゃんに課したルールと関わってくる」

吹雪が久遠監督と不動の話の話を聞いて、納得したように口を開いて呟く。

「……今回の試合、攻守の主軸は右サイドの結城を中心に組み立てていけ。結城、お前も攻撃は常に最前線、守備はゴール前でプレイするくらいのつもりで意識しろ……」

「味方のために激しく動き回って献身的なプレーをし、さらには相手の運動量を増加させ体力を消耗させる。今のイナズマジヤパンでそれを成せる選手は彼女しかない」

「いわゆるハードワーカーってやつか」

「走り続けてもプレーの質が落ちない無尽蔵のスタミナ。どんな相手にも通用する圧倒的なテクニクとボールコントロール。スピードやフィジカルはまだまだ世界には遠く及ばないが、それをも補う力を彼女は持っている」

「へっ、全て見抜いていた訳か」

「選手には活躍すべき場面がある。チームには勝つべき状態がある。選手たちの能力を結集し、出し切らない限り勝ち続けることは不可能。力を出し惜しんで行ける世界は無い」

久遠監督が今回の試合のハイライトを語っている内に、虎丸はどんどん駆け上がっていく。

「ヒロトさん！」

虎丸が正面のディフェンス陣を躲すために、逆サイドのヒロトへと大きく振ったパスを出す。

『宇都宮、サイドにボールを大きく振る！　しかし基山、これを取れるか!?!』

「このボール、繋いでみせる……虎丸くん！」

ヒロトが意地を見せてボールに追い付き、足を伸ばしてトラップし再び虎丸へとボールを戻す。

「行け！　虎丸！」

「はいっ!!」

虎丸の目の前に、ディフェンスは居ない。キーパーとの一対一だ。ここが正真正銘最後のラストプレーとなる。

「来いっ!!」

相手キーパーのナセルが待ち構える。

「ずっと封印してきたおれのシュート……」

ダンッ！　と力強く地面を踏み込み、空手の型のような構えを取る。その時、私には一瞬だけ背後に虎の幻影が見えた気がした。そして体を捻りつつ右足でボールを思いつき蹴りつける。

「タイガードライブッ!!」

まるで猛虎のような強烈なシュートは、キーパーのナセルが守るゴールへと一直線に突き進んでいく。

「ストームライダー!!」

ナセルも必殺技で対抗しようとするが、それを突き破り見事虎丸のシュートはゴールネットに突き刺さった。

『決まったあああッ!!　宇都宮、試合終了直前にデザートライオンを突き放す強烈なゴォール!!』



「これが虎丸の本当の力か……」

「すげえ……すごいぞ虎丸!!」

そしてそれと同時に、審判の長いホイッスルが鳴り響き、試合終了の合図が流れる。この瞬間、イナズマジャパンのアジア予選トーナメント決勝進出が決まった。

「勝ったんですね……おれたち」

「あれがお前の本気か?」

勝利の余韻に浸っている虎丸のそばに、豪炎寺がゆつくりと歩み寄る。その顔は嬉しそうだが、どこか満足していない様子だ。

「俺たちについてくるには、まだまだ時間がかかりそうだな……虎丸?」

虎丸を挑発するかのように、笑いかけながら豪炎寺がわざと意地悪っぽい言い方ではっぱをかける。

「でもおれ、まだ本気出してませんから……先輩?」

「おつ、言ったな?」

「さあ、次の試合も勝ちますよ! アジア予選くらいで立ち止まったらけませんからねっ!」

「……なんか性格変わってないか?」

鬼道が少し呆れつつ豪炎寺に尋ねる。

「いいじゃないか、おれは大歓迎だぜ!」

「でもなんでこんな凄いやつがフットボールフロンティアで出てこなかったんスカね?」

「出られないんですよ」

壁山の疑問に、虎丸がキツパリと答える。

「えっ、なんで?」

円堂がその理由を尋ねると、虎丸はどこか恥ずかしそうに少しだけ頬を赤らめる。

「だっておれ……まだ小6ですから」

フットボールフロンティアは中学生の全国大会。当時小学生だった虎丸には出場資格が無かったから出られなかったって訳だ。世界大会は各国の事情を考慮して15歳以下の選手なら男女問わず参加

できる。だから虎丸のデータは能力の割に今のところ世界どころか全国区にすら広まっていないだろう。

小学生の間ではちよつとした噂になつてるかもしれないけど、所詮その程度の認知レベルだ。

そんな虎丸の衝撃の事実を知り、私以外のメンバーは数秒固まつて一呼吸置いたあと、一斉に驚きの声を上げた。

「お前小学生だったのか……」

「だからって甘く見てたら、エースの座は頂きますよ。いつかおれ、豪炎寺さんを超えてみせますからねっ！」

## 閑話その2

カターンを制した試合の翌日、アジア予選決勝進出を果たしたイナズマジャパンは、朝の練習を終わらせ宿舎の食堂で鬼道を中心に軽いミーティングを行っていた。

「新必殺技？」

「ああ、オーストラリア戦とカターン戦の2試合を戦って、みんなも世界のレベルの高さは実感したと思う。アジア予選を勝ち抜き、本戦へ進むためにはより強力な必殺技が必要になってくる」

この超次元サッカーの世界において、必殺技というのは持っているか持っていないかで大きく力の差が変わってくる。それだけ必殺技というものは純粋なパワーと爆発力があり、更には観る者を魅了する。余程の実力差がない場合に限るけどね。

「次の決勝までにくつつか新必殺技を完成させようって訳か」

「俺からいくつか案がある。まずは風丸、お前の俊足を生かして新しいドリブル技を身につけてほしい。MFとして自分でボールを運べる突破力を風丸が身につければ、このチームのボールの支配率は一気に引き上がる」

「ドリブル技か……確かに、今持つてる『疾風ダッシュ』じゃはつきり言って世界に通用するとは思えない。となると、新しい必殺技を作るべきか」

風丸が顎に手を当てながら考える仕草をとる。新しいドリブル技のイメージを模索しているのだろう。

「次に土方と吹雪、2人には連携必殺技のシユートを習得してもらいたい」

「僕たちの連携必殺技？」

「ああ、パワーと安定したボディバランスの土方と、スピードの吹雪。2人の連携必殺技があれば、強力な武器となる」

「攻撃の幅を広げるんだな。よし、任せとけ！ やろうぜ吹雪！」

「うん、頑張ろう！」

土方と吹雪も意気投合して新必殺技の開発にやる気十分のようだ。うんうん、仲良きことは良いことだね。

「最後に結城、お前にはここに一番で点を取れるようシュート技を習得してもらいたい」

「……えっ、私？」

「そうだ。お前のテクニクとサッカーセンスはピカイチのものだ。恐らく女子サッカー界でお前の右に出るものはいないだろう。ただ、その中で得点を狙いに行けるシュート技を持っていない」

まあシュート技どころかドリブル技もブロック技も持ってないけどね。つまるところ私には今現在で使える必殺技は一つもない。

あれ、むしろ良くその状態で世界を相手にしてたな私。それも今のところ2試合連続スタメンフル出場だし。やっぱ神様転生の補正すげーな。

「結城が点を取れるようになれば、イナズマジャパンの攻撃力は格段に跳ね上がると思うんだが……」

「それについては心配ご無用だよ。まだみんなには言ってなかったけど、実は緑川くんと2人で連携技の特訓をしてね。もうすぐ完成しそうなんだ、ね？」

そう言っつて私は緑川にウインクをする。それに応えるように緑川もグツと親指を立ててサムズアップ。それを見て鬼道は「ほう……」と意味ありげな表情をしつつ納得し、なぜか風丸が若干不機嫌そうに「へえ……」と呟く。あれ、なんか選択間違ったかな？

「連携技かあ、オレたちもやってみつか！ な、壁山？」

綱海が面白がって壁山と肩を組む。2人の連携技か、正直言っつて全く想像つかないね。

「えっ!! おれっスか!?!」

「綱海と壁山か……なかなか面白そうな組み合わせになるかもしれないな」

「よし！ そうと決まれば特訓だ!!」

「!!おう!!」



その日の夜、必殺技の特訓も終え、みんなで夕食を取った後ののんびりとした時間の中、私は宿舎の廊下を1人でぶらぶら歩いていた。その時ふと、窓からグラウンドに立っているヒロトとその側で地面に膝をつく緑川の姿が見えた。

「何を見てるんだ？」

「あつ、鬼道……と風丸くん」

立ち止まって窓から2人の様子を眺めていると、鬼道と風丸が歩いてきて私に声をかける。

「どうしたの？ こんな時間に」

「少し今後の戦術について風丸と話し合っていたところだ。結城の方こそ、何してたんだ？」

「ちよつと暇だったから散歩。適当にぶらぶら歩いてただけど、ふと窓の外を見たらあの2人を見つけてさ」

クイツと親指で真つ暗闇のグラウンドを指す。その先ではヒロトと緑川が練習をしていた。

「元エイリアの2人か……確か在籍していた頃はヒロトがトップクラス、緑川はその2ランク下の階級にいたんだったな」

ジェネシスのグラン、ジェミニストームのレーゼ。エイリア学園として振る舞っていた時は階級の差もあり、堅苦しい仲だったが、エイリア学園が無くなり自由の身となってからはお互い仲良くやっていけてた筈だ。特に緑川に至ってはまるで別人のように変わり、サッカーのプレイスタイルも変わった。いや、変わったというよりは本来の姿へと戻ったと言った方が正しいのかな。

「ヒロトくんから聞いたけど緑川くん、そのエイリア学園？ が無くなってから自分本来の姿を取り戻してたんだって」

この世界での私の存在はあくまで世界編から登場したもので、周り

の皆はエイリア学園どうこうを私が知らないものだと思っている。その方が自然だし、逆に私が関わってもいないのにその辺の事情を知っているとすればちよつと面倒くさいことになる。

だからここはあえて知らないフリをしたり、誰かから聞いたという素振りを見せる。

「でも、世界のレベルの高さと日本代表のプレッシャーで我を見失いかけてるって。あまり自分本来のプレーを出来てないみたいだって言ってた」

「確かに、ここ最近の緑川の練習量は少し過剰だったかもしれないな」  
「だから今回私が緑川くんと連携組んだのも、何か力になれないか考えた結果なんだよね」

緑川のオーバーワーク気味な練習は、自分への自信の無さから来るものだ。ならそれをただ止めさせるのは得策ではない。まずは自分に自信を持たせてあげて、本来のプレーを取り戻していかないと。そのために、私は緑川の力になれるよう2人で必殺技を習得しようと考えたのだ。決して後付けで考えたとかそういう訳じゃないよ。ホントだよ。

「そうだったのか……」

風丸がどこかバツが悪そうな顔で呟く。

「……少し2人の様子を見てくる」

鬼道がそんな風丸を見て、なぜか1人でグラウンドへと向かった。その途中、鬼道が一度チラリと私の方に振り向き、ニヤリと口角を上げたのが見えた。

なんだ？ 何か良からぬ事を企んでいるかのようなそんな表情をされたけど、一体ヤツは何を考えているんだ。

「……結城ってさ、緑川のことどう思ってるんだ？」

「えっ？ 急にどしたの？」

風丸がそんなことを言い出すので、私は思わず聞き返す。そりやまあ私にとって緑川は推しメンの1人でもあるし、もちろん大事なチームメイトでもある。

「緑川がそんな状態に陥ってるなんて、おれは気付けなかったし、力に

なれなかった。けど結城は違った」

「うん、私も気付けたのはたまたまだよ。でも、なんだか放っておけなかったんだよね、緑川くんのこと。どこかの誰かさんに似ているみたいで」

「誰かに、似てる……？」

「うん、自分一人で抱え込んだじゃって、周りが見えなくなっちゃって、本当の自分を見失いかける。まるで私の憧れの誰かさんみたい」

「それって……」

「うん、風丸くんみたいに、どこか放っておけなかったんだ」

それを聞いて風丸の頬がほんのりと赤くなる。たぶん私も同じ状態になってるだろう。その状態のまま、数秒間2人の間に沈黙が訪れる。

「あのっ！」

何か喋らなければと思い口を開くが、風丸も同じ事を考えていたように2人の声がちょうど重なる。

「あ、えっと、風丸くん先にどうぞ……」

「いや、結城が先でいいよ……」

しばし2人でおどおどしていたが、それが可笑しかったのかどちらからともなく吹き出し笑い合った。

「あー、なんか疲れちゃった。部屋戻ろっか、風丸くん」

「一郎太」

「えっ？」

「風丸じゃなくて、一郎太って呼んでくれないか？」

風丸がまた急にそんなことを言い出すので、私の顔がボツと赤く染まる。風丸の方はというと、もう吹っ切れたのか全く顔色が変わっていない。むしろけろりとした様子だ。

「え、えっと……一郎太……くん」

なんだ、急に風丸が積極的になってきたぞ。

私としてはめっちゃ嬉しいけど、正直恥ずい。まだ展開についていけないんだけど。

「それと……いるんだろ鬼道？」

「バレてたか……」

風丸の言葉で、少し離れた所の陰からグラウンドへ向かったはずの鬼道が姿を現わす。おいちよっと待て、ゴーグルマジふざけんな。

「風丸、いつから気付いてたんだ？」

「ついさっきな……にしても鬼道がまさか盗み聞きをするやつだとは思わなかったよ」

「俺だって中学生だ、他人の色恋沙汰にも多少なりとも興味はある」

「はあ……なんかしてやられた気分」

多少気持ちが落ち着き、私が一つため息を吐く。けど第三者の鬼道からすれば、私と風丸の度々のイチャつきを見て、心の中では早くくつつけやとも思っていたんだろうか。だから今回、あえて私と風丸の2人きりの空間を作り上げ、自分は身を隠した。

もしそれが本当に狙ってやったのであれば、色んな意味で多芸なゲームメーカーだな。

「だが風丸への気持ちは変わらんのだろうか？」

「ゴーグルカチ割られたいかこの野郎」



## 11話 ネオジャパン襲来!

「集合! 今日には2チームに分かれて練習試合を行う。いいな!」

「はー!!」

ある日の朝、久遠監督がチームのみんなを集め、今日の練習内容の指示を出していた。今日はミニゲーム形式で総合的な練習をやるみたいだ。

「それではチーム分けを行う……」

久遠監督の指示でそれぞれのメンバーが2つのチームにバラけようとしたその時だった。

円堂を目掛けて勢いよくサッカーボールが飛んでくる。明らかに誰かが狙ってシュートを打ったかのような軌道だ。

「な、なんだ!?!」

怯みつつも、正面からそのシュートをキャッチし、ボールの勢いを止める。さすが円堂、反応が早い。つかその前に誰だよ蹴ってきたやつは。

「流石は円堂……素晴らしい反応だ」

「お前は……デザーム?! 久し振りだなあ!」

そこに立っていたのは、元エイリア学園イプシロンのキャプテン、デザームだった。どうやらシュートを打ったのは彼のようなようだ。久しぶりに出会ったライバルに、円堂も思わず感嘆の声を上げる。

「デザーム……? 今の私は砂木沼 治だ。チーム『ネオジャパン』のキャプテンとしてのな」

ああ、そういえばいたね。

日本代表候補に選ばれなかった悔しさを元に、厳しい鍛錬を積んでイナズマジャパンに勝負を挑んでくるんだっけ。

「……ネオジャパン?」

円堂が聞き返すと、デザームの横へざらりとネオジャパンのメンバーと思われる選手たちが立ち並ぶ。ん? 何人か原作と違うキャ

ラ混じってるね。てか数人女の子いるね。

「帝国にエイリア学園、御影専農に世宇子に木戸川清修までいるっす！」

「まさにオールスターって感じだな」

「でも監督の姿が見当たらないけど……」

「久しぶりね、 円堂くん」

懐かしのメンバーにみんなが若干の感傷に浸っていると、ネオジャパンのメンバーの後ろから一人の女性が現れる。間違いない、この凛とした声色はあの人だ。脅威の侵略者編で円堂たちを率いた大胆不敵な監督といえは、

「えっ、 瞳子監督!!?」

「どうして……姉さんが……?」

ヒロトと緑川の元エイリア組は、自分たちのよく知る人物が急に出

てきて驚いているようだ。

「初めまして、久遠監督」

久遠監督と瞳子監督が向かい合うように立った。

「君のことは響木さんから聞いている。地上最強のイレブンを率いた監督だとか」

「ご存知なら話は早いですね。私はネオジャパンの監督として、正式にイナズマジヤパンに試合を申し込みます。そしてこちらが勝った暁には、日本代表の座を頂きます」

「「ええーっ!!」」

瞳子監督の宣戦布告を聞いて、イナズマジヤパンのメンバーたちは驚愕の声を上げる。

しかし瞳子監督はそれを気にすることもなく、構わず話を続ける。

「私たちの挑戦……受けて頂けますか？」

少しの沈黙が流れた後、久遠監督は割とあっさりとその問いに対して応えた。

「……いいでしょう」

久遠監督のその一言に、場の雰囲気が一変する。イナズマジヤパンは日本代表の座を奪われるかもしれないという不安と、それをかけた試合に対する緊張。ネオジャパンは日本代表になれなかったことへのある種の嫉妬と、もしこの試合で勝てれば日本代表になれるかもしれないという希望と高揚感。

世界を相手に戦える資格を持った者と、持たざる者が今、相見える。

「なんか大変なことになったね」

試合に備えてベンチで靴紐を結び直していた風丸に声をかける。

「ああ、まさか瞳子監督のチームと試合することになるなんてな。結城はあの監督のことは知ってるのか？」

「うん、久遠監督が言ってた通り、地上最強のイレブンを率いてた監督でしょ。結構奇抜なフォーメーションとか大胆な作戦を取る監督で割と有名だとか」

「おれもあの監督には世話になった……本当に」

風丸がなんともいえないような表情でそんなことを呟いた。大方

旅の途中で離脱した事への申し訳なさと、当時の特訓の日々のおかげで強くなれたことへの感謝が混ざり合って複雑な心情になっているのだろう。

「なら、あれから強くなった一郎太くんを見せつけてあげないとね」

ニツと笑って風丸に微笑みかける。風丸は一瞬だけ目を丸くしたけど、すぐに微笑み返してくれた。

「ああ、もちろんだ！」

「全員集合！ 今回のスターティングメンバーを発表する」

その時、久遠監督がみんなを集め、この試合のスタメンを発表される。

F W 吹雪、豪炎寺、緑川

M F 虎丸、鬼道、結城、基山

D F 土方、壁山、木暮

G K 円堂

うん、風丸がいないからやり直せ。

なんてことは言わず、久遠監督にも考えがあってあえてスタメンから風丸を外してベンチに入れているみたいだ。

全員がポジションにつき、両チーム試合の準備は万端だ。とその時、鬼道が異変に気付く。

「なっ、デザームがミッドフィールダー……?」

「あいつ、フォワードかキーパーだけじゃなかったのかよ！」

デザームだけじゃなく、他のメンバーも元のポジションから移行しており、知ってる人から見れば変則的なフォーメーションとなっていた。

F W ウィーズ、ゼル

M F ウルビダ、デザーム、マキユア、下鶴

D F 成神、ゾーハン、郷院、寺門

G K 源田

帝国学園でエースストライカーだった寺門はDFにいるし、御影専農でFWだった下鶴もMFにいる。てか全体的に元FWだった選手が多くて、やたら攻撃的なメンバー編成になってる感じだね。しかもMFのマキユアやウルビダなんかは原作にはいなかった女の子の選手だし。

思ったけどウルビダってヒロトと同じくらいには実力があるのに、なんで代表選考には呼ばれなかったんだろうか。まさか響木監督の趣味に合わなかったとか……？

「見せてもらおうか……貴方の作り上げた、新たな最強のチームを！ 鍛え上げられた選手たちのプレーを！」

久遠監督が含みのある言い方で瞳子監督に啖呵を切る。もしかすると今回の試合でネオジャパンから良い選手が見つければ、現イナズマジパンのメンバーと入れ替えるつもりなのかもしれない。FF Iには試合ごとに代表選手を入れ替えることができる選手起用の特別ルールがある。

そしてそのチャンスはなにも日本代表の選考試合に呼ばれた選手たちだけではない。呼ばれなかった選手でも幾分可能性はあるのだ。急遽審判を頼まれた古株さんのホイッスルにより、試合開始の合図が出される。まずはイナズマジパンの先攻で、センターサークルの中で豪炎寺が吹雪にボールを渡し、吹雪がドリブルで攻め上がっていく。

『イナズマジパンのキックオフで試合が開始しました！ まずは吹雪がドリブルで上がっていく！』

「行かせない！」

マキユアが早速吹雪をチャージしに行く。が、吹雪は加速してそのままデیفエンスのマキユアをあつさりとはき去っていく。

「いいぞ！ 吹雪！」

「……郷院！ 寺門！」

それを見て即座にデザームがDF陣に指示を送る。そしてすかさず郷院と寺門はダブルチームで吹雪を抑えた。

素早い状況判断と見事な連携だ。一瞬で吹雪の侵攻を阻んでしまった。

「くっ、虎丸くん！」

吹雪が2人のディフェンスの僅かな隙間から、針の糸を通すような鋭いパスで、横から走り込んできていた虎丸へとボールは渡った。

『これはナイスパス！ 吹雪、ボールを奪われることなく虎丸へと繋いだ！』

うん、今のはマジでナイスパスだ。

受け取った虎丸は勢いを止めることなくドリブルで上がっていく。

「成神！」

またもデザームの素早い指示で成神がスライディングで虎丸に仕掛けに行く。

僅かに虎丸の反応が遅れ、成神がボールをカットしたことにより一旦コートの外へとボールが出る。

「いぞ吹雪、虎丸！ その調子だ！」

「すみません吹雪さん、せっかく良いパスをもらったのに」

「ううん、全然大丈夫だよ。次に繋げていこう」

今の吹雪から虎丸への連携は特に悪い所はなかった。むしろスムーズに繋げた良い連携だった。しかし、思った以上にネオジャパンの対応が早い。その主軸はデザームが握っているみたいだ。彼の素早い状況判断からの的確な指示は、たぶん天才ゲームメーカーの鬼道にも負けず劣らないものだろう。

木暮のスローインから試合は再開し、最初に鬼道へとボールが渡り、続けて鬼道が前線へと上がっていたヒロトへとロングパスを送る。

「八神！ 石平！」

八神 玲名ことウルビダ、石平 半蔵ことゾーハンの元ジェネシスコンビがヒロトをマークする。

「なんでキミたちがネオジャパンに……！」

「別に、姉さんに誘われただけ……でも、心のどこかでは私も世界を相手に大舞台でサッカーをしたかったのかもしれない。だからこの試

合、容赦なくいかせてもらう！」

「なっ……!?!」

ウルビダが素早い動きでヒロトからボールを奪っていく。

その後もイナズマジヤパンは何度か攻め上がっていくが、あと一歩のところまで阻まれてしまい、中々シュートチャンスに恵まれずいた。

しかし、チャンスは突然現れた。

ディフェンスに囲まれていた虎丸が、絶好の位置にいた吹雪へとパスを出し、吹雪にシュートチャンスが生まれる。

「行けっ! 吹雪!」

「ウルフレジエンドオオッ!!」

吹雪の力のこもった必殺シュートに、誰もが決まったと思っていたその時だった。

「ドリルスマッシャー……V2!!」

キーパー源田が右手に巨大なドリルを発現させ、ドリルを高速回転させながら向かってくるシュートにぶつける。ギヤリギヤリと凄まじい衝突の末、少し拮抗した様子を見せたものの、シュートの威力を完全に殺してしまい、上空に弾き返してキャッチしてしまった。

「い、今のって……」

「ドリルスマッシャーだと……!?!」

吹雪のウルフレジエンドを止めたことにも驚きだが、それ以上に帝国学園の源田がエイリア学園の必殺技を使ったことにみんなは驚いていた。特に緑川とヒロトの元エイリア組と、源田を知る元帝国の鬼道は目を丸くしていた。

「デザームの必殺技だよな、今の?」

「源田のやつ……いつの間に」

「驚くのはまだ早い、源田!」

「おう!」

デザームがパスを要求し、源田がデザームへとボールを送る。デザームはドリブルでそのまま攻め上がってくる。

「結城!」

「うん、止めるよー！」

鬼道と私のダブルチームでデザームにプレスをかけに行く。が、デザームはここでもイナズマジヤパンのメンバーたちの度肝を抜く行動に出る。

「イリユージョンボール改！」

ボールがいくつかに分裂し、まるで私たちを惑わせるかのようにデザームの周りを舞い、気が付けばデザームは私たちを抜き去って突破されていた。

「なにっ!？」

「今のは、帝国学園の必殺技……」

続けてDFの土方が立ちはだかり、デザームの猛攻を止めようとする。

「スーパーしこふーー」

「ダッシュストームV2!!」

土方のディフェンス技の発動前に、素早くデザームが必殺技を繰り出し、なんなく突破していく。おいおい、そこは最後まで言わせてやれよ。土方可哀想過ぎだよ。

その時ふと、何気なしにベンチの様子が目に入った。そして同時に違和感を覚える。ベンチにいるはずの風丸が姿を消していた。トイレにでも行ってるのかな？

「世宇子中の必殺技まで……」

「まさかあいつら、他の選手の必殺技をマスターしているのか?」

鬼道の言葉に、みんなが驚愕する。

それぞれの学校において、その流儀やプレイスタイルに合った必殺技があり、世宇子中なら神や天災に関連したもの、エイリア学園なら宇宙に関連した必殺技が存在する。そしてそれは在學生にも当てはまるが、一朝一夕で身につくものではない。他校の生徒なら尚更だ。もちろんご都合主義を抜きにしての話だけだね。

「行けー アラターー」

デザームが一人でボールを持ち運び、下鶴へとパスを出す。あつという間にゴール前まで持っていかれ、下鶴がシュート体制に入る。



「グングニルV2!!」

異空間から放たれる強烈なシュートは、上空から降りかかってくるように円堂の待ち構えるゴールへと向かっていく。

「くっ、正義の鉄拳G3! はあああッ!!」

ダンツ、と地面を踏みしめ、円堂が捻りを加えた拳を突き出す。すると巨大な拳の形をしたオーラのようなものが出現し、回転しながら向かってくるシュートと激突する。

「っ……! うおおお!!」

懸命にシュートを跳ね返そうと拳を突き出すが、やがてシュートの威力に負けて正義の鉄拳を破られてしまい、虚しくもゴールへと突き刺さってしまう。

『な、なんと!? 正義の鉄拳を破って、ネオジャパン先制点です!! イナズマジヤパン、相手の必殺技に手も足も出ません!』

「なんなんだ、今のパワーは……」

ゴールに座り込んであまりの威力に呆然とする円堂を見下ろすかのように、デザームが正面に立ちはだかつて口を開く。

「円堂 守……私はお前からサッカーとは熱く、楽しいものだと学んだ。だが、同時に勝負とは辛く険しく、そして厳しいものなのだ!」

## 12話 一筋の光

イナズマジヤパンのキックオフで試合はリスタート。状況は1-0で未だシュートチャンスは一回きり。思った以上にネオジヤパンのDF陣が固い。つーか必殺技使いすぎだろ、って嫌味が言いたくなるくらいに連発してくる。

必殺技を持ってない私からすれば、真っ向からの必殺技同士のパワー勝負が出来ないわけだから、完全に不利だ。いくら神様から底上げしてもらった地力でも限界がある。

一体どうすればいい……？

「鬼道！」

豪炎寺が鬼道へとボールを回す。

「結城！」

続けて鬼道がダイレクトパスで素早く私にパスを送る。私はそれをトラップしてドリブルで上がっていく。

「キラーズライド改!!」

成神が早速必殺技でボールを奪いにくる。このくらいならまだいける。私はヒールリフトでボールを浮かせ、飛び上がって成神のキラーズライドを躲す。しかしすぐさまゾーハンがディフェンスのフォローに入ってくる。

「アースクエイク！」

「くっ……！」

ゾーハンに阻まれ、ものの見事にボールを奪われてしまう。さっきからこの繰り返しだ。こちらの攻めがごとごとく止められてしまう。何かいい突破口はないものか。

「皇！」

みるみる内に、ゴール前までボールを運ばれてしまい、ボールが渡ったマキユアがシュートを放つ。

「グングニルV2!!」

「これ以上点はやらせないぜ！ 正義の鉄拳G4!!」

円堂が進化させた必殺技で向かい打ち、見事にマキユアのシュートを防いだ。はいそこ、ご都合主義とか言わない。主人公だからとか、そんな曖昧な理由で進化したんじゃないよ。円堂の強い気持ち、サッカーを愛する気持ちがさらなる飛躍を生んだんだよ。

「っ……い・マキユア邪魔されるのってきらい！」

「ははっ、良いシュートだったぞ！」

知らなかったけど元イプシロンのマキユアって自分のことマキユアって名前で言っちゃう娘なんだね。でもなんだろう、ぶりっ子とかそういう気は全然しないし、そのーなんだ……ぶっっちゃけ可愛い。妹に欲しいわ。

さて、円堂が弾いたボールは土方に渡り、続けてマークの空いていた虎丸へとパスを繋げる。そのまま軽快なドリブルで虎丸が前線へと切り込んでいく。

「郷院、石平！」

「おう!!」

郷院とゾーハンが2人で虎丸を挟み込むようにスライディングタックルで迫り来る。

「ハーヴェスト!!」

「くっ、うわあッ!!」

巨体な2人からのスライディングをモロにくらって、ボールを奪われるのみならず吹っ飛んでしまう虎丸。

はたから見れば小学生を虐める怖いお兄さんにしか見えないよあんたら2人組。

「砂木沼！」

奪ったボールをデザームへとパスを送り、カウンターを仕掛けにくる。

「今度こそ……やってやるっ！」

緑川が固い面持ちでデザームにプレスをかけに行く。また色々余計なことを考えながらプレーしてるみたいだけど、そんな焦りと雑念が混じったまんまじゃ隙だらけだ。

「今のお前など、相手にならんわ!!」

ドリブルの速度を上げ、強引に突破して緑川を抜き去っていく。

「じゃあ私なら、少しは相手になるのかな?」

そんな軽口を叩きながら、私が続けざまにデザームをマークする。すると少しは警戒してくれたのか、一度止まって私を見据えた後、フエイントをかけて抜き去ろうとしてくる。

「バレバレだよ、それ。まだ緑川くんの方がマシだね」

「……そっちこそ、女でありながら唯一日本代表に選ばれたとはいえ、実力は所詮この程度か」

私の挑発に乗ったのか、テクニクよりフィジカルに切り替えてタツクルで競ってくる。が、もちろん背もガタイも負けている私なんかが競り勝てる訳もない。

いとも簡単に体制を崩されて倒れそうになる。けど、あっさり当たり負けしてやるのもなんか癪だな。

「女だからって関係ない、私には私のサッカーがある! この程度で……負けてたまるもんかツ!!」

グツと足を踏ん張って倒れそうになる身体を堪える。そして今度私からデザームにチャージをかけに行く。

「むっ、意外とやるな」

「そりやどうも……っ!」

とは言うものの、やっぱりダメだ。

デザームの重たいシオルダーチャージをくらってよろけてしまい、突破されてしまう。

「……つたく、今度こそは気張りなよ、緑川くん?」

「なに……?」

「うおおおおおッ!!」

抜き去り際、私の意味深な言葉を呟いたのが気になったのか、デザームが顔をしかめるがもう遅い。

先ほどデザームにあっさり突破された緑川が走りこんで来ており、鋭いスライディングでデザームの足元からボールをカットし奪っていく。

「なんだと……!?!」

「蛇の生殺しは人を噛むってね。結城の言葉で気づいたのさ、おれにはおれのサッカーがあるんだって!」

そういつて軽やかにドリブルで攻め上がっていく。

その途中で成神と郷院が2人で緑川をマークするが、緑川は構わずにドリブルのスピードを上げる。

「行ける……抜いてみせる!」

緑川が光を纏いだし、一瞬にして加速し消えたと思ったら目にも止まらぬ速さで成神と郷院を躰し、一筋の光を残して駆け抜けていく。それはまるで電光石火のようだ。

「ライトニングアクセルと命名しましょう!」

ベンチでメガネが吠える。

そしてついにネオジャパンのDF陣を突破し、この試合2回目のシュートチャンスが生まれる。

「結城!」

「うん、いくよ!」

私と緑川で左右から同時にボールを上空へ蹴り上げる。するとボールの周りに歪みが生じ、小宇宙が出現する。そこへ私と緑川は飛び込み、ボールをフロントキックで蹴り出す。

「ユニバースブラストV2!!」

私と緑川が特訓して修得した、連携必殺技だ。エイリア学園セカンドランクの必殺技だからといって侮ってはいけない、その威力は中々のものだ。

「ドリルスマッシュV2!」

源田が必殺技で対抗し、少し拮抗した様子を見せる。が、次第にドリルスマッシュの高速回転の勢いが弱まり、更にはドリルにヒビが入り始める。

「いっけええええッ!!」

「ぐおおおッ!?!」

そしてついに拮抗は破られ、私たちのシュートは源田の必殺技を打ち破り、見事にゴールネットへと突き刺さった。

『決まったああッ!! 結城と緑川の連携必殺技で同点ゴォール!! これ得点は1―1の振り出しに戻りました!』

そしてそれと同時に長めのホイッスルが鳴り、前半戦終了の合図となる。

「すごいぞ結城、緑川!」

「やるなーお前ら! こりやおれたちも負けてらんねーぜ!」

とその時、ベンチから姿を消していた風丸が突然姿を現す。どこに行ってたの? と聞く前に、ある異変に気付く。

「わっ、一郎太くん……その汗どうしたの!?!」

「風丸先輩大丈夫ですか!?!」

尋常じゃないほどの汗をかいていたのだ。

それはもう、なにをしてたら短時間でそんなに汗をかけるのか不思議なくらいに。

「ハア、ハア……ちよつとな……」

「とりあえず水分とって……はいこれ」

「ああ、ありがとう」

スポーツドリンクの入ったボトルを風丸に差し出す。それを一口飲んでからゆっくりと息を吐き、久遠監督の方に顔を向ける。

「監督、なんとか完成させました。いつでも行けます」

「……分かった、後半からは虎丸と交代で入れ」

風丸と久遠監督の間で意味ありげな会話が繰り広げられる。私は大方どういう内容の話か予想がつくけど、周りのみんなは何のことだかついていけてない様子だ。

## 13話 初めての挫折

後半からイナズマジャパンは虎丸に代わって風丸。ネオジャパンはゾーハンに代わって牧谷、寺門に代わってヘラを投入してきた。

「まだまだこれからだ、上がれ瀬方！」

ネオジャパンのキックオフで後半戦が開始。のっけからゼルが積極的にドリブルでボールを運んでいく。

しかしそこはヒロトの素早い対応でプレスをかけにいく。そしてあっさりとボールを搔つ攫っていった。うん、いいね。あれから流れはこっち側に来てるよ。このまま攻め上がって行こう。

「ヒロトー！」

後半頭から入ったばかりの風丸が早速ノーマークの状態でパスを要求する。それを見たヒロトも瞬時に判断し、逆サイドの風丸へと振る大きなロングパス。

「簡単には通さないぜ」

「いや、押し倒させてもらう……風神の舞ツ!!」

ディフェンスの下鶴を中心に竜巻を起こして閉じ込め、その竜巻の中を飛び回り相手を翻弄するかのように舞う。超スピードで飛び回る風丸の動きを、完全に目で追えなくなった下鶴はボールをも見失い、その隙に風丸は竜巻の中を抜け出して下鶴を抜き去っていく。

『出たあぁッ!! 風丸の新必殺技で、前半あれほど苦戦していたネオジャパンのディフェンスをいとも簡単に突破していく!!』

「なんだあの技!?!」

「すげーぞ風丸！」

「このタイミングで間に合わせて来たか……!」

鬼道が絶好のチャンスとでも言わんばかりに口角を上げる。緑川、風丸の新しいドリブル技でネオジャパンの固いディフェンスを打ち破る突破口は見えた。円堂も究極必殺技をG4へとさらに進化させてゴール前を死守、源田のドリルスマッシャーも私と緑川の連携技で

攻略済み。完全に流れはイナズマジヤパンにきている。

「決める豪炎寺!!」

「おうー!」

風丸が豪炎寺へとスルーパス。絶妙なコースへのそのパスを豪炎寺が受け取り、絶好のシュートチャンスが生まれる。

「行くぞー! 爆熱ストームツ!!」

豪炎寺が一度ボールを上空に蹴り上げて、自身も爆炎を纏いながら高く飛び上がる。そして炎のパワーを籠めた左足でボールを叩きつけるように思いつき蹴りおろす。

「よし、2点目だ!」

ベンチで誰かがそう言った。

その場の誰もがそう思った。

しかしネオジャパンのメンバーは焦る様子もなく、一切顔色を変えずにキーパーの源田を背にし、DFの牧谷と郷院を残して何故か全員前線へと上がっていく。

「まさか……!?!」

私は嫌な予感がして、前線まで上がっていた所を引き返してDFラインまで下がりに戻る。

その間にも豪炎寺のシュートは源田の守るゴールへと迫っていた。

「牧谷! 郷院!」

「おう!!」

源田の前に2人が対になるように仁王立ちで立ちほだかる。

「真・無限の壁!!」

するとゴール前を埋め尽くすほどの、岩で形成された馬鹿でかい壁が出現し、ガツチリと豪炎寺のシュートを止めてしまった。

「なっ、なんだと!?!」

「あれは、千羽山中の……!」

「フットボールフロンティアで連続無失点記録を更新し続けた、あの最強のキーパー技を更にパワーアップさせたというのか……!?!」

かつて雷門がフットボールフロンティアにて、千羽山と戦ってその威力を味わったことのあるメンバーは、その事実を目の当たりにして



驚愕していた。あの一度は苦戦を強いられた技がパワーアップして帰って来たという現実。それはイナズマジヤパンに吹いていた風を止ませるには十分に衝撃的なものだった。

しかし、ネオジヤパンの勢いはここで止まらない。破竹の勢いで前線に攻め上がっていたイナズマジヤパンは、いま現在守りが薄い状態にある。そして、ネオジヤパンは源田たち3人を残して全員中盤より先まで上がっている。

「まずいッ!? みんな下がれ!!」

瞬時に危険を察知した鬼道は、慌ててみんなに指示を送るがすでに遅かった。源田の豪快なゴールキックでボールは中盤にいたマキユアへと渡る。

完全に不利な状態でのカウンターを決められ、DFに残っていた限りなく少ないイナズマジヤパンのメンバーでネオジヤパン9人の猛攻を防ぎにかかる。

「通すもんか!・せんぷうー!ー」

「遅いよ、メテオシャワー!!」

木暮の必殺技よりも早く、マキユアの空から襲いかかるボールの流星群が炸裂し、容易く蹴散らしていく。

「玲名!」

そしてマキユアからウルビダにパス。こんな絶体絶命のピンチの状況で言うのもなんだけど、このホットラインってマジで神ってない?」

可愛さで言えば最強のコンビだと思う。いや、実力的にもなかなか上位に食い込むかもしれないね。

なんて邪念は一瞬で消し飛ばし、DFラインまで下がって来ていた私はウルビダのマークにつく。

ここを抜かれたらもう円堂との一対一になってしまい、完全にゴールが危なくなってしまう。円堂の必殺技も進化したとはいえ、絶対にシュートを止めれるという保証なんてどこにもない。

「蟻一匹たりとも通さないかんね」

「フツ、面白い。やってみろ!」

そう言った途端、ウルビダは急激にドリブルの速度を上げる。しかしそれは今まで見て来た選手の比ではない。

「スプリントワープ！」

ウルビダが高速で細かくジグザグに動いて……というよりはもはやワープしていると錯覚すら感じるほど速い動きで迫り来る。

てか速すぎてついていけなッー

「遅いな……この程度か」

抜き去られる瞬間、そう聞こえた気がした。思わず足がもつれ、その場で尻餅をつくように転倒してしまう。

人を貶すような、そんなムカつくような声色ではない。ただただ

がっかりしたような、失望したとでもいうかのような、ひどく冷たい声に聞こえた気がした。

そんな私をあっさりとは抜き去って、ウルビダがゴール前まで迫る。

「行くぞ、円堂 守」

「来い！」

「はあああッ！ 皇帝ペンギン<sup>セブン</sup>7!!」

指笛を吹き、突如出現した七色のペンギンがボールを囲む。そして七色のオーラを纏ったボールをウルビダが蹴りつける。そのシュートは一直線にゴールへと進んでいき、綺麗な七色の軌跡を描いていく。

「ゴールは割らせないッ！ 正義の鉄拳G5!!」

円堂が気合いと根性で更に必殺技を進化させ、眩しく虹色に光る巨大な拳はウルビダのシュートを受け止め、見事にボールをコートの外へと弾き返してクリアする。

「よし……！ やった!!」

「凄いです円堂さん!!」

円堂が必殺技を更に進化させたことで、ベンチのメンバーたちも活気付く。このままの調子で反撃開始だ、と勢いづこうとしたイナズマジャパンだったが、風丸がふと異変に気付く。

「どうしたんだ結城、座り込んだままで……どこか怪我でもしたのか？」

ウルビダにあっさりとは抜かれてから、いまの風丸に声を掛けられるまでの間、私は尻餅をついて転倒したまま虚空を見つめて固まっていた……らしい。

「えっ？ あっ、ううん大丈夫……平気ヘーキ」

ゆっくりと自分の力で立ち上がる。なるべく心配かけないように、無理にでも表情を創って笑顔を見せた。

なんだろこの感じ……ウルビダに力の差を見せつけられたからかな。なんだか自分の存在というか、実力を否定されたかのような気がしてならない。

もちろんウルビダもそんな深い意味合いがあってあんなことを

言った訳じゃないんだろうけど。でもさっきの言葉はなぜか私の心の中に深く刺さった。

同じ女性プレイヤーから言われたからただ単に印象が強かったのか、それとも多少突き放されるような言い方をされたから傷ついているだけなのか。

どちらにせよ、私の実力不足が原因であったことに変わりはない。今までアジア予選を戦ってきて、ドリブルで抜かれたりボールを奪われることは何度かあった。今回もその内の一つのプレーに過ぎないはず。なのに、すぐに気持ちを切り替えていくことが出来ない。

## 14話 アンクルブレイク

突然だけど、私はつい最近イナイレ世界に來た転生者だ。かといって前世でサッカーをやっていたかというところ、そういう訳でもない。まあ知識くらいならあるにはあるけど。ただイナズマイレブンが好きだからという理由で勢いで來たようなものだ。

けど成り行きでも、こうして円堂達と共に戦っていくことになったからには手は抜きたくないし、どうせなら一緒に頂点を目指したい。幸いにも私には神様から底上げしてもらった力がある。サッカーの知識も人並みにはある。足を引っ張らない程度にはみんなについて行けたらいい。欲を言えば華麗なプレーをして目立ちたい。そう思っていた時期が私にもありました。

「行け砂木沼！」

円堂が先ほど弾いたボールは、ネオジャパンのスロイーンによりコートに再び戻り、試合がリスタートする。

下鶴のスロイーンからデザームにボールが渡り、デザームが自身でドリブルでゴール前まで運ぶ。

「行かせないってのー！」

その間に割って入るように私がルートを塞ぎ、デザームの前に立ちはだかる。さっきのリベンジといこうじゃないの。

「フン、八神にあっさり抜かれて自信を無くしたか。さっきよりも隙が多いぞ」

「なっ……!?!」

デザームにフェイントでいとも簡単に突破されてしまう。

さっきから思うようにプレーが出来てない気がする。前半までは良かったものの、後半からはネオジャパンに押されつつある。たぶんきっかけは、緑川のフォローに入った時のデザームとの競り合いだ。あそこを境に、自分でも分かるくらい私の動きが悪くなっている。

一体なにが原因なんだろう……?!

「止めてみせろ！ 円堂守ッ！」

デザームがシュート体制に入り、まるで天使のような綺麗な純白の羽を生やしてボールとともに飛び上がる。そして上空で羽が一瞬大きく膨張すると同時に、ボールがプラズマのようなものを纏う。

「ゴッドノウズ改!!」

それを力強く蹴り付け、デザームが神の力を宿らせた全身全霊のシュートを放つ。そのパワーは、本家であるアフロデイにも劣らないだろう。私は本家を実際に間近で見たことはないけど。

「点はやらせない！ 正義の鉄拳G5!!」

円堂がデザームのシュートと正面からぶつかり合う。が、円堂の熱い思いが通じたのか、正義の鉄拳はデザームのゴッドノウズを跳ね返す。

「よおしッ！ 反撃だー!!」

円堂ののろしと共に、跳ね返ったボールは風丸に渡る。

途端にスピードの乗ったドリブルで駆け抜けていき、風丸が中盤まで持ち運んで行く。

「平良！」

デザームの指示で、DFのヘラが風丸にプレスをかけに行く。が、構わず風丸はギアを更に上げ、ドリブルのスピードを増して行く。

「風神の舞ッ!!」

必殺技でヘラを突破し、続けてヒロトにパスを出す。

「打てー！ ヒロトー！」

「うん、いくよ！ 流星ブレード!!」

ヒロトの必殺技が炸裂し、その名の通り流星のような豪快なシュートがゴールへと突き進んでいく。

しかしゴール前を守るのは、帝国のキングオブゴールキーパーと言われた源田だ。その両隣には牧谷と郷院が仁王立ちで立ちはだかる。

「真・無限の壁!!」

またも鉄壁の守りを誇る進化した無限の壁で、ヒロトのシュートをがっちり止めてしまった。

「くっ、ガードが固いね」

「あの壁を破るには、相当パワーがある必殺技でないと打ち破れないだろう」

シユートを止められて思わず顔をしかめるヒロトと、その隣で鬼道が考え込むように腕を組んで口を開く。

そして時を同じくして、ネオジャパンのベンチで試合の状況を観察していた瞳子監督もまた、イナズマジヤパンのベンチにいる久遠監督を見てある一つの疑問を浮かばせていた。

なぜフォーメーションを変えようとしなのかな？

瞳子監督の考えは、今の現状でイナズマジヤパンが無限の壁を破るには、円堂をリベロにいて攻撃型にシフトさせるしか方法はない。にも関わらず、久遠監督は一切フォーメーションを変える気配がない。それどころか選手たちにほとんど指示を出したりしていない。「まるで何かを待っているような……そんな気がするわね」

誰にも聞こえないくらい小さな声で、瞳子監督は呟く。そしてその予感、見事に的中することとなる。



後半戦も残り少ない時間となり、もうすぐロスタイムに入る手前までできていた。

両チーム1-1の同点のまま試合展開は膠着しており、決定的な瞬間は何度かあったものの、今ひとつゴールネットを揺らすまでには至っていない。

『さあ残り少ない試合時間の中、どちらのチームが先にゴールを決めるのでしょうか!? おおっとここで結城がドリブルで中盤まで持ち込んで行く!』

私がドリブルでボールを運んでいると、すぐさま横からウィーズに

スライディングでボールをカットされ、ボールが一旦コートの外に出る。

『あぁっとしかし！ 伊豆野のスライディングに止められてしまった！ しかしボールはまだイナズマジャパンの手にあります。このチャンスをもに出来るか!?!』

試合が一旦止まり、コートの外へと転がっていったボールを私が取りに行っていた時、ふと後ろから声をかけられる。

「結城、お前なら今のスライディングくらい避けられていただろう」

「さつきから、らしくないプレーが続いてるぞ。一度落ち着いて深呼吸でもしたらどうだ？」

鬼道と風丸だった。

私を心配してきたのか、それとも情けないプレーをしていたから喝を入れに来たのかは分からない。けど……

「……らしくない？ じゃあ聞くけど、逆に私らしいプレーってなに？」

なぜか、そんな気は全くないのに自分でも驚くくらい、棘のある言い方でつい返事をしてしまっていた。

「この短期間で俺が感じたのは、お前はスピード、フィジカルよりもテクニクで相手を翻弄する技術型のプレーをするタイプだということだ。俺の目にはお前のテクニクは世界を相手に通じていたように見えていたが」

鬼道が私のことをそんな風に分析していたことに驚きつつも、私は卑屈気味に言い返す。

「でも、ネオジャパンを相手にこのざまだよ。今まで私のテクニクが通じてたのはたまたまだったんだ」

「いや、今日の試合でお前は自分の力を活かさきれていない。気づいていないのか？」

「えっ……?」

「自分よりも遥かに体格の劣るデザームにフィジカルで張り合い、速さで負けているウルビダのスピードについていこうとする。自分の不得意な分野で挑めば、望まない結果になるのは当たり前のことだ」



自分では気付かなかったことだ。

いつも通りプレーをしていたつもりが、私の弱点であるスピードとフィジカルで相手と張り合っていたなんて。

「さっき自分で言ってたよな、自分には自分のサッカーがあるって」  
今度は風丸が諭すように言う。

そうだ、私には私のサッカーがある。出来ないことは出来ない、自分のやれる事をやる。

11人それぞれが得意な分野を活かし、苦手な分野はみんなで補い合う。それがチームプレーというものであり、チームのみんなで戦うという意味だ。

「結城だからこそ出来ることもある。逆に言えば結城に出来ないこともある。誰しも完璧じゃない。だから、その出来ない部分はおれたちでカバーするさ」

「一郎太くん……うん、ありがとう。おかげでもやもやしてた気持ちが吹っ飛んだよ。鬼道もありがとね」

「フツ、イナズマジヤパンの主力の一人がいつまでも情けないプレーをしているのは、チームの士気に関わるのでな」

「後半の時間も残り少ない。たぶんこれがラストプレーになる。やれるか結城？」

「オツケー任せてよ。今の私ならなんでも出来る気がするわ」

鬼道と風丸のおかげで、すっかり気持ちの切り替えが出来た。心なしか先程よりも身体が軽い。

『風丸のスローインから試合再開です！　そしてここで、ボールは再び結城へと渡りました！』

風丸から受け取ったボールをトラップし、ゴールを見据える。狙うはあの先のゴールネットだ。

「行かせん!!」

デザームが正面からディフェンスにくる。

さっきデザームが言ってた言葉をそっくりそのまま返すようだけど、今の私の相手ではない。

怯むことなく私はドリブルのスピードの乗ったまま、速度を落とす

事なく鮮やかなルーレットでデザームを躲す。うん、今までプレーしてきた中で一番綺麗に決まったと思う。

「くっ、動きのキレがさつきよりも上がっている……八神、止めろ！」  
「言われなくても……！」

ウルビダが即座にフォローに入り、私の前に立ち塞がる。けどここで止まる訳には行かない。でもスピードではウルビダの方が上だ。ただ抜き去るだけではすぐ追いつかれるかもしれない。

ならば……と私は右、左へと細かくボールを振り、フェイントをかける。が、ウルビダはそれに釣られることなくついてくる。

「その程度のフェイントで私を躲すのは無理だ」

「だったらこれはどうかな……？」

ダツ、と一気に加速して右から切り込んでウルビダを抜こうとする。が、これにもウルビダはついてくる。ここまではいい。

私は急にドリブルをピタツ、と止めて切り込んでいくと見せかけたフェイントをかける。すると、一瞬だが釣られてついてきていたウルビダの体勢が崩れる。

「まだまだ！」

ウルビダの体勢が崩れたのを見て、私はボールを左へと鋭く切り返し、緩急をつけて瞬時に加速して左からウルビダを抜き去って行く。

「なっ……!?!」

ウルビダがなんとか反応し、私の動きについて行こうとするが、うまく体勢を立て直すことができずに足をもつれさせて転倒してしまふ。

スピードで負けるなら、テクニクで圧倒させてやればいい。追いつかれるなら追いつかれないように体勢を崩してやればいいだけのことだ。

「まさか……フォーメーションを変えなかったのは、この為だったの？ 結城さんが本来のプレーを取り戻し、再びイナズマジパンに流れを持ってくることを予想して……！」

ベンチで瞳子監督が驚いた様子で久遠監督の方に顔を向ける。

「打て！ 結城!!」

「このチャンス、無駄にはしない……絶対に決めるッ！」

ゴール前までボールを持つていき、私はシュート体制に入る。即席で作ったものだけど、破壊力はあるはずだ。

踵で軽くボールを浮かせ、横から引っ掻くように蹴る。するとボールに強烈な回転がかかり、次第にギルギルと風を巻き込みパワーが増幅していく。やがてボールの回転速度が限界に達し、空気の摩擦でバチバチと静電気のような火花が散り出し、私はそれを回し蹴りで思いつき蹴りつける。ボールはドリルのような鋭い回転を維持したまま、吹き荒れる風を纏って一直線にゴールに突き進んでいった。

「真・無限の壁えッ!!」

源田、郷院、牧谷の3人が無限の壁で対抗するが、限界まで貫通力を高めた私のシュートはその分厚い壁を突き破り、見事にその先のゴールネットを揺らした。

『ゴオオールッ!! なんと結城の新必殺技で、真・無限の壁を打ち破りました!! これで点差は2ー1!!』

そしてそれと同時に試合終了の合図を知らせる、長めのホイッスルがコートに鳴り響く。

『そして試合終了のホイッスル!! イナズマジャパン、ネオジャパンを下し日本代表の座を守りきりましたッ!!』

「やったな、結城」

「すげえシュートだったぞ!!」

「限界を超えた強烈な回転に突風を纏うシュート。ずばりリミットブラスターと名付けましょう！」

メガネが私の必殺技に勝手に名前を付ける。何その厨二っぽい名前。

でもまあいいか。カッコいいっちゃカッコいいし、なにより語呂が気に入ったわ。

「いつの間にあんな必殺技を覚えてたんだ？」

ふと豪炎寺から尋ねられる。

ぶっちゃけいうと即席だけど、参考にしたものはある。オーストラリア戦での綱海と豪炎寺が見せた、回転を加えた新たな必殺シュー

ト。貫通力を上げるといふあのアイディアを取り入れたのだ。けど、私の脚力では2人のようにシュートを放つ瞬間にボールに回転を加えて蹴りつけることはできない。

だから一度、ボールに回転をかけるための予備動作を設けた。それが最初にボールを引つ掻くように蹴る動作だ。ここは吹雪のウルフレジェンドを参考にした。

豪炎寺にその事を簡潔に伝えると、少しだけ驚いたように目を見開いた。

「へえ、即席であの完成度か」

「ていっても予備動作がいるし、その分シュートを打つまで若干時間がかかるけどね」

「今後の課題って訳だな」

豪炎寺と話していたその時、後ろからウルビダ、デザームが近づいてきて声をかけてくる。

「今回の我々の敗因は、イナズマジパンの力を見誤っていたことだな」

「最後のシュート、見事だったぞ」

そう言いつつ、ウルビダが右手を差し出してくる。

「そつちこそ、速すぎて全然スピードについて行けなかったよ」

私もそれに応えるように右手を差し出し、お互いに健闘を讃え合い握手を交わす。

「今回は負けたが、今後情けないプレーを見せるようであれば、我々はいずれまた日本代表の座を奪いに来るぞ」

「もちろん、望むところだよ」

### 閑話その3

「ねえねえ一郎太くん、これなんかどう？」

「へえ、いいんじゃないか？ 結構似合ってるよ」

「もうさつきからそればかりじゃん」

「しようがないだろ、実際どれも似合ってるんだし」

「あ、なんか今の言い方チャライ。女の子にはみんなにそう言ってるうだねー……」

「なっ、そんな訳ないって！」

「ホントに〜？」

さて、突然だけど私こと結城悠香は、現在風丸一郎太と一緒にサッカーのスパイクを買いに来ています。年頃の少年少女がふたりきりで出かけている、つまりはデートというやつです。会話だけ聞けば普通にシヨッピングを楽しんでるカップルに見えるかもだけど、悲しいかな……共に日本代表に選ばれたサッカー選手というだけあって、その内容はただ一緒にスパイクを買いに来ているだけなんだ。

まあ私の中ではこの後どこか行く？ って流れになることを期待して待ってる訳だけど。

ちなみに、なぜ風丸とふたりきりでスパイクを買いに来ているかというと、時は数時間ほど前に遡る。

――

――

――

――

「よし！ 行け、結城！」

「よおーしッ！」

ネオジャパンの急な襲来を少々危うげに返り討ちにした次の日、い

つも通りイナズマジヤパンのメンバーは練習に励んでいた。

私もいつも通り練習をこなし、その日を何事もなく終えるだろうと思っていた。

がしかし、その時事件は起きた。

ブチツ

足元で急に、何か切れたようなそんな音が聞こえた。そしてそれと同時に、靴紐で固く結んでいたはずのスパイクが、急に緩くなった気がした。

「ん……う？」

少し嫌な予感をよぎらせつつ、足元を見るともの見事に私の右足のスパイクの靴紐……というよりは靴紐を通す穴が切れており、使い物にならなくなってしまうていた。

「げっ……マジか」

「どうした結城？」

ちようど近くにいた風丸と鬼道が、私の様子に気付いたのか駆け寄ってくる。

「いや、ちよつとスパイクが切れちゃって」

「あー……これは修理してもらうか、最悪新しいの買わないとダメだな」

「今日はこの後自主練の予定だったから丁度いいだろう、稲妻町で新しいスパイクでも見に行ったらどうだ？」

「うん、そうするよ」

鬼道にそう言われ、早速この後稲妻町のスポーツショップに行くことを決めた私だが、自主練の時間までまだ少しだけ時間があるため、とりあえずみんなの練習の邪魔にならないようグラウンドから出てベンチに座る。

「あら？ 結城ちゃんどうしたの？」

「もしかしてどこか怪我でもしましたか？」

ベンチでタオルやスポーツドリンクの準備をしていた木野と、その隣で手伝いをしていた音無が私一人だけベンチに下がって来たのを見て、不思議そうに尋ねてくる。

「ううん、ちよつとスパイクが切れちゃってね。今日はもう出来そうにないから下がつとこうかなって」

「あつ、ホントだ」

「この後自主練しかないし、ちよつどいいから新しいスパイクでも見に行こうと思うんだ」

「へえ、誰と行くんですか？」

「へっ？」

「やつぱり風丸センパイとですか!？」

「えつと、なんでそこで一郎太くんの名前が出てくるのかな……？」

急に出て来た風丸の名前に驚いて吹き出しそうになったのを堪え、私は冷や汗を垂らしながら尋ねる。

「だってせつかく2人で出かけれるチャンスじゃないですか！ いい口実になりますよ！」

「んー……まあ、確かに」

憧れの風丸とふたりきりでどこかに出かけてみたいという気はある。それが例えスポーツショップだろうと、私的には全然問題ない。むしろどこだろうと構わない。

だけど、問題は相手が誘いにOKしてくれるかだ。

「でも、誘って断られたらどうしよう……」

「大丈夫ですよ！ きつと風丸センパイなら結城センパイの誘いを断ったりはしないですって」

「なんで音無ちゃんがそんなに自信満々な……」

一方その頃風丸の周りでは、鬼道とヒロト、吹雪が風丸を見てニヤニヤしながら問い詰めていた。

「結城ちゃん、この後スポーツショップにスパイクを見に行くみたいだけど、風丸くんは行かなくてもいいのかい？」

「な、なんでおれが……?」

「えっ? いやだって……付き合ってるんでしょ?」

ヒロトのその言葉に、風丸が思わず驚いて吹き出しそうになるが、なんとか堪え、頬を赤く染めながらゴホゴホと咳き込む。

「おっ、その反応は黒かな?」

「いや、まだ付き合っていないって……まったく、急に変な事言わないでくれよ」

「ほう……」

「まだ……ね」

意味深に鬼道と吹雪が相槌を打つ。しかし、風丸は自分の失言に気づく事なく続ける。

「それに、おれが誘っても断られるかもしれないし」

「それなら心配ない。結城ならお前の誘いを断ることはないはずだ」

「なんで鬼道がそんなに自信満々なんだ……」

――

――

――

――

てな訳で、その後の流れで私と風丸は2人でスパイクを見にスポーツショップに寄ることになった。

ちなみに、私も風丸も目的はスパイクを探しに來ただけだが、なぜか2人とも思いつきりオシャレをしてきている。

風丸の方は黒のスニーカーに、ブラウンのチノパン。ゆったりめな長袖の白いTシャツの下からは、黒いヒートテックがちよい見える程度に顔を覗かせる。その上には淡い黄色のパーカーを着ており、ノースリーブな所がこれまたおしやれポイントの一つだ。全体的にカジュアルなコーデで纏められており、完全に私の好みどストライクですわこれ。うん、カッコ良すぎる。もうお腹いっぱいだわ。

ちなみに私はというと、白のスニーカーにベージュのショートパン



ツ。白いロンTの上からは薄いグレーのカーデイガンを羽織り、明るい色で綺麗な清楚感を醸し出しつつカジジュアルに纏める、いわゆるキレカジ系なコーデだ。

どう考えてもたかだかスポーツショップに寄るために着てくる服装ではない。

「じゃあ、これにしようかな」

私が悩んだ末、気に入ったスパイクを見つけたため、とうとうふたりきりのスポーツショップデートは終わりを迎えてしまう。

あんまりここで長居しても、お店にも迷惑だと思おうし、正直言つてスポーツショップではデートなんて気分には中々なれない。まあそこそこノリノリだったけど……。

「この後どこか行くか？」

風丸からそう告げられ、私は名残惜しいが応える。

「うん、そうだね……えっ？」

あれ？ 風丸今なんて言った？

「さて、どこ行こうか？」

「えっ、あ、えーと……どこにしようか」

これは……我が春が来たかもしれない。

しかし特に行く当てが思い浮かばず、この世界に転生したばかりでそこまで稲妻町に詳しくなかった私は、とりあえず風丸に今回のデートプランを託した。といっても風丸が行きたい所ならどこでもいいけど。

そして結果的に、商店街をぶらぶらして散歩がてら、良さげな店があれば入ろうというのんびりなデートとなった。

「そういうえば一郎太くんの私服初めて見たけど、結構オシャレさんなんだね」

ごめん、結構オシャレどころじゃなくてとんでもなく私好みのオシャレ加減です。恥ずかしくて嘘つきました。

「結城こそ、その……凄く似合ってるぞ」

「えっ？ ほ、ホント……？」

なんてことない会話を繰り返しながら、風丸と一緒に商店街を渡り

歩く。たぶん他人から見れば至極つまらないだろうけど、私からすれば感無量です。

ただ、一つだけ懸念を抱いていることがある。

私と風丸の背後からいくつかの不穏な影が後についてきている気がする。というより見覚えのあるマントが物陰から見切れている。あのさ鬼道、尾行するならもうちよいそのマントどうにかしようよ。

結局、最後の最後まで鬼道たちの尾行が気になり、私は風丸とのデートをあまり満喫することが出来なかったのであった。

## 15話 風前の灯火

俺は今、サッカーを続けるか迷っている。

小学生の頃から始まり、中学生に入った時にはとある事件をきっかけに一時的にサッカーから遠のいたものの、仲間の説得に背中を押され、今では日本の代表として世界を相手に戦っている。

正直言うとサッカーは好きだ。これからもずっと仲間たちと一緒にサッカーを続けたい。だが現実はそういう訳にもいかなかった。

俺の父は病院を営んでいる医者だ。そしてその父は、将来俺にその職業を継がせる気である。親なら当たり前のことだ。子供には将来安定した職業、名誉ある仕事をやらせたいと思うはずだ。その考えは分からない訳でもない。でもだからと言って、今この世界大会の予選決勝の舞台間近の時に、ドイツに留学させるなんてあまりにも酷だと思う。

確かに、前々から留学の話は聞いてたし、それを断って先延ばしにしていた俺も悪かった。もしかしたら今までその話題から逃げていたことのツケが回ってきたのかもしれない。しかも今回に限っては父は本気で俺をドイツに行かせる気だ。そう簡単には逃げられない。でも、本心から言うとなんかサッカーをやりたい。

合宿所から練習用の着替えの服を取りに自宅に戻って来ていた俺は、もやもやとした心情の中、どうか父が帰っていませんようにと密かにそう願いつつ、俺は玄関の扉に手をかけた。

「お兄ちゃんおかえりー！」

扉を開けると、打って変わって元気な声が俺の帰りを迎えてくれた。声の主は妹の夕香だ。俺が入ってくるや否や、夕香は小走りで嬉しそうに駆け寄ってくる。

「ただいま、夕香」

頭に手を置いて優しく撫でると、夕香は眩しいくらいの笑顔で俺を出迎えてくれた。数分前まで父のことで悩んでいたが、その瞬間だけ

は記憶から消え去った。

「おかえりなさいませ。これ、洗濯物ですね」

「ああ、頼むよ」

少し遅れて家政婦のフクさんが奥から顔を出す。今は亡き母の代わりに身の回りの世話をしてくれている。

汚れた服をフクさんに預け、新しい着替えを取りに自分の部屋へ入ると、夕香は楽しそうに今日あった出来事などを一生懸命に話しかけてくる。

「えつとえつと！ それとね、エリちゃんとミキちゃんと、マイちゃんとかでなわとびをして、あとてつぼうもしたんだよ！」

夕香は一時期事故に遭って入院していたことがあり、その期間中は当然学校に行けていない。退院してから他の子と上手くやれているか少し気になっていたが、どうやら杞憂だったようだ。友達と遊んだ内容を楽しそうに話している夕香を見て、俺は安心したように頬を緩める。

「いっぱい遊べたんだな」

「うん！ 明日もね、遊ぶ約束したよ！」

「そうか……良かったな」

「あゝあ、早く明日にならないかなあ」

ベッドに座って夕香と話している間に、新しい着替えの服をカバンの中に入れ終えた俺は、この時間が名残惜しいと思いつつも立ち上がる。

「じゃあ、お兄ちゃん合宿所に戻るよ。そろそろ行かないと」

「え〜！ もう行っちゃうの!?!」

夕香がまだ話し足りないと言っても言わんばかりに俺の服にしがみつき、残念そうに眉を落とす。

「夕香ちゃんいけませんよ。修也さんは今、毎日練習で大変なんですから」

フクさんが優しく諭すように夕香を宥める。

「むう、つまらないなあ……」

ほんの少しだけむくれた様子で呟く夕香の頭に手を置き、俺は目線

を合わせるようにしやがんで話しかける。

「またすぐ戻ってくるよ」

「……うん、わかった!」

少々残念がりつつも、納得してくれた夕香は元気よく応え、その顔には再び笑顔が戻る。

「気を付けて、お戻り下さいね」

「ああ、ありがとうフクさん。行つてきます」

玄関まで見送りに来てくれたフクさんに礼を言い、夕香に再度別れを告げる。といつても、また近いうちに会えるはずだ。そう思いつつ靴を履き、立ち上がって玄関を出ようとしたその時、ちょうど玄関の扉が開き、外から父の顔が見えた瞬間俺の表情は固まった。なんというタイミングの悪さだ。

「お帰りなさい……父さん」

父も俺の姿を認識した途端に顔を曇らせる。

中へ入ると無言のまま三和土で靴を脱ぎ、スリッパに履き替える。そして俺に背を向けたまま、父は立ち止まり口を開く。

「こんな時間からどこへ行く……?」

「……合宿所に、戻ります」

そのまま俺は逃げるように玄関から家を出る。未だに俺がサッカーをやることに否定的な父に対して、正面から話し合おうとすることが出来ない自分への情けなさと、そんな中途半端な気持ちでサッカーをしてしまうやるせなさで俺は自分がどうすればいいのか、本当はどうしたいのかが見つけられずにいた。

このまま父の言うことを聞いてドイツに行くべきか、父を説得して仲間たちとサッカーを続けるべきか。

合宿所への帰路につく中、俺は一人で葛藤していた。



私は今、非常に胸アツな必殺技の特訓を目の前にしている。

時刻は昼頃。予選の決勝相手がまだ決まっていない段階のため、監督から自主練の指示を受けていた私たちは、己の必殺技に磨きをかけるため自身のシユート技だったりドリブル技だったりの技の練度を高めていた。

そしてその中でも、これからの強豪たちを相手にするのに強力な武器となるだろうと虎丸が考案した必殺技「タイガーストーム」の特訓は、みんなの期待の目もあり注目されていた。

イナズマジヤパンのエースストライカー豪炎寺の「爆熱ストーム」と、ズバ抜けたセンスと身体能力を持つ虎丸の「タイガードライブ」の連携必殺技であり、個々でも強力な二つを合体させてより強力にするという安易な発想だが、事実今後の武器になる可能性を強く秘めていた。

「タイガードライブッ！」

虎丸のシユートは上空に飛んでいき、それに合わせるように豪炎寺が高く飛び上がりながら炎を纏った左足でボールを蹴りつけ、シユートにチェインを重ねる。

「爆熱……ストオームッ!!」

まるで炎を纏った虎のようなパワーが乗ったシユートは、しかし途中でそのパワーが分散してしまいゴールを大きく逸れてしまう。

「まだタイミングがズレている。2つの技を完全にシンクロさせるんだ」

「はいっ!!」

「面白いモン始めやがったなあ」

「あれが完成すりゃ、まさに無敵だぜ」

土方と綱海が2人の特訓の様子に期待の眼差しを向ける。あれ、ていうか2人も確か連携技の特訓してたよね？

「そういうえば土方は最近どう？ 吹雪と連携技の特訓進んでる？」

「おっ、よく聞いてくれたな！ それがよ、あともう少しで完成しそうなんだよ」

「ほう、そりゃ楽しみだね。綱海の方は？」

「へっ？ 俺か？」

「えっ、うん。壁山と連携技の特訓してるんじゃないの？ 前に食堂で言ってたやつ」

「あー……あれな」

私が聞いてからさも今思い出したかのように綱海が若干遠い目をする。ああ、こりや進んでないな。

「なんていうかこう、必殺技のイメージはなんとなく浮かんでるんだけど、どうもおれと壁山でやるような感じじゃないんだよなあー」

「ふーん、ちなみにどんな感じ？」

完全に言い訳にしか聞こえないけど、一応イメージだけは出来てるみたいなので尋ねてみる。

「まずこう2人で飛び上がって、バーンとやってガツとしてドーンとぶちかますんだけどよ」

「うんゴメン、全ツ然分かんないんだけど!？」

残念ながら擬音満載の円堂語は私には通じない。もしもほんやくコン〇ヤクがあつたとしても多分理解できないだろうね。

「ええ？ 割と分かりやすく説明したつもりだけどなあ。まあ要するにあれだ、ノリだよノリ！」

「いや、全く要せてないよ……」

「つまりは考えるより感じろってこつた！ 頭ん中で色々考えるより、直感を信じた方が良い時もあんだよ」

「ウシシ、アンタの場合はいつも直感で動いてるように見えるけどね」

木暮が私の背後から顔だけを覗かせて軽口を叩く。

それを聞いて綱海が不機嫌そうに木暮を睨むが、自分でもそう思っているのか言い返しはしなかった。おい、否定はしないのかよ。

「ふーん……直感ねえ……」

綱海の言葉を聞いて、私は腕を組んで少しだけ考えてみる。確かに直感を信じるのは悪くはないと思う。それは長年の経験とかその時の閃きで突然やってくるもので、何の確証もないけどどこか信憑性の湧いてくるような不思議な感覚だ。それに身を委ねるのも一つの手段ではあるか……。

ふと、ちらりと豪炎寺と虎丸の「タイガーストーム」の特訓風景に目を向ける。

「今の！ さつきよりも、いい感じじゃなかったですか!？」

「全く駄目だ、タイガードライブの速度が遅い！ だから、俺の蹴りがトップスピードから打てない。もう一回だ！」

「は、はい！」

「豪炎寺のやつ、今日はやけに熱いな」

いや、あれは見る限りでは気合が入ってるというよりかは何かに駆られて焦っているようにも見える。私の思い過ごしならそれでいいけど、もし1人で何か隠していることがあるなら多分それが解決しない限り「タイガーストーム」は完成しないだろう。それだけ連携必殺技は2人の息を完璧に合わせないと出来ない。

とその時だった、何処からともなく響木さんがグラウンドに入り、豪炎寺に近づいて行く。

「豪炎寺、ちよつといいか？」

「はい……?」

「理事長が呼んでいる。来てくれるか」

「……はい、分かりました」

突然の響木さんの訪問に戸惑っていた豪炎寺だったけど、理事長から呼び出しを受けていることを聞いた途端に何かを悟ったらしく、覚悟を決めたように重い足取りで理事長待つ校舎へと向かっていった。



## 16話 泥だらけの純情

それから少しだけ月日が経った数日後、メガネからの情報で私たちはイナズマジヤパンの次の対戦国がいついに判別した。

その間にも豪炎寺が相変わらずもどかしそうに練習してたり、円堂の元へ亡くなったはずの大介さんからの謎の手紙が届いたり、日に日に飛鷹が成長してたりと色々あったけど、あえて私はそこへは深く介入したりしなかった。

ぶつちやけた話、私が割って入ったところでチームの雰囲気は良くなる話題とは思えなかったし、最終的には良い形で話は終わるはずだからだ。逆に転生してきた私が変に首を突っ込んで悪い方向に進むことだってありえる。

私にとつて、記憶上この時期の豪炎寺が日本代表を抜けるか抜けないかの流れは、かなりデリケートな部分だと思ってる。迂闊に触れて未来を変えてしまえば、それこそ本当に豪炎寺が去って行ってしまうかもしれない。でもそれは嫌だ。だからここは、円堂たちを信じて深く立ち入らず、チームを結束させるためのサポートに徹する。

「で、どっちが勝ったんだ？ 韓国か？ サウジアラビアか？」

今日は韓国とサウジアラビアで準決勝戦が行われており、そのどちらか勝った方が私たちイナズマジヤパンと決勝で戦うのだ。

「ふふん、どっちだと思えますか？」

「じれったいからさっさと教えてください！」

メガネが無駄にもったいぶり、それにイラついた綱海がメガネに近づき迫る。うん、ナイス綱海。あと1秒でも遅かったら私がそいつをぶん殴ってたよ。

「か、韓国ですよ！ それも、4―0で完勝ですよ！」

私たちのこれまでの対戦履歴は、オーストラリア戦で2―1の白星。カタール戦で3―2の白星と、勝ち進めてはいるけど辛勝といった印象があり、なかなかの苦戦を強いられてきた。でも韓国はサウジ

アラビアを相手に無失点に抑え、さらに4点もゴールを奪っている。サウジアラビアも決して弱い国ではない。この結果を聞いて、韓国の強さが否応にも伝わったイナズマジャパンのメンバーだった。

けど、私は知っている。

「そうか、やはり韓国か……面白い！」

「相手にとって不足はねえぜ！」

「さすがは優勝候補ね……でも、私たちだって負けてられないわ！」

鬼道がキラリとゴーグルを光らせ、綱海が自らに気合を入れ直し、木野がみんなを鼓舞する。

「ああ！ そうと決まれば、今から必殺技の特訓だ！」

イナズマジャパンの中に、相手がどんなに強敵だろうと臆したりするやつなんていない。みんな前を向いていつだって突き進もうとしているんだ。勢いなんてその場だけのものかもしれないけど、時には爆発的なパワーを生む可能性だってある。

円堂の掛け声とともに、みんなグラウンドへと向かおうとする。けど、そこへ久遠監督が立ち塞がる。あれ、この場面見覚えあるな……。確かオーストラリア戦でもあったような。

「その必要はない」

「ええ!? でも、もうすぐ豪炎寺と虎丸、それに吹雪と土方の必殺技が完成しそうなんですよ!?!」

「お前達にはあそこで練習をしてみよう」

そう言った監督の指先には、サッカーグラウンドがそのまま数センチくり抜かれ、その中に泥が浸された光景が見えた。ああ、なんかうる覚えだけど、確かにここで練習してた円堂たちを映像で見た気がする。

みんなで近づいてよく見てみると、やっぱりくり抜かれたグラウンドには目一杯泥が浸かっていた。

「決勝戦までの3日間、お前たちにはここで練習してもらおう」

「どういうことですか？ こんな泥の中で練習するなんて」

「それより必殺技の特訓をすべきじゃないんですか？」

「必要ない。お前たちは私の指示通りにしていれば良い」

風丸と鬼道が反論するが、有無を言わず却下。

思わず「うわあ……」と声を漏らした私だったが、久遠監督に睨まれ、そこは苦笑いで誤魔化す。相変わらず多くを語らない人だな。一歩間違えればストライキや練習放棄をされかねないんじゃないかな。まあ、久遠監督ならされても文句は言わないだろうし、何より切り捨てるんだらうけど。

「本当に、こんなところで練習すんのかよ……」

木暮が立向居の陰に隠れてあからさまに嫌そうな顔をする。そりやそうだ、誰だって泥の中に自ら飛び込んでいくやつなんてそうそういない。余程の理由がない限りはの話だけど。

誰も泥の中に入ろうとしない中、豪炎寺がスツと前に出てそのまま躊躇することなく泥の中に足を突っ込む。

「豪炎寺……！」

そしてボールを泥の上に落とすが、普通の地面のように跳ね返る訳はなく、泥が衝撃を吸収しさらには跳ね返って豪炎寺のユニフォームを汚す。が、豪炎寺の顔色は変わらず、そんなことは御構いなしの様子だ。そしてさもいつも通りの練習をするかのように、ドリブルをつき始める。

それを見て、円堂も意を決したように勢いよく泥の中に入る。

「豪炎寺！」

円堂がパスを要求する。豪炎寺もそれに応えるようにパスを出すけど、泥に足を取られ円堂の少し手前に落ちてしまう。そうなるよりは泥が跳ね返り、今度は円堂のユニフォームを汚す。

「円堂！」

今度は豪炎寺がパスを要求し、ゴール前まで走り込んで行く。円堂はそれに合わせるように力強くパスを出した。

「はあく、スパイク買ったばかりなんだけどなあ……」

ぼそりと呟き、トホホと諦めたように苦笑しつつ私も泥の中へと足を踏み入れる。正直冷たいし気持ち悪いし最悪だけど、2人の様子をみて何もしない訳にはいかないし、なにより勝つ為に必要とあればなんだってやってやる。

円堂と豪炎寺が泥の中に入った時点で皆は既に驚いていたようだが、私が入ったことはもつと意外だったみたいで、皆は顔を見合わせて驚いていた。

ただ、やがて心を決めたように一人、また一人と泥のグラウンドへ入っていく。



「行くぜ円堂！」

「おう！ 来い！」

綱海が勢い良くボールを蹴り、シュートを放つ。が、泥に足を取られ見事に空振る。

すぐ側では風丸がドリブルをついていたが、泥の上ではボールが転がらず、上手く進めずにいた。

「これじゃまともにドリブルもつけないぞ……」

風丸や綱海だけでなく、他の皆も泥に足を取られて転げたり、倒れたりしていたけど次第に慣れてきたのか、中には上手に泥のコートを使いこなしているメンバーも徐々に現れ始めた。

「ヒロトくん！ こっち！」

「うん、結城ちゃん！」

既に慣れ始めたメンバーの大半は、もうほとんどドリブルをつかなくなっていた。そう、この泥のコートでプレイする上で、重要なのはいかに泥の上にボールを落とさないか。そのことに気付き始めていた。

「いくよ緑川くん！」

空中でボールをトラップした私は、そのまま宙に浮いた状態で体を捻って緑川にパスを出す。そのパスに合わせるように緑川が飛んでダイレクトでシュートを放つ。

「みんな、少しずつ上手になってきてる」

冬花がそう眩くが、次の瞬間、目の前では緑川が着地に失敗し泥へとダイブしてしまっていた。その様子をマネージャーの一同は同情の眼差しで見つめる。

「あらら、やっちゃった……」

木野が苦笑しつつ眩く。

私たちも泥の上でプレイするから大変っちゃ大変なんだけど、一つ思ったのは、この練習が終わった後のユニフォームとか洗濯するマネージャーも大変なんだろうなって。

## 17話 それぞれの想い

さて、ついに決勝戦の試合当日がきた。

雷門の校門前にはスタジアムへの足となるイナズマキャラクターバンが停まっており、その周りには選手の皆さんとマネージャー達が集合していた。ある一部を除いて……

「あれ？ 久遠監督とふゆっぺは？」

「先にスタジアムへ行ってるらしいわ」

「なら、これで揃ったな。じゃあ出発だ！」

円堂の誰に問うでもない疑問の声に、木野が応える。そして円堂の号令で、みんなが徐々にキャラバンに乗り込んでいく。

円堂は不思議に思わなかったみたいだけど、なぜに選手を置いて監督だけ先にスタジアムへ向かったのか疑問に思うのは私だけ？ 私が細かいことを気にする女なだけなの？

さて、軽い自虐はそこまでにしておいて、各々が適当にもしくは仲の良いメンバー達で座席に座っていく中で、私は風丸の隣というライブコンサートの最前列並みの特等席を見事にゲットした。

「この試合に勝てば、ついに本戦に出られるんだよな！」

隣にいる綱海がちよっとばかし残念だけど……。まあ嫌いなキャラじゃないし、むしろとっつきやすいから、どちらかといえば好きな方なんだけどね。

「でも相手はあの韓国だからね。一筋縄ではいかないんじゃないかなあ」

なんたってあの美しさと実力を兼ね備えた、まさに神クラスのアフロデイがいるんだからね。あとは元エイリアのガゼルとバーンだけ。もうその三人がいれば最強じゃない？ あと一人だれか忘れてするような気がするけど、全然思い出せないな。まあいいや。

「アジアの中でもトップレベルの強さって聞くからな。でもまあ、相手にとって不足はないだろ？」

風丸がなかなか強気な発言をする。まるで円堂みたいな言い回しだね。その表情もどこか凛々しくて、強い相手と戦いたくてうずうずしてるって感じだ。この短期間で変わったね風丸。最初の頃は俺なんて……って言ってたのに。

「へっ、確かにな。波は高い方が乗り甲斐があるってもんよ！」

そんな風丸に触発されたのか、綱海もニヤリと口角を上げ、拳を作っついていかにもやる気満々といった様子。うんうん、やる気があるのはいいことだ。けど、あんまり出し過ぎて空回りしないようにね。

「なんにせよ、今までの特訓の成果を発揮する時だね！」

「そうだな！」

いい感じにお互いの士気を高められた所で、急にキャラバンが甲高いスキール音を立てながら停止した。いきなり急停止したもんだから、座席に座っていたみんなが前のめりになりながらも耐え、やがて顔を上げて何があったのか状況を把握する。

「皆んな大丈夫か!？」

円堂が立ち上がってまず皆んなの安否を確認する。幸いにも怪我人はおらず、きちんと皆んなシートベルトをしていたようだ。不動と飛鷹もちゃんとしたんだね、意外。

「古株さん！ どうしたんですか!？」

急いで木野がドライバーク株さんに声をかける。と、古株さんはあまりの驚きに声を失いつつも、フロントガラスの前方を指差す。そこには道路のど真ん中に陣取る、明らかに不良っぽい出で立ちのヤンキー達がたむろしていた。先頭にはいかにもリーダー格っぽい男が単車に跨ってこちらをニヤニヤしながら見ていた。感じ悪っ！

皆んなが窓から顔を出し、誰だアイツらの嫌悪感を露わにする中で、飛鷹だけは顔をしかめて目の前の不良たちを睨んでいた。

「お久しぶりですねえー、飛鷹センパイ！ そう怖い顔しないでくださいよおー」

喋り方からしてウザい。

あとよく見たら跨ってるの単車じゃなくて改造したママチャリじゃん。ダサっ。無駄にめっちゃ鬼ハンだし。

「カラス!! てめえ何のつもりだ!」

ドスの効いた声で飛鷹が威圧するが、全く気にする様子もなくそのカラスと呼ばれたリーダー格のチャリ野郎は続ける。

「これから大事な試合らしいじゃないですかあー。なんでえー今まで世話んなった奴らが駆けつけてくれたんすよおー」

その後ろでは5、6人程度のお仲間と見られる輩がこちらをジロジロと面白そうに眺めていた。

そんな中、円堂と綱海、飛鷹はキャラバンを降りて不良グループの前に立つ。

「そこを退いてくれ、おれ達はスタジアムに行かなきゃならないんだ」「ええー? セっかく応援に来たのに追いつ返すんですかセンパイ?」

「何が応援だ! タチの悪い嫌がらせじゃねーか!」

短気な綱海が腕を捲って握りこぶしを作る。如何にも戦闘態勢と云ったところだけど、それは悪手だ。

「あれえー? いいんですか? こんなところで暴力なんて、せっかくの決勝戦が『出場停止処分』になっちゃいますよおー?」

相手はそれを見越して、さらに挑発をかけてくる。

さすがの綱海もその一言が効いたのか、苦虫を噛み潰したような表情で一步下がる。このままでは試合が始まってしまふ。もし間に合わなければ韓国の不戦勝で私たちの挑戦がここで終わる。悔しいけど何も出来ず、私たちは固唾を呑むしかなかった。てかホントに間に合わなかったらこいつらフルボッコにしていかな? 太〇の達人には結構自信あるよ私? フルコンボかましちゃうよ?

「お別れです皆さん!」

その時、飛鷹が決心したように沈黙を破る。

「お別れって、どういうことだ?」

「行ってくれキャプテン。オレがこいつらの相手をする」

「飛鷹……」



「元々はオレが招いた問題だ。こんなことで、皆んなの夢を台無しにしたり出来ない」

「へえーやるんですかあ?」

「ああッ!」

飛鷹が覚悟を決めていまにも飛びかかろうとするのを円堂が制す。

「やめろ飛鷹」

「大丈夫ですよ、こんな連中オレ一人で!」

「違う! お前も一緒に来るんだ。誰一人欠けちやいけない。俺たちは全員でイナズマジヤパンなんだ!」

円堂のその言葉に飛鷹が一瞬驚いて目を見開くが、徐々に先ほどよりも落ち着きを取り戻し我に返る。

「キャプテン……」

「ハア、美しい友情つすねえ……そんなもん、全部おれたちがぶち壊してやんよ!!」

雄叫びを上げ、今にも円堂たちに襲いかかってきそうな様子を見て、私は咄嗟に運転席の古株さん越しに車のヘッドライトのスイッチを入れ、さらにはハイビームに切り替えて奴らに目くらましをかます。日中だけど割と近距離だから多少効果はあるはず。

「ぐわあッ! なんだあ!?!」

呻き声に近い声を上げる不良供。意外と効いたみたいだ。

しかし咄嗟に目を覆う奴らと円堂たちの間に、道路脇から新たな数人の人影が飛び出す。これはきつと、増援かな?

「なんとか間に合ったみたいですね、飛鷹さん!」

「またもや不良っぽいグループが登場する。」

ただしこっちの方はなんとというか、正直あんまり脅威というか悪さは感じないかな。まあいうてチャリ野郎たちもそんなに凄みは感じないけど。

「お前たちはまさか、スズメか!?!」

飛鷹の様子からしてこちらでも知り合いのようだ。まあ知ってたけど。ただしこちらは私たちの敵という訳ではないらしい。

「ここは俺たちに任せて、先へ急いで下さい!」

「お前たち……」

「俺たちの夢を終わらせないで下さい。俺たちの夢は、飛鷹さんが活躍することなんです。どうか羽ばたいてください……世界へ！」

その言葉を聞いて完全に吹っ切れた飛鷹は、小さく「ありがとよスズメ！」と呟いて踵を返しキャラバンに乗り込む。円堂と綱海も急いで駆け込み、古株さんがアクセルを全開にして不良たちを後にする。キャラバンが走り出した後も、飛鷹はしばらくの間後方を気にした様子で見つめ、その目には今まで以上の覚悟と闘志を宿らせていた。



その後古株さんの超絶ドライビングテクニックのおかげで私たちはなんとか試合に間に合うことが出来た。スタジアムに着いてすぐさまユニフォームに着替え、久遠監督のミーティングもほどほどに、ベンチの前で皆んなで円陣を組んでいた。

『さあいよいよ始まります！ F F I アジア予選決勝戦！勝って世界への切符を手に入れるのは果たして日本か！韓国か！戦いの火蓋がいま、切って落とされます!!』

「みんな、絶対に勝って、世界へ行くぞ!!」

「「おおーッ!!」」

円堂の掛け声で気合いを入れて、ウォーミングアップを始めようとしたその時、見覚えのある人影がこちらに向かってくるのが見えた。あれはまさか……

「元気そうだね。それでこそ、全力で倒す価値がある」

「あ、アフロデイ……!?!」

おいおいマジですか。

神々し過ぎて直視できないんだけど。何あの髪、めつちやサラッサラじゃん。なんのシャンプー使ったらそんなになんの？ ええ？ 顔小つき。整い過ぎてもはや神だわ……あ、なんだ神か。

ふう、私の思考がちよつと可笑しなことになったけど、気を取り直して改めてアフロデイを見てみる。うん、やっぱり只者じゃない。見た目もそうだけど、雰囲気というかオーラというか。今まで予選で戦ってきた相手とは格が違う。これは確かに一筋縄ではいかないね。と思っていると、アフロデイの背後からニュツと二つの人影が出てくる。

「やつと会えたね」

「長くて退屈してたぜ、決勝戦までの道のりはよ」

「ガゼル!？」

「バーンまで……なぜここに!？」

ボリューミーな白髪を揺らす涼野風介と、真つ赤な赤髪に闘志を燃やす瞳の南雲晴矢がそこに立っていた。

「フツ、彼らもまた、ボクのチームメイトだからさ」

「じゃあ、まさか……」

「そう……ボクたちこそが、韓国代表ファイアードラゴン!」

かつてフットボールフロンティアで戦い、そして対エイリア学園での共闘でもはや戦友となったアフロデイを目の前にし、円堂は言葉を失う。というよりかはいきなり知ってる顔が出てきたもんだから驚きで言葉が出ないみたいだ。

「別に不思議でもないだろう。ボクが母国の代表選手に選ばれても」

私知らなかったけどアフロデイって韓国が母国なんだね。アフロデイくらいのレベルなら日本代表に選ばれてもおかしくないとは前々から思ってたけど、そもそも国籍が違うんじゃないよねそりゃ。

「俺たちはアフロデイからスカウトされてこのチームに入った」

「君たちと、また戦うためにね」

「かつてのボクたちとは思わない方がいい。各々が特訓を重ね、格段にパワーアップしている。そしてなによりこのチームには、チェ・

チャンスウがいる」

そういうとアフロデイ達の横から細目のもさもさ頭が姿を現す。彼がチエ・チャンスウだというのは私は元から知っているが、他のみんなは誰これ状態だ。唯一メガネだけが知っているような素振りを見せていた。

「初めまして、イナズマジヤパンの皆さん。いい試合にしましょう。でも、お気をつけて……決勝戦のフィールドには、龍がいますから」  
「龍……？」

「ではまた、すぐにフィールドでお会いしましょう」

意味深な言葉を残して相手ベンチに去っていくアフロデイ達。

「にしてもアフロデイ達が相手か、これは相当手強いぞ」

「ですが、警戒すべきはあのチエ・チャンスウです」

珍しくメガネが必殺のネーミング以外で口を開く。いつになくメガネ輝かせてるね。

「そんなに凄いやつなのか？」

「……知らないんですか？」

そんなことも知らないのか、といった様子でちよつと小馬鹿にした感じにメガネが口を尖らせる。なんだろう、さっきのチャリ野郎並みにウザいな。殴ってもいいかな。

「フィールドを支配する韓国の司令塔で、その巧みなゲームメイクは、完全なる戦略と言われるほどです。これまでにあらゆる敵を打ち砕いてきたとか」

「イナズマジヤパンで言う鬼道みたいなもんか」

「まあ平たく言うそうですが、頭脳・実力ともに引けを取りません。希代の天才ゲームメーカー、龍を操る者、とそう呼ぶ人もいます」

「すっげえな……でも、面白いじゃないか！ なあみんな！」

「ああ、そうだな」

「龍がなんだってんだ！ だったらこっちは鬼だぜ！」

「……鬼？」

「それって、もしかして『鬼』道のこと？」

「あー、それで鬼か。なるほど……うん？」

綱海の訳の分からない超理論に全員が首を傾げるが、細かいことは抜きにして、とりあえず円堂がシメる。物理的にじゃないよ、この場の雰囲気だよ。

「よおーし！ みんな決勝戦だ、気合い入れて行くぞッ!!」

「「おおー!!」」

それから各々でウォーミングアップを始める。

が、そこで私はふと気付く。みんなやる気は十二分にあるけど、何人か少し雲行きが怪しい。なんとなくだけど、どことなくチームとして一つにまとまってる感じがしない、なんともいかぬ感じがする。飛鷹はさっきの件もあって気負い過ぎる節もあるし、豪炎寺に関しては、これは家庭の事情だからまだ仕方ないのかもしれない。ヒロトと緑川に至ってはバーンとガゼルとの元エイリアの過去もあってか色々深く考え込んでいるみたいだし。

しかもこういう嫌な雰囲気の時に限って……

「やれやれ、厄介な連中が来たもんだ。まあこっちにも、天才ゲームメーカー様がいるから心配ないってか？」

「いいか不動、これはみんなの力を合わせないと決して勝てない試合だぞー!」

「ハッ、いいじゃねーか。どうせオレは今日も出番ナシさ。精々頑張ってくれよ、鬼道クン?」

こいつらの口論が始まるんだもんなー。

この二人実は仲良いんじゃないかってくらいにたまに言い合うよね。まあただ時と場所はホントに考えてほしいんだけど。

「円堂」

そんな時だった、監督が豪炎寺とアップをしていた円堂を呼ぶ。

「はい、なんででしょう監督」

「この試合、イナズマジャパンは勝てると思うか？」

「え……もちろんですよ！ おれたちは絶対勝ちます！ 勝って世界に行きますー!」

「……お前には、何も見えていないようだな。キャプテンでありながら」

「えっ!?!」

円堂の力強い意気込みを即座に否定し、まるで失望したかの様に立ち上がって円堂の横を通り過ぎる。

「今のままでは、イナズマジャパンは絶対に勝てない。それが分からないお前は、キャプテン失格だ」

「なっ!?! どういうことですか監督!」

円堂に背を向けたまま、目線だけを微かに動かして久遠監督は言い放つ。

「今のお前は、チームに必要なということだ」

## 18話 VS 韓国戦

『さあFFIアジア予選決勝の火蓋がいま、切られようとしています！ファイアードラゴンにはかつての強敵アフロディに加え、天才ゲームメーカーと呼び声の高いチェ・チャンスウがいます！対するイナズマジヤパンは……ああーつと!!?』

両チームがそれぞれポジションについて試合がスタートする前に、実況が韓国と日本のスタメン紹介的なものをしている最中、何か衝撃的な光景でも見たかのような驚嘆の声を上げた。

『な、なんと!!キーパーに入ったのは立向居！イナズマジヤパンの守護神、キャプテンの円堂はまさかのベンチスタートです!!』

そう、このアジア予選決勝という大事な大舞台で、久遠監督は何を思ったかあの円堂を差し置いて立向居を起用した。別に立向居が悪い訳じゃない、日本の代表に選ばれたその実力とセーブ率は大したものだ。けどそれでも、イナズマジヤパンの支柱、正ゴールキーパーは誰がなんと言おうと円堂しかない。

まあこの流れも知っていたんだけどね。だけど監督以外は、なぜ円堂を外して立向居を入れたのか分からず混乱しているようだ。

F W 吹雪、豪炎寺

M F 緑川、基山、鬼道、風丸

D F 木暮、土方、壁山、綱海

G K 立向居

そして何を隠そう私自身も混乱している。

そう、かく言う私も円堂と同じくスタメンを外されたのだ。いや、正直今までが自惚れていたのかもしれない。みんな特訓して強くなったし、私みたいなヘボプレイヤーが出る幕はもうないのかもしれない。どうせ私なんて……いや、不動みたく(?)弱気になってはダ

メダ。チャンスがあればきつと出られる、前向きに考えよう。さつさと出せや（貪欲）

「円堂さん……」

立向居が不安そうに呟く。なんだかんだで今大会初出場というだけでも緊張するのに、どこか調子の悪いわけでも無さそうな円堂を差し置いて自分が出ることに対する不安とプレッシャーは、多分相当なものだと思う。

「気にすんな立向居！今は試合に集中しろよー！」

そんな立向居を気にかけて綱海が声をかける。流石、見た目軽いように見えて実は気遣いが出るタイプの良いヤツだ。けどそんな綱海でさえも、その表情はどこか固いようにも思える。やはり円堂がないことによる不安感が拭えていないのか。

私の隣では円堂が思い詰めたような顔でジツとフィールドの方を見つめているし、雰囲気最悪だなコレ。逆に言えば、円堂がいなくなるとここまで歯車が狂い出すのは返って危ないのかもしれない。イナズマジヤパンの精神的支柱である円堂に、そんな意味で頼り過ぎていたのかもしれない。仮に本当の意味で円堂が試合に出られない状況になった時に、こんな状態で果たしてイナズマジヤパンは戦えるのか。

「行くぞ吹雪」

「うん！」

そんな私の思考を遮るように試合開始のホイッスルが鳴り、豪炎寺のキックオフでついに試合が始まる。

早速吹雪がドリブルで相手陣地に切り込んでいくが、アフロデイが前方から走りこんできてプレッシャーをかけにくる。

「吹雪！右サイドだ！」

「ああ！」

右翼から上がってきていた風丸に合わせるようにスルーパスを出し、右サイドから攻め上がる。ボールが繋がった風丸はぐんぐんと加速していき、ドリブルのスピードを上げて一気にペナルティエリア付近まで駆け抜けていく。



途中、中央から上がってきていた豪炎寺、吹雪の方にチラリと目を向け、続けてスライディングで迫り来る相手DFをボールを浮かせて躲す。

「……よし！頼むぞー！」

浮かせたボールをそのままダイレクトで蹴り、ゴール前中央へセンタリングを上げる。

『風丸のセンタリングに豪炎寺、吹雪が詰める！早くも先取点のチャンスだあ!!』

それを見た相手国のチェ・チャンスウが無駄にカツコつけたような意味深なポーズをとって合図を送る。なんだアレ、マイール・ジャクソンか？

なんか横の方からメガネが「アレは!?!」とか呟いて眼鏡光らせてるし。反射して眩しいからやめてほしいんだけど。

さて、チェ・チャンスウの合図のせいかな、豪炎寺と吹雪にはピツタリと相手のマークがついていた。そして風丸のセンタリングの行方はというと、ゴール前中央へ落ちていくのかと思いきや、ここで強烈なカーブがかかり、大きく曲がって豪炎寺達から少し下がった位置にいたヒロトの元へと吸い込まれていく。

「いくよー！流星ブレードツ!!」

空中で一回転しながら繰り出される強烈なハイキックにより蹴り出されたボールは、流星の如く凄まじいパワーを纏い相手ゴールに迫る。多分純粋なパワーだけで言えば、単体技の中では歴代トップクラスの高火力シュートだと思う。なによりカッコイイし。

「大爆発張り手えーツ！」

対する相手キーパーは両手のひらに炎を浮かべ、その手でボールを張り手のように何度も打ち付けていく。次第にシュートのパワーが薄れていき、そして最後はダメ押しに両手でボールを押さえつけた瞬間爆発が起こり、完全に勢いを失ったヒロトのシュートは難なく爆発の勢いに跳ね返されてしまった。

「なっ……弾かれた!?!」

「嘘だろー！ヒロトの流星ブレードが!?!」

『惜しいッ！だが基山のシュートは正面！キーパーのチョ・ジョンスの必殺技に阻まれてしまったあ!!』

ゴール前の豪炎寺、吹雪を囮にして本命をヒロトにしたことさえも見破っていたという訳ね。わざわざ正面から打たせたのも、そっちの方がキーパーの視界が開けてゴールを守りやすくする為か。

サイドを使って揺さぶりをかける鬼道の戦術にも素早く対応して、中々侮れないねチェ・チャンスウ。さっきの意味深なポーズはちよつと気に食わないけど。

「へえ、意外とやるじゃねえかあの7番」

ふと不動が口を開く。ちなみに7番とはチェ・チャンスウの背番号だ。普段ベンチにしているとやはり暇なんだろうか。

「だから言ったじゃないですか不動君、彼は鬼道君にも負けず劣らない、希代の天才だつて」

不動とメガネのやり取りを鼓膜からシャットアウトし、目の前の試合を見ることに集中する。

相手キーパーのジョンスが弾いたボールを鬼道とチャンスウが追いかけるが、ボールはチャンスウの元へと渡つてしまう。まずい、韓国のカウンターが来る。

「涼野、南雲、アフロデイ、上がりなさい！」

「おう!!」

チャンスウのかけ声で3人が一齐にゴール前まで上がりにくる。3人も単体で得点を狙えるストライカーな為、奇しくも先ほどイナズマジヤパンが取った戦術に似ている。誰が囮で誰が本命で来るか分からない。

「ここは通さないっス！」

「行かせるかあ!!」

ゴール前を壁山が固め、土方がボールを持つチャンスウに飛び出してスライディングでボールを奪いに行く。

が、土方の足が届く直前に大きく山なりのセンターリングを上げる。その先に走り込んできているのは……。

「……っ！狙いはアフロデイか！」

「まずいッー」

横で円堂が思わず立ち上がるが、もう遅い。すでにアフロデイはシュート体制に入っている。

そして、私はその姿を見て思わず見とれてしまった。背中から天使のような純白の6枚羽を生やし、空高く飛び上がると同時にボールに白いプラズマのような力を宿らせる。大きく振りかぶってそれを勢い良くアフロデイが蹴りつけると、ベンチからでも伝わるほど強大なパワーを持って立向居が守るゴールへと突き進んでいく。

「凄……」

思わず鳥肌が立ち、言葉が漏れて出た。

シュートの威力、技の完成度、どれを取っても一級品だけど、私が惹かれたのは何よりその美しさだった。ネオジャパン戦で砂木沼が見せた借物なんかじゃなく、本物の。

確かにアフロデイだからこそ、その綺麗な容姿を持っているからこそ魅力があるという点もあるかもしれない。けど私にとってはここは重要じゃない。洗練された動き、純粹な強さと美しさを兼ね備えた、見るもの全てを魅了するかのようなプレー。

エースストライカーのハットトリック。

フアンタジスタの華麗なテクニク。

ゴールキーパーの連続スパーセーブ。

技術や力を持って相手に勝つのはもちろんのこと、観客やオーデイエンスを沸かせるような、見ているだけでも楽しい魅力的なプレーに、私は憧れていることに気づいた。そしてその強い憧れを元に、私の今のプレースタイルが確立されていることも。

「ははっ……」

不意に笑みが溢れた。誰にも聞こえない程度に。こんなピンチの状況なのに、自然と笑ってしまった。今まで何気なくプレーしていたスタイルの根源に今更ながら気づかされるなんて。初めて正面からサッカーと向き合った気がした。

何故だろう、原作知識以外で特にこれといった理由は無いけれど、この試合、私にとって、みんなにとって、チームとして成長する良い

きつかけになるかもしれない。

ふと前を向けば、立向居がガツチリとアフロデイのシュートをキヤツチしていた。



その後、立向居の決死のセーブ虚しくあっさりボールを奪われてしまい、それを取り返そうと豪炎寺の少々危なっかしいスライディングがファウルを取られ、相手のボールからリスタートが始まるうとしていた。

「焦るな豪炎寺、試合はまだ始まったばかりだぞ」

「ああ」

鬼道が気持ちを落ち着かせるように嗜めるが、当の豪炎寺にはあまり響いていないようだ。にやろうまだ親御さんの事でもややもやしてやるな。そんなんでよく虎丸にボールぶつけれたもんだよ。まああの時は私も流石にイラついたけど、虎丸が全部悪い訳じゃないしなあ。

円堂も早く監督の考えに気付いてよ。じゃないと試合出れないよ？

てか監督もちょっとは喋ってよねえ。ここの身内の駆け引き無駄じゃない？

なんていつてる内にボールは蹴り出されてリスタート。土方と相手MFの競り合いで零れたボールが飛鷹の元へ。そしてそのままドリブルで攻め上がっていく。

「飛鷹！あまり持ち過ぎるな！緑川とヒロトがノーマークだ！」

またもや鬼道が静止の声をかける。円堂いないから大変だな鬼道。当然やる気に満ち溢れて周りが見えていない飛鷹はそのままぐんぐんと加速して突っ走っていく。

「うおおおおッ!!」

雄叫びを上げて走るその様はまさに暴走。

これがまだ鬼道や風丸だったらそのテクニクとスピードで突破出来るかもしれないが、ボールを持っているのはまだまだ素人の飛鷹だ。

「なんだこいつ、隙だらけじゃねえか！」

「フツ、所詮その程度のスピードでは……私たちを突破する事など出来ない！」

南雲と涼野が両サイドから挟み、飛鷹の持つボールをいとも簡単に奪ってしまう。

いつもよりもボールの保持率が悪い。みんなの気持ちがそれぞれ別の方向に向いてしまっているために、試合に集中できず連携が取りにくくなっているんだ。一部のメンバーは特に酷い。

「飛鷹さん、どうしてパスを出さなかったのかしら」

その時、珍しく冬花が口を開く。

これは……少し乗っかってみるか。

「緑川さんもヒロトさんも、マークがついていなかったのに」

「単純に周りが見えていないからじゃないかな」

冬花の誰に問うでもない疑問に私が応える。

すると不動を除いた全員がこちらの方を向く。

円堂に監督の考えを少しでも分かりやすくすることで、ピッチに戻るタイミングを早める事が出来るかもしれない。円堂にキャプテンとしての自覚を持たせる良いヒントになるかも。

「あの飛鷹の様子を見るに、あれは緊張とか不安じゃなくて、ただただやる気が空回りしてるんだと思う」

「でも、あそこまで酷いのは見たことないけど……」

「うん、それはたぶん、今までは自分で制御出来てたり、誰かからフォローしてもらってたからだね」

「それが今回の試合で制御出来なくなったってこと？」

「その通り。いつもなら自分で抑えたり、誰かに嗜められるけど、今回はなにかをきっかけに自分でも抑えが効かないくらい高ぶって、あまつさえ誰も飛鷹の心境に気付けなかった」

スポーツにおいて気持ちのコントロールというのは案外大事なも

のだ。気持ちひとつでプレーが変わるとは良く言ったもので、リラツクスしている状態が基本的に一番本来の力を出し切れる。逆に興奮し過ぎていたり、気持ちが高ぶり過ぎると返って望まない結果になることが多い。ついこの前私もネオジャパンとの試合で経験した。

「本来なら誰よりも先にそのことに分かってあげないといけない人がいるんだけど、誰だか分かる？」

「え、えつと……監督とか？」

やばっ、いま吹き出しそうになった。

娘からダメ出しくらう監督……マジ笑えるね。

「ううん、残念だけど違うよ。こういう時は……」

……キャプテンがいの一番に気付いてあげないといけないんだよ。